

正、父近政・至鎮、父家政皆送款。守隆亦固請歸志摩。招其父嘉隆。乃皆遣之。

訓讀 是に於て、東事の處置盡く定る。乃ち西征諸將をして二十八日を以て小山を發せしむ。是の時に當り天下の將士、東西嚮背、來往織るが如し。而して父子兄弟、兩地に分處する者は、迭に危疑を懷き、訛言沸騰す。内大臣、黒田長政を召還せしめて、之に謂つて曰く「卿、正則の心如何と謂ふか」と。答へて曰く「臣、其の他なきを保す。即し他有らば、臣、之を控掣せん」と。乃ち長政に鐵冑を賜うて之を遣る。生駒一正・蜂須賀至鎮・九鬼守隆、其の父は皆西軍に在り。内大臣、之を留めて遣らず。既にして一正の父近政・至鎮の父家政、皆款を送る。守隆も亦、志摩に歸つて其の父嘉隆を招かんと固く請ふ。乃ち皆之を遣る。

通釋 是に於て、東方の事はすつかり始末がついた。二十八日には、西征の諸將を、小山から出發させた。時が時だから、東西兩軍に付いたり、叛いたりするものが、彼方へ行つたり、此方へ來たりで、さながら織るが如くであつた。又親子兄弟でも、上方・江戸と分れて居るものは、互に危み疑ふ心があり、様々の風説が湧き上つた。内大臣は、黒田長政を召し還し、之に向つて曰ふには「貴公は、正則の心はどうだと思ふか」と。長政は答へて曰ふには「正則に異心の無いことは、私が十分保證致します。若し他心があれば、私が引き留めます」と。そこで長政に甲冑を賜はつて、出發させた。生駒一正・蜂須賀至鎮・九鬼守隆等は、其の父が西軍に味方して居た。内大臣は、之を留めて出發させなかつた。既にして、一正の父近政、至鎮の父家政は皆内通した。守隆も亦固く請うて、志摩に歸り、其の父嘉隆を招かうといつた。そこで皆之を出してやつた。

山内一豊之室自大阪馳使告事。以路經敵中。襞書爲笠糾。一豊得之不解而獻。内

大臣還之曰「猶觀也」。一豊又諮堀尾忠氏曰「子何以表志」。忠氏曰「欲納城」。一豊曰「善」。乃自納其掛川城。先是忠氏父吉晴、受内大臣命自濱松赴越前。將守其別邑府中。途遇所知利井重茂者、與俱至刈谷。刈谷城主水野忠重饗之。卒爲重茂所刺。吉晴驚立斬重茂。重茂石田氏所使也。報至小山。曰「吉晴殺二人」。内大臣不憚。衆欲執忠氏。中納言曰「吾識彼父子爲人。是必謬傳也」。已而得實。遣忠重子勝成、還撫其衆。而忠氏首發納城之議。一豊既納掛川。忠氏亦納濱松。中村一榮納駿府。有馬豊氏納横須賀。池田輝政納吉田。田中吉政納岡崎。福島正則納清洲。乃令諸舊臣代守焉。

訓讀 山内一豊の室、大阪より使を馳せて事を告ぐ。路、敵中を經るを以て、書を襞んで笠糾と爲す。一豊、之を得、解かずして獻す。内大臣、之を還して曰く「猶觀るがごとし」と。一豊、又堀尾忠氏に諮うて曰く「子、何を以て志を表すか」と。忠氏曰く「城を納れんと欲す」と。一豊曰く「善し」と。乃ち自ら其の掛川城を納る。是より先、忠氏の父吉晴、内大臣の命を受けて、濱松より越前に赴く。將に其の別邑府中を守らんとす。途に知る所の利井重茂と云ふ者に遇つて、與俱に刈谷に至る。刈谷城主水野忠重、之を饗す。卒に重茂の刺す所と爲る。吉晴驚き、立ちどころに重茂を斬る。重茂は、石田氏の使ふ所なり。報、小山に至る。曰く「吉晴、二人を殺す」と。内大臣憚らず。衆、忠氏を執へんと欲す。中納言曰く「吾れ彼れ父子の人と爲りを識る。是れ必ず

謬傳ならん」と。己にして實を得たり。忠重の子勝成を遣はし、還つて其の衆を撫せしむ。而して忠氏、首として城を納るゝの議を發す。一豊、既に掛川を納る。忠氏も亦、濱松を納る。中村一榮は駿府を納る。有馬豊氏は横須賀を納る。池田輝政は吉田を納る。田中吉政は岡崎を納る。福島正則は清洲を納る。乃ち諸舊臣をして代つて守らしむ。

通釋 山内一豊の内室は、大阪から、急の使を馳せて、變事を告げた。しかし、路が敵の中を通つて居るので、手紙を細く疊んで笠の紐となした。一豊が之を受取ると、其の儘解きほごさないで差し出した。内大臣は其の手紙を還して曰ふには「見たも同然だ」と。一豊は堀尾忠氏に問うて曰ふのに「貴公は、何うして、他意なき自分の志をしめすか」と。忠氏が曰ふには「城を差し出さうと思ふ」と。一豊は「成る程、夫れは善からう」と云つた。そこで自ら進んで掛川城を差し出した。以前、忠氏の父吉晴は、内大臣の命令を受け、濱松から越前に赴いた。そして別邑なる府中を守らうと思つた。途中で、知り合の利井重茂に出合ひ、一緒に刈谷へ往つた。刈谷の城主水野忠重は、之に馳走した。そして重茂に刺し殺された。吉晴は、驚き憤り、立どころに重茂を斬つた。此の重茂は、石田三成に使はれて、斯かる事を仕出かしたのである。此の報知が小山に到着した。曰ふのに「吉晴が、二人を殺した」と。内大臣は不機嫌であつた。そこで、皆の人は、吉晴の子である忠氏を捕へようとした。中納言が曰ふのに「俺は彼等親子の人となりを知つてゐる。思ふにこれは間違ひであらう」と。間もなく其の事實が分明した。忠重の子の勝成を遣はし、還つて其の部下をも鎮撫させた。忠氏は、眞先きに、城の明渡しといふ相談を申し出した。一豊は、既に掛川を差し出した。忠氏も濱松を差し出した。中村一榮は駿府を差し出した。有馬豊氏は横須賀を差し出した。池田輝政は吉田を差し出した。田中吉政は岡崎を差し出した。福島正則は清洲といふや

うに、各將何れも城を差し出した。そこで、此等の城は、諸舊臣をして、代つて守らせた。
語釋 襲書爲笠料(襲はたむ。料は三つ組みの繩。書面をたんで笠の紐とし、敵にさとせぬやうに)

海道於是關。而山道未關。本多正言建策。擢木曾氏、遣臣山村良勝、千村吉晴、歸徇木曾。盡逐西吏。命遠山友次、徇東美濃。取其故邑。西尾光教、以美濃兵來歸。眞田昌幸、以信濃兵叛去。昌幸長子信幸、素受我眷顧。固諫之。昌幸使之赴小山。而自與次子幸村西走。夜過沼田。沼田信幸、邑也。欲入見其婦。婦本多氏忠勝女也。辭曰「良人不同歸。是必有故。妾不敢私開門」。欲見其子。曰「公欲抱孫。何必今日」。遂命士卒乘障。昌幸不能強。去歸。上田厲兵以俟我軍。

訓讀 海道、是に於て關く。而して山道は未だ關けず。本多正言、策を建つ。木曾氏の遣臣山村良勝・千村吉晴を擡んで、歸つて木曾を徇へ、盡く西吏を逐はしめ、遠山友次に命じて東美濃を徇へ、其の故邑を取らしめんと。西尾光教は美濃の兵を以て來り歸す。眞田昌幸は信濃の兵を以て叛き去る。昌幸の長子、信幸、素より我が眷顧を受く。固く之を諫む。昌幸、之をして小山に赴かしめ、自ら次子幸村と西走す。夜、沼田を過ぐ。沼田は、信幸の邑なり。入つて其の婦を見んと欲す。婦は本多忠勝の女なり。辭して曰く「良人同じく歸らず。是れ必ず故有らん。妾敢て私に門を開かず」と。其の子を見んと欲す。曰く「公、孫を抱かんと欲せば、何ぞ必

すしも今日ならん」と。遂に士卒に命じて陣に乘らしむ。昌幸強ふる能はず。去つて上田に歸り、兵を厲し以て我が軍を疾つ。

通釋 斯くして東海道は開けた。けれども東山道は、まだ開けなかつた。そこで本多正言は、一つの策を建てた。木曾氏の遺臣、山村良勝、千村吉晴を遣はし、歸つて木曾の地方を徇へしめ、大阪方の役人は盡く逐ひ拂はせた。又、遠山友次に命じて、東美濃を徇へ、其の故邑を取り還させた。すると、西尾光教は、美濃の兵を率ゐて來り歸した。が、眞田昌幸は、信濃の兵を以て叛いて仕舞つた。昌幸の子信幸は、以前から、我が眷顧を受けて居た。それで固く之を諫めた。昌幸は之を小山に赴かしめ、自分は、次子の幸村と共に、西の大阪方に走つた。夜、沼田を通つた。沼田は、信幸の城下である。城へ這入つて、其の婦に逢はうと思つた。婦は、本多忠勝の娘である。すると之を斷つて曰ふのに「わが夫が一所に歸られぬのは、きつと何か譯があることせう。妾は自分勝手に門を開くことは致しませぬ」と。然らば其の子供に逢はうと思つた。すると曰ふのに「貴方が、孫を抱きたいと思召すなら、夫れは何も今日には限りますまい」と。彼れ此れするうち、士卒に命じて、牆に上り、守備の用意をさせた。流石の昌幸も、無理に強ひる譯には行かない。去つて、上田へ歸り、兵を勵まして、徳川家の軍勢の來るのを待ち構へて居た。

我軍分爲二内大臣由海道中納言由山道令定未發内大臣乃赦淺野大野土方三人以土方雄久與前田利長有姻遣之北陸畠利長使發兵扼越前令富田知信

稻葉道通等就封伊勢各自爲守又發間使予書于黑田孝高加藤清正遙授方略使統西海將士以撓西軍之後

訓讀 我が軍、分れて二と爲り、内大臣は海道よりし、中納言は山道よりす。令定つて未だ發せず。内大臣乃ち淺野・大野・土方の三人を赦す。土方雄久、前田利長と姻有るを以て、之を北陸に遣はし、利長に畠め、兵を發して越前を扼せしむ。富田知信・稻葉道通等に、封に伊勢に就き、各々自ら守を爲さしむ。又間使を發し、書を黑田孝高・加藤清正に予へ、遙に方略を授け、西海の將士を統べ、以て西軍の後を撓さしむ。

通釋 我が軍は、分れて二隊となり、内大臣は東海道から進み、中納言は東山道から進んだ。命令は既に定まつたが、まだ出發はしなかつた。内大臣は、淺野・大野・土方の三人を赦して遣つた。土方雄久は、前田利長と親類の間柄だから、之を北陸へ遣はし、利長を勵まし、兵を出させて、越前を扼させた。富田知信・稻葉道通等には伊勢の領地に赴かせ、各自に、守備を爲さしめた。又、しのびの使を出し、黒田孝高・加藤清正に手紙を遣り、謀を援けて、西海道の將士を説き從はせ、西軍の後をかき亂させるやうにした。

孝高益以書諭小早川秀秋歸款於我秀秋自伏見送書小山謝曰僕發筑前來上國本將會於東征不圖爲賊所要共攻伏見勢不可獨異請蒞大旆來倒戈以償前罪初西軍向伏見以爲當一鼓而取也已而我諸將捍禦不屈敵益用大礮巨煩攻

擊十晝夜。城中有甲賀人。長東正家部兵與之相識。浮田秀家命射書於城上。誘其內應。曰「不聽則礮汝擊。」

訓讀 孝高、益々書を以て小早川秀秋を諭し、款を我に歸せしむ。秀秋伏見より書を小山に送り、謝して曰く「僕、筑前を發して上國に来るは、本將に東征に會せんとす。圖らざりき、賊の要する所と爲り、共に伏見を攻めんとは。勢獨り異なる可からず。請ふ、大旗の來るを俟ち、戈を倒し以て前罪を償はん」と。初め西軍、伏見に向ひ、以爲へらく、當に一鼓して取るべしと。己にして我が諸將、捍禦して屈せず。敵、益々大敵巨煩を用ひて、攻撃すること十晝夜。城中に甲賀の人有り。長東正家の部兵、之と相識る。浮田秀家、命じて書を城上に射させ、其の内應を誘ふ。曰く「聽かずば則ち汝の撃を礮せん」と。

通釋 孝高は、手紙で小早川秀秋に諭して、愈々徳川氏に内通させるやうにした。秀秋は、伏見から手紙を小山に送り、御託をして曰ふのは「私が、筑前を出發して、上方へ參りましたのは、東征の軍に會する積りでした。圖らずも、賊の爲に待ち受けられました。そして無理から、一緒に伏見を攻めようといはれました。其の場の勢からでは、自分獨り別に行動も出来ません。止むを得ず攻めては居ますが、大軍旗の來るを待つて、戈を倒し、賊を討つて罪を償ふことに致しませう」と。初め、西軍が、伏見に向つた時には、一と揉みで攻め落せると思つて居た。所が、徳川氏の諸將は固く防いで、容易に屈しない。敵は益々大砲まで用ひ出し、十晝夜に互つて攻撃した。城中には、近江甲賀郡の人が居つた。長東正家の麾下の兵士が、之と知り合ひであつた。浮田秀家は、之に命じて、手紙を城上に射込ませ、内から裏切するやう誘つた。そして曰ふのに「もし命を聞いて内應し

なければ、貴様の妻子は、礮にして殺すぞ」と。

八月朔、甲賀人縱火松城。西軍爭登。秀秋逼名越堡。松平家忠松平近正力戰死之。島津義弘逼西堡。内藤家長開門而射。殪十餘人。被創退入。作書附一卒曰「汝潰圍達之關東。」遂縱火自殺。其子小一郎與安藤定次佐野正吉山岡甫安皆死之。外城已陷。鳥居元忠之卒勸其自殺。元忠曰「未也。殺敵一人亦非報國乎。」乃嬰壁亂射。殺傷過當。敵發火箭焚樓櫓。隨撲隨燎。元忠知不可守。麾兵二百開門血戰。七合七克。敵衆群進。我兵皆斃。至廝養之卒無不戰死。元忠杖薙刀踞階而息。敵人雜賀重次進欲擊之。元忠曰「吾本城大將也。授汝首。重次橫槍揖曰「僕豈敢君請自刃。」元忠乃使重次釋己鎧。自割腹而死。年六十二。重次剄而裹之。并諸將首傳于大阪。賈人某竊元忠首葬之。知恩院。是日我前軍發江戶。內大臣發小山。四日至江戶。得伏見之報。哀慟。恤戰死者。子皆令襲封。

訓讀

八月朔、甲賀の人、火を松城に縱つ。西軍争ひ登る。秀秋、名越の堡に逼る。松平家忠・松平近正、力

戦して之に死す。島津義弘、西堡に逼る。内藤家長、門を開いて射て十餘人を斃す。創を被つて退き入る。書を作り一卒に附して曰く「汝、圍を潰して之を關東に達せよ」と。遂に火を縱つて自殺す。其の子小一郎、安藤定次・佐野正吉・山岡甫安と、皆之に死す。外城已に陥る。鳥居元忠の卒、其の自殺を勸む。元忠曰く「未だし。敵一人を殺すも、亦國に報ゆるに非ずや」と。乃ち壁に嬰つて亂射す。殺傷過當す。敵、火箭を發して樓櫓を焚く。隨つて撲ては隨つて燎く。元忠、守るべからざるを知り、兵二百を麾き、門を開いて血戦す。七合七克。敵衆群り進み、我が兵皆斃る。斯養の卒に至るまで、戦死せざるは無し。元忠、薙刀を杖つき、階に踞して息ふ。敵人雜賀重次進んで之を撃たんと欲す。元忠曰く「吾は本城の大將なり。汝に首を授けん」と。重次、槍を横へ揖して曰く「僕豈に敢てせんや。君請ふ、自刃せよ」と。元忠乃ち重次をして己の鎧を釋かしめ、自ら腹を割いて死す。年六十二。重次劉ねて之を裏み、諸將の首を并せて、大阪に傳ふ。賈人某、元忠の首を竊んで、之を知恩院に葬る。是の日、我が前軍、江戸を發す。内大臣、小山を發す。四日、江戸に至り、伏見の報を得て哀慟す。戦死者の子を恤み、皆封を襲がしむ。

通釋 八月朔日、其の甲賀の人が、火を松城に放つた。すると西軍は争つて城壁に攀ぢ登つた。秀秋は、名越の堡に逼つた。この戦に、松平家忠・松平近正は力の限り働いて討死した。島津義弘が、西堡に逼つた。すると、内藤家長は、門を開いて、十餘人を射斃し、創を受けて、退いて城に這入つた。そして手紙を書いて一卒に渡して曰ふには「貴様は、圍を破つて、之を關東に届けよ」と。遂に火をかけ城を焼き、自殺して仕舞つた。其の子小一郎は、安藤定次・佐野正吉・山岡甫安等と共に、此の時討死した。外郭は既に落城した。鳥居元忠の家來で元忠に自殺を勧めた者があつた。すると、元忠が曰ふのに「未だ早い。敵を一人だけでも、餘計に殺すの

が、國に報いるのではないかと。そして城壁を繞つて亂射した。大分敵兵を殺した。敵は火矢を射つて、城の高い櫓を焼いた。消しても消しても、燃え上る。元忠は、とても守ることが出来ないと思念して、そこで、二百の兵を指揮し、門を開いて血戦した。七たび打ち合つて、七たびとも勝つた。敵の大勢衆は、群がり進み、味方はバタ／＼皆斃れた。賤しい這者に至るまで奮戦して死なぬものはなかつた。元忠は、薙刀を杖に突き、階段に腰打掛けて、休息して居た。すると、敵兵の雜賀重次が進んで、之を撃たうとした。元忠が曰ふのに「俺は此の城の大將だ。貴様に首を授けて遣るぞ」と。重次は、槍を横たへ、會釋して曰ふには「私は、手出し致しません。どうか貴方は、心安く自害あらせられよ」と。そこで元忠は重次に鎧の紐を釋かさせ、自ら切腹して死んだ。年は六十二である。重次は介錯して之を包み、諸將の首と一所に大阪へ送り届けた。すると商人の某が、元忠の首を盗み出し、之を知恩院に葬つた。是の日、我が前軍は江戸へ出發し、内大臣は、小山を出發した。四日には江戸へ到着し、伏見の報告を得て、歎き悲しんだ。戦死者の子供は慰め勞つて遣り、皆其の領地を相續させた。

語釋 松城(丸松) ○賈人某(佐野四郎右衛門)

米澤口諸侯聞伏見陷内大臣歸江戸也疑懼引還越後諸侯亦收兵自保越後人應景勝者亦收入津川上杉氏將士請尾擊内大臣景勝不敢許其將士竊相賀曰「内府西顧狼狽而回我勝必矣獨杉原親憲有憂色曰「内府回軍非不得已也内府若勝則我公何以獨立乎」

訓讀 米澤口の諸侯、伏見の陥り、内大臣の江戸に歸ると聞かば、疑懼して引き還る。越後の諸侯も亦、兵を收めて自ら保つ。越後人の景勝に應ずる者も、亦收めて津川に入る。上杉氏の將士、内大臣を尾撃せんと請ふ。景勝敢て許さず。其の將士、竊に相賀して曰く「内府、西顧し、狼狽して回る。我が勝必せり」と。獨り杉原親憲、憂色有り。曰く「内府、軍を回すは、已むを得ざるに非ざるなり。内府若し勝たば、則ち我が公、何を以て獨立せんや」と。

通釋 米澤口の諸將は、伏見が落城し、内大臣が江戸へ歸つたと聞いて、疑ひ懼れて引き還した。越後の諸侯も、亦た兵を纏めて歸り、自ら守つて居た。越後の住人で、景勝に味方したのも、亦、兵を收めて、津川から還つた。上杉氏の諸將は、内大臣を追撃しようとして請うた。が、景勝は、許さなかつた。すると、其の將士は、竊に相賀して曰ふには「内大臣は西の方のみ顧み、狼狽して引き還した。味方の勝は必定だ」と。杉原親憲、獨りだけは、心配さうな顔色であつた。曰ふのに「内大臣が軍を回したのは、仕方ないからといふのではない。若し内大臣が勝つたら、我が君は、何うして、獨立して行かれようか。危いものだ」と。

初内大臣之赴小山也遺其軍塵中路覺之從騎欲馳歸取之內大臣曰無以爲也命伐道傍竹篠爲麾柄取紙手裂之束於柄端試揮之者再曰如景勝者用此而足矣及發小山擲之地曰此亦毋用矣石田三成遺書眞田昌幸報知上國之捷轉致會津且曰内府分兵守管內十餘城與上杉佐竹相持焉能歷二十日行程而來上

國哉即能來乎邀之海道擊而擒之耳子善守山道諸老皆欲賞子以信濃也昌幸喜益治兵三成等又遺書北陸數招前田利長利長不應

訓讀 初め内大臣の小山に赴くや、其の軍塵を遺る。中路にして之を覺る。從騎、馳せ歸つて之を取らんと欲す。内大臣曰く「以て爲す無れ」と。命じて道傍の竹篠を伐つて麾柄と爲し、紙を取り手づから之を裂き、柄端に束ねて、試に之を揮ふこと再びす。曰く「景勝の如き者には、此を用ひて足る」と。小山を發するに及び、之を地に擲つて曰く「此も亦用ひる母し」と。石田三成、書を眞田昌幸に遺つて、上國の捷を報知し、轉じて會津に致さしむ。且つ曰く「内府、兵を分つて管內十餘城を守り、上杉・佐竹と相持す。焉んぞ能く二十日の行程を歴て上國に來らんや。即し能く來らんか、之を海道に邀へ、撃つて之を擒にせんのみ。子、善く山道を守れ。諸老、皆、子を賞するに信濃を以てせんと欲するなり」と。昌幸喜び、益々兵を治む。三成等、又書を北陸に遣り、數々前田利長を招く。利長、應ぜず。

通釋 初め、内大臣が小山に赴かれる時、其の采配を忘れた。途中で氣が付いた。從騎が馳せ歸つて之を取つて來ようとした。と、内大臣がいふのに「其れには及ばない」と。そして命じて、道傍の竹を伐らせて、采配の柄とし、紙を取つて、手づから裂いて柄の端にくりつけ、試に二度ばかりも之を揮つて見た。曰ふのに「景勝如きものには、これで澤山だ」と。小山を出發して還る時は、之を地に投げ棄て、曰ふのに「最早これも不用だ」と。石田三成は手紙を眞田昌幸に贈り、伏見の勝利を知らせ、之を會津の上杉に轉送させた。そして曰ふのに「内大臣は、兵を分つて、領内の十餘城を守り、上杉・佐竹と對陣して居るから、どうして、二十日路の道程

を迎つて、上方まで來ることが出來ようか。若し、能く來たならば、之を東海道に迎へ、撃つて擒にするばかりである。貴公は、善く東山道を守つて居るがよい。諸老は、皆、貴公に信濃を褒美に遣らうといつて居る」と。昌幸は、喜んで、益々兵備を整へた。三成等は、又、手紙を北陸へも遣り、度々前田氏を招いた。しかし、利長は應じなかつた。

語釋 上國之捷(伏見の陥落) ○諸老(顯元・秀家・長盛・正家)

大谷吉隆、導京極高次及脇坂朽木赤座小川諸將入越前。長東正家導毛利秀元及長曾我部等入伊勢。中納言織田秀信在美濃岐阜介居東西衝要之地。西人誘以大封。秀信欲應。其臣諫曰「豊臣氏嘗負我、徳川氏嘗助我。宜以今日決去就焉。前田玄以爲京師所司代。亦教其歸東軍。秀信弗聽。終爲西人城守。氏家行廣以桑名、羽柴勝雅以神戶、九鬼嘉隆以鳥羽、岡部某以龜山、丹羽長重以小松、青木一矩以北莊、山口正弘以大正寺、皆應西軍。西軍總十八萬騎。其圍伏見者引而東下。入美濃、修大垣城、以爲根據。使四近將士砦于犬山、以援岐阜。十一日三成先入大垣、以迎諸將。警聞、至江戶者、項背相望。內大臣曰「我已處置之矣。舉動如常。」

訓讀 大谷吉隆、京極高次、及び脇坂・朽木・赤座・小川の諸將を導いて、越前に入る。長東正家、毛利秀元、及び長曾我部等を導いて、伊勢に入る。中納言織田秀信、美濃の岐阜に在り。東西衝要の地に介居す。西人誘ふに大封を以てす。秀信、應ぜんと欲す。其の臣諫めて曰く「豊臣氏は嘗て我に負き、徳川氏は嘗て我を助く。宜しく今日を以て去就を決すべし」と。前田玄以、京師の所司代たり。亦其の東軍に歸するを教ふ。秀信聽かず。終に西人の爲に城守す。氏家行廣は桑名を以て、羽柴勝雅は神戶を以て、九鬼嘉隆は鳥羽を以て、岡部某は龜山を以て、丹羽長重は小松を以て、青木一矩は北莊を以て、山口正弘は大正寺を以て、皆西軍に應ず。西軍總て十八萬騎。其の伏見を圍みし者、引いて東に下る。美濃に入り、大垣城を修め、以て根據と爲す。四近の將士をして犬山に砦し、以て岐阜を援けしむ。十一日、三成、先大垣に入り、以て諸將を迎ふ。警聞の江戶に至るもの、項背相望む。内大臣曰く「我れ已に之を處置す」と。舉動、常の如し。

通釋 大谷吉隆は、京極高次及び脇坂・朽木・赤座・小川の諸將を案内して、越前に入つた。長東正家は、毛利秀元及び長曾我部等を案内して、伊勢に入つた。中納言織田秀信は、美濃の岐阜が居城であつた。東西から攻め寄せる要害の土地に當つた。西方は大封を以て之を誘うた。秀信は、之に應じようとした。すると家來どもが諫めて曰ふのに「豊臣氏は、嘗て我に負き、徳川氏は助けて呉れた關係があります。宜しく、今日を以て去就の實を明かにし、決定す可きであります」と。前田玄以は、京都の所司代であつた。東軍に加擔す可きを教へた。秀信は聽き入れなかつた。終に、西方の爲に岐阜城を守ることにした。其の外、氏家行廣は桑名を以て、羽柴勝雅は神戶を、九鬼嘉隆は鳥羽、岡部某は龜山を、丹羽長重は小松を、青木一矩は北莊を、山口正弘は大正寺を以て、皆、西方に應じた。斯くて、西方の軍兵は、總勢十八萬騎。伏見の城を圍んで居たものも引き揚げ、東に下つた。

美濃に入り、大垣城を修復して、根據地とした。四方近傍の將士に命じて砦を犬山に築いて岐阜を援けさせた。十一日、三成は先づ大垣に入つて諸將を迎へた。異變の内情、非常の報知が續々と江戸に至り、文字通り項背相望むといふ有様であつた。しかし、内大臣は一向平氣で「儂は既に、十分、善い様に取計つて置いた」といつた。その振舞は平生と少しも變らなかつた。

十三日、我監軍井伊直政本多忠勝引前軍二十七將騎卒五萬至清洲。距大垣七里、相持未戰。毛利氏前部攻阿濃津城。城主富田知信受東命、固守不下。夜出擊敵將長東正家走之。我將德永壽昌與市橋長勝攻福東高須、二砦取之、以絶大垣。桑名、糧道而大垣兵日加。我軍有流言前軍諸將與敵通款。二監數返使江戸、促内大臣親出、欲以鎮軍情。不獲命。十九日、村越吉直、命而至。二監迎問其旨。吉直曰「稱疾不出耳」。二人大驚曰「子慎勿將此命。果將則諸將解體矣。因私改其命授之」。

訓讀 十三日、我が監軍井伊直政・本多忠勝、前軍二十七將、騎卒五萬を引いて、清洲に至る。大垣を距ること七里、相持して未だ戦はず。毛利氏の前部、阿濃津城を攻む。城主富田知信、東命を受け、固く守つて下らず。夜出で、敵將長東正家を撃つて、之を走らす。我が將德永壽昌、市橋長勝と、福東・高須の二砦を攻め、之を取り、以て大垣・桑名の糧道を絶つ。而して大垣の兵、日に加る。我が軍に流言有り、前軍の諸將、敵と款を通ず

と。二監、數使を江戸に返して、内大臣の親山を促し、以て軍情を鎮めんと欲す。命を獲ず。十九日、村越吉直、命を啣んで至る。二監迎へて其の旨を問ふ。吉直曰く「疾と稱して出でざるのみ」と。二人、大に驚いて曰く「子、慎んで此の命を將ふ勿れ。果して將はば、則ち諸將解體せん」と。因つて私に其の命を改めて之を授く。

通釋 十三日、徳川氏の軍目付、井伊直政・本多忠勝は、前軍二十七將、騎兵歩卒五萬を率ゐて、清洲に到着した。大垣を去ること七里で、對して、まだ戦ひ始めなかつた。毛利氏の先鋒は、阿濃津城を攻めた。城主富田知信は、關東の命令を受けて居り、固く守つて、下らず。夜に乗じ城から出で、敵將長東正家を撃つて、之を走らせた。我が大將の德永壽昌は、市橋長勝と、もに、福東・高須、二個所の砦を攻めて之を取り、大垣・桑名へ行く兵糧の道を絶ち切つた。しかし、大垣の西兵は、日に加はつたので、我が軍中には、前軍の諸將は敵と内通して居るといふ流言さへあつた。軍目付の直政・忠勝の兩人は、度々使を江戸に遣して、内大臣が親ら出で、軍情を鎮めむことを請うた。聽き入れられなかつた。十九日、村越吉直が仰を啣んで來た。二監は迎へて、如何なる仰かといつて問うた。吉直は答へて曰ふのに「病氣だといつて出て來られないのだ」と。二監軍は大に驚いて曰ふのに「貴公、慎んで、此の仰を傳へてはならぬ。若し之を傳へると、諸將は、皆氣拔がするだらう」と。因つて、勝手に其の命を改めて、之れに授けて置いた。

且日會諸將而引吉直。吉直心竊謂。二監所言主公豈有不知乎。我素以率直名。而特受此命者。取我不枉其言也。乃言於諸將曰「内府言諸公久屯良苦。吾有寒疾、不

可速出。二監失色。諸將默然。加藤嘉明曰「臣聽命矣。福島正則曰「何謂也。嘉明曰「吾曹與敵對壘。未嘗出戰。大旆之不西上。不亦宜乎。正則拍掌曰「然。衆遂議進取。正則曰「岐阜兵衆而阻木曾川。未易攻。我聲言攻犬山。則彼必分兵援之。我則逼岐阜。岐阜陷。則犬山自潰。二監從之。織田秀信果分兵來援。

訓讀 且日、諸將を會して吉直を引く。吉直、心に竊に謂ふ。二監の言ふ所、主公豈に知らざる有らんや。我れ素より率直を以て名あり。而して特に此の命を受くるは、我が其の言を枉げざるを取らんと。乃ち諸將に言つて曰く「内府言ふ、諸公、久しく屯して良に苦しむ。吾れ寒疾有り、速に出づ可からず」と。二監、色を失ふ。諸將、默然たり。加藤嘉明曰く「臣、命を聽く」と。福島正則曰く「何の謂ぞや」と。嘉明曰く「吾が曹、敵と壘を對し、未だ嘗て出で戦はず。大旆の西上せざるも、亦宜ならずや」と。正則、拳を拍つて曰く「然り」と。衆、遂に進取を議す。正則曰く「岐阜は兵衆くして、木曾川に阻まる。未だ攻め易からず。我れ犬山を攻むと聲言せば、則ち彼れ必ず兵を分けて之を援けん。我れ則ち岐阜に逼らん。岐阜陥らば、則ち犬山自ら潰えん」と。二監之に従ふ。織田秀信、果して兵を分つて來り援く。

通釋 翌る日、諸將を呼び集め、吉直を引いて、會見させた。吉直、竊かに考へるに「二監の言ふところは、主公の知らぬ筈はない。自分は平素、真正直だといふので、名を知られて居る。だから、特別に、此の大命を受けて來たのも、自分が仰の言葉を曲げたり、間に合はせを云はぬからと云ふのであらう、是は、二監の言に従つ

てはならぬ」と。そこで、諸將に向つて曰ふのに「内大臣が仰せられるには、諸公は、久しく、此に屯して居り、まことに、御苦勞千萬である。が、俺は風を引いたから、速に出ることは、出来ない」と二監は顔色を變へた。諸將は呆氣にとられて、しばし言葉も出なかつた。すると、加藤嘉明が曰ふには「仰せの趣、畏まりました」と。福島正則は「是れは、如何した事であるか」と聞いた。嘉明が曰ふのに「吾々は敵と對陣して居るが、まだ戦はない。大旆が西下しないのも、まこと、尤もではないか」と。正則は手を拍つて「成程、さうだ」といつた。そこで居並ぶ諸將は、進取の相談をした。正則が曰ふのに「岐阜は、兵も多く、おまけに、木曾川を隔て、居る。攻め易くない。犬山を攻めると言ひふらせば、敵は必ず兵を分つて、援けるだらう。此の時、我が軍は岐阜に逼るとしよう。岐阜が落城すれば、犬山も自然潰えるであらう」と。二監は、此の謀に従つた。すると織田秀信は果して此の方の計略に乗り、兵を分つて來り助けた。

二監乃部署諸將留藤堂高虎黑田長政等備大垣犬山令福島正則涉尾越川出其面池田輝政亂河田渡出其背諸將分隸之兵各萬餘正則以河田上流路捷欲自赴之以先諸軍輝政又以出敵背爲恥二監諭正則曰「公已受先鋒之任誰能爭之但公主本州舟筏可辨池田不然也諭輝政曰「公德川氏之婿當務利其翁何悻悻然與衆人爭尺寸乎二人乃服岐阜人聞警請堅壁以俟大垣援秀信不聽出兵

阻水。

訓讀 二監乃ち諸將を部署し、藤堂高虎・黒田長政等を留めて、大垣・犬山に備へ、福島正則をして尾越川を涉つて其の面に出で、池田輝政をして河田渡を亂つて其の背に出でしむ。諸將分れて之に隸す。兵各々萬餘。正則河田の上流の路、捷なるを以て、自ら之に起き、以て諸軍に先んぜんを欲す。輝政、又敵背に出づるを以て恥と爲す。二監、正則に諭して曰く「公已に先鋒の任を受く。誰か能く之を争はん。但公は本州に主たり。舟筏辨ずべし。池田は然らざるなり」と。輝政に諭して曰く「公は徳川氏の婿、當に務めて其の翁を利すべし。何ぞ悻悻然として衆人と尺寸を争はんや」と。二人乃ち服す。岐卓の人、警を聞き、壁を堅くし、以て大垣の援を俟たんと請ふ。秀信聽かず。兵を出して水を阻す。

通釋 そこで二監は、諸將を手分けし、藤堂高虎・黒田長政等を留めて、大垣・犬山に備へさせ、福島正則をして尾越川を涉つて、其の正面に出でしめ、池田輝政をして河田の渡を渡つて、其の背面に出でしめた。諸將は分れて、之に附いた。其の兵数は各々一萬餘人であつた。正則は、河田の上流が近道だといふので、自ら其處へ往き諸軍に先つて敵を攻めようとした。輝政は、敵の背面から攻めるのを恥とした。二監は、乃ち正則に諭して曰ふのに「貴公は、既に先鋒といふ重い任務を受けて居る。誰が、之を争ふことが出来よう。但し、貴公は、此の國の領主である。舟でも、筏でも、直に間に合はせることが出来よう。池田はさう行かないから、近道の河田は池田に譲つて遣るがよい」と。今度は、輝政を諭して曰ふのに「貴公は、徳川家の婿ではないか、務めて獄翁家康の爲になる様計らうべきだ。何も、ぶり／＼怒つて、衆人と少しばかりの事を争ふに及ぶまい」と。二人は

乃ち服した。岐卓の方では、此の警報を聞き、壁を堅く守つて、大垣の援を待たうと請うた。秀信は之れを聽き入れない。兵を出して、木曾川で防いだ。

語釋 公主ニ本州(清洲は正則の居城だからいふ) ○其翁(妻の父) ○悻々然(立腹するさま)

二十二日、輝政亂流、遇敵于米野、破之、攻北門。正則攻陷竹鼻、砦攻南門。城兵善拒、不可拔。淺野左京大夫與一柳直盛等攻其別堡。堡險而隣、左右泥淖。大夫老臣淺野右近生長美濃、諳其地理、蹊田而先登、揚徽于壁上。大夫望之曰「右近不可亡也。」馬上揮槍、身先士卒。士卒皆奮、奪壁而入。斬城將南部遠山以下五百人。餘兵走城。城中驚擾。諸將因爭登。秀信遂乞降、逃奔高野。正則與輝政爭功、欲鬪。二監折之曰「以私忿忘公事、誓辭之實安在。」二人服而罷。犬山敵聞敗而懼、成將加藤貞泰與竹中重門、關一政皆拔歸我軍。自餘諸將皆遁。

訓讀 二十二日、輝政、流を亂り、敵に米野に遇つて、之を破り、北門を攻む。正則、攻めて竹鼻の砦を陥れ、南門を攻む。城兵善く拒ぎ、拔く可からず。淺野左京大夫、一柳直盛等と、其の別堡を攻む。堡は險にして隣、左右泥淖なり。大夫の老臣淺野右近、美濃に生長して、其の地理を諳んず。田を蹊つて先登し、徽を壁上

に揚ぐ。大夫、之を望んで曰く「右近亡ふべからず」と。馬上に槍を揮ひ、身、士卒に先だつ。士卒皆奮ひ、壁を奪つて入る。城將南部・遠山以下五百人を斬る。餘兵、城に走る。城中、驚擾す。諸將、因つて争ひ登る。秀信遂に降を乞ひ、逃れて高野に奔る。正則、輝政と功を争うて、鬪はんと欲す。二監、之を折つて曰く「私忿を以て公事を忘る。誓辭の實、安にか在る」と。二人、服して罷む。犬山の敵、敗を聞いて懼れ、成將加藤貞泰、竹中重門・關一正と、皆抜けて我が軍に歸す。自餘の諸將は皆遁る。

通釋 二十二日、輝政は流を渡つて進み、米野で敵に遇つて、之を打ち破り、やがて岐阜城の北門を攻めた。正則は竹鼻の砦を攻め落し、南門に攻め入つた。が、城兵は善く拒いで容易に落ちない。浅野左京大夫は一柳直盛等と、もに、その別堡を攻めた。其の堡は、要害の處で高くなつて居り、おまけに、左右は泥沼である。大夫の家老、浅野右近は美濃に生長した人だから、其の近所の地理を諳じて居た。それ故、田を横きつて先登し、馬じるしを城壁の上に押し立てた。大夫は、之を望見して曰ふのに「右近を死なしてはならぬ」と。馬上で槍を揮ひつゝ、身、士卒に先立つて進んだ。士卒も皆奮ひ、城壁を奪つて押し込んだ。そして城將南部・遠山以下、五百人を斬つた。其の餘の兵は、先を争つて城に逃げ込んだ。城中では驚いて騒いだ。諸將は、争つて城に登つた。秀信は、遂に降を乞ひ、逃げて高野に奔つた。輝政と正則は功名争をして、決闘しようとした。二監は之をなじつて曰ふのに「私の遺恨で公の事を忘れるとは何事である。さきに誓つた言葉は何の爲である。少しはたしなむがよい」と。二人は之に服して、問題は其れなりで済んだ。犬山の敵は、岐阜が敗れたと聞いて懼を抱き、守りの大將加藤貞泰は竹中重門・關一政と共に、城を抜け出して、我が軍に降参した。爾餘の諸大將は、皆逃れ去つた。

語釋 米野(合渡の) ○竹鼻(尾越の) ○蹊田(田の中を横ぎ)

大垣敵聞我攻岐阜即出援之。島津義弘石田三成陣呂久川遣三千人進至合渡。長政高虎等諜知之相謂曰是吾輩任也乃分道而渡。天方霧敵兵不覺諸將急擊敗之。追北至呂久川義弘曰前軍雖敗吾與子整兵橫擊則勝三成曰敵兵銳進岐阜蓋陷矣吾已不能援何可當新勝之鋒乎收敗兵俱還大垣高虎族高政進至赤坂諭居民使安堵諸將繼至止舍定爲頓軍之地南與大垣對。

訓讀 大垣の敵、我が岐阜を攻むと聞き、即ち出で、之を援く。島津義弘・石田三成、呂久川に陣し、三千人を遣はし、進んで合渡に至る。長政・高虎等、諜して之を知り、相謂つて曰く「是れ我が輩の任なり」と。乃ち道を分つて渡る。天方に霧ふり、敵兵覺らず。諸將、急に撃つて之を敗る。北ぐるを追うて呂久川に至る。義弘曰く「前軍敗ると雖も、吾と子兵を整へ、横撃せば則ち勝たん」と。三成曰く「敵兵、鋭進す。岐阜蓋し陥るならん。吾れ己に援くる能はず。何ぞ新勝の鋒に當る可けんや」と。敗兵を收めて俱に大垣に還る。高虎の族高政、進んで赤坂に至り、居民を諭して安堵せしむ。諸將繼ぎ至つて止舍す。定めて頓軍の地と爲し、南に大垣と對す。

通釋 大垣の敵は、我が軍が岐阜を攻めると聞いて、出で、之を援けた。島津義弘・石田三成は、呂久川に陣

を取り、三千の軍兵を遣し、進んで合渡に至つた。長政・高虎等は、聞者の報告で、之を知り、相謂つて曰ふのに「これは、吾が北軍が引き受けねばなるまい」と。そこで、道を分つて別々に渡つた。折しも、天には霧が一ぱいで、敵兵は、之を覺らなかつた。諸將は不意を撃つて、之を破つた。遁ぐるを追うて、呂久川に至つた。義弘が曰ふのに「前軍は負けたが、俺と貴公が兵を整へ、横から撃てば必ず勝つ」と。三成が曰ふのに「敵兵は勢鋭く進んで来る。岐阜も大方落城したであらう。此の分では岐阜を救ふことも出来ない。どうして勝ち誇つて居る鋭い鋒先に當ることが出来よう」と。そして敗兵をまとめて、一緒に大垣へ歸つた。高虎の一族である高政は、進んで赤坂に至り、居民に諭して、安堵させた。諸將が續いて到着すると、そこへ止まり宿した。軍兵を止め置く地と決め置き、南の大垣と相對して居た。

會浮田秀家至自伏見。三成迎而犒之、推爲元帥。秀家曰「敵兵戰疲、深入客地、吾乘夜襲之、以逸擊勞、必得大利矣。」三成曰「當與島津・小西議。」秀家曰「兵貴神速、何議之爲。吾獨出決戰耳。」三成止之曰「島津・小西皆以爲地勢沮洳不便夜戰。且夜戰以寡擊衆者也。今以衆擊寡、何必於此。」今毛利參議在伊勢。安藝中納言在大阪。埃其盡至、合軍決勝。秀家曰「我軍盡至、則敵軍亦盡至。勝其可決乎。雖然子稱老輩之言。吾後生也。不敢違焉。唯子勿悔之。」乃入大垣。小早川秀秋自伏見至高宮、稱疾不前。三

成等疑之、使人往議事、因刺之。秀秋覺不見。於是稱疾愈來至美濃。不敢入大垣。

訓讀 浮田秀家の伏見より至るに會す。三成迎へて之を犒ひ、推して元帥と爲す。秀家曰く「敵兵戦ひ疲れ、深く客地に入る吾れ夜に乗じて之を襲ひ、逸を以て勞を撃たば必ず大利を得ん」と。三成曰く「當に島津・小西と議すべし」と。秀家曰く「兵は神速を貴ぶ。何ぞ議するを之れ爲さん。吾れ獨り出で、戰を決せんのみ」と。三成之を止めて曰く「島津・小西皆以爲へらく、地勢沮洳、夜戰に便ならず。且つ夜戰は寡を以て衆を撃つ者なり。今衆を以て寡を撃つ何ぞ此に必せん。今、毛利參議は伊勢に在り。安藝中納言は大阪に在り。其の盡く至るを俟ち、軍を合せて勝を決せん」と。秀家曰く「我が軍盡く至らば、則ち敵軍も亦盡く至らん。勝其れ決すべけんや。然りと雖も子は老輩の言を稱す。吾は後生なり。敢て違はず。唯子、之を悔ゆる勿れ」と。乃ち大垣に入る。小早川秀秋、伏見より高宮に至り、疾と稱して前まず。三成等、之を疑ひ、人をして往いて事を議し、因つて之を刺さしむ。秀秋覺つて見えず。是に於て、疾癒ゆと稱し、來つて美濃に至る。敢て大垣に入らず。
通釋 折しも、伏見から浮田秀家が來た。三成は之を迎へ、酒食を共にして犒ひ、推して元帥とした。秀家が曰ふには「敵兵は、戰に疲れ、深く不知案内の土地へ這入つて居る。我が軍は、夜に乗じて、之を襲へば、逸を以て勞を撃つことになるから、大勝利を得るに相違ない」と。三成が曰ふのに「島津・小西と相談しよう」と。秀家が曰ふには「戰は素早く迅速を貴ぶものだ。相談などの必要があらうか。俺は獨りで出て決戦しよう」と。三成は之を止めて曰ふのに「島津・小西等は、何れも地勢が下濕で沼地だから、夜戰には都合が悪いと云つて居る。且つ夜戦といふものは、小勢で多勢を討つ場合であるのに、今は多勢で小勢を撃つものだから、何も此の策略

と限るには及ぶまい。今、毛利參議秀元は伊勢に居る。安藝中納言輝元は大阪に居る。皆の軍兵が来るのを待ち勢を合せて、勝敗を決することにしよう」と。秀家が曰ふのに「我が軍が盡く至れば、敵軍も盡く至るであらう。さすれば、何うして勝を決することが出来よう。貴公が、老輩の言葉をもち出す。自分は若輩の身である。敢て背きはしない。しかし、貴公は、後悔せぬ様にするがよい」と。乃ち大垣へ入つた。小早川秀秋は、伏見から高宮に來たが、病氣だといつて進まない。三成等は、之を疑ひ、人を遣つて、相談させることにし、其の場で刺し殺さうとした。すると、秀秋は覺つて遇はうとはしない。その後、病氣は全快したと云つて、美濃へ來た。然し大垣へは這入らなかつた。

語釋 毛利參議(元秀) ○安藝中納言(元輝) ○高宮(江近)

大垣群帥以岐阜陷召伊勢越前之軍。毛利秀元長東正家等再攻富田知信。知信堅守累日、上野城主分部光嘉棄城來歸、與俱守。知信妻有勇翼夫而戰、其郭已陷。嬰守內城。於是敵使僧興山入諭致城。不聽。強而後聽。秀元正家等乃入美濃。秀元族將勸秀元歸東軍、遂陰送質。大谷吉隆數誘前田利長。利長不應。與弟利政攻拔大正寺。進至細呂木、欲攻北莊。謬聞東軍敗于海道、乃退。遇小松兵于淺井、力戰而還。吉隆與京極高次等取大正寺府中。於是亦入美濃。高次素歸心於我。欲城守

大津。故遲回不發。脇坂以下先發。亦已通款焉。而吉隆不知也。使之陰備。秀秋

訓讀 大垣の群帥、岐阜陷るを以て、伊勢・越前の軍を召す。毛利秀元・長東正家等、再び富田知信を攻む。知信堅く守ること累日、上野城主分部光嘉、城を棄て、來歸し、與俱に守る。知信の妻は勇有り。夫を翼けて戰ふ。其の郭、已に陷る。内城を嬰守す。是に於て、敵、僧興山をして入つて諭し城を致さしむ。聽かず。強ひて而る後に聽く。秀元・正家等、乃ち美濃に入る。秀元の族將、秀元に勸めて東軍に歸せしめ、遂に陰に質を送る。大谷吉隆、數々前田利長を誘ふ。利長、應ぜず。弟利政と、攻めて大正寺を抜き、進んで細呂木に至り、北莊を攻めんと欲す。東軍、海道に敗ると謬り聞き、乃ち退く。小松の兵に淺井に遇ひ、力戰して還る。吉隆、京極高次等と、大正寺・府中を取る。是に於て、亦美濃に入る。高次、素より心を我に歸す。大津に城守せんと欲す。故に遲回して發せず。脇坂以下、先發す。亦已に款を通ず。而して吉隆知らざるなり。之をして陰に秀秋に備へしむ。

通釋 大垣に居る諸將は、岐阜が攻め落されたから、伊勢・越前の軍を召した。毛利秀元・長東正家等は、再び富田知信を攻めた。知信は、堅く城を守つて日を重ねて居ると、上野の城主分部光嘉は、城を棄て、こゝへ逃げ込み、一緒に城を守ることにした。知信の妻は勇氣があつた。夫を助けて戦に臨んだ。城の外郭は既に陥つた。猶ほ本丸に立籠つて守つて居た。敵は高野木食上人の僧興山を遣はし、諭して城を明け渡させようとした。然し承知しない。無理に強ひたので、漸く聞き入れた。秀元・正家は、そこで美濃へ這入つた。秀元一族の大將は、秀元に勸めて、東軍に歸せしめ、竊かに、人質を送つた。大谷吉隆は、度々前田利長を誘ひ招いた。利長

は應じようとしな。弟利政と共に、大正寺を攻め落して、細呂木まで進み、北莊を攻めようとした。その時東軍が東海道で敗れたと、間違つて聞いたので、退却した。小松の兵に浅井暇に遇ひ、力戦して引き還した。吉隆は、京極高次等と共に、大正寺・府中を攻め取つた。此に於て、亦美濃へ這入つた。高次は、最初から、我が徳川氏に心を寄せて居た。そして大津の城に立て籠らうとした。依つて、わざと愚圖々々して出發しない。脇坂以下は先立つて出發した。是も、東軍に内應した。しかし、吉隆は之を知らなかつた。だから、之をしてひそかに秀秋に備へしめた。

語釋 浅井暇・府中(前)

秀元屯于南宮山、秀秋屯于松尾山。皆在大垣城西。島津義弘屯于城東、城北有長松。若將某爲西軍守。及我軍至赤坂、棄守遁。二監遣一柳直盛守之、益旗幟張疑兵。又遣水野勝成守會根、若爲其聲援。西軍聚議不決。我軍亦以敵兵衆盛、不敢出戰。日竣、內大臣至。

秀元、南宮山に屯し、秀秋、松尾山に屯す。皆大垣城の西に在り。島津義弘、城東に屯し、城北に長松の岩有り。若將某、西軍の爲に守る。我が軍の赤坂に至るに及び、守を棄て、遁る。二監、一柳直盛を遣はして之を守らしめ旗幟を益し、疑兵を張る。又水野勝成を遣はして會根の岩を守らしめ、其の聲援を爲す。西軍、聚議決せず。我が軍も亦、敵兵の衆盛なるを以て、敢て出で戦はず。日に内大臣の至るを竣つ。

秀元は、南宮山に屯し、秀秋は松尾山に陣取つた。何れも皆、大垣城の西に當つて居る。島津義弘は城東に屯し、城北には長松の岩といふのがある。若の大將某は、西軍の爲に守つて居た。しかし、我が軍が、赤坂に至るに及び、守を棄て、遁れた。そこで、直政・忠勝の二監は、一柳直盛を遣つて之を守らせ、色々の旗を建てさせて、疑兵を張り、多くの軍兵が居るやう物々しく見せかけた。又水野勝成を遣はして、會根の岩を守らせ、其の加勢とした。西軍は、寄り合つて會議したが、何の纏りも見ない。我が軍も、敵兵が多く、勢、盛んだから、出で戦はうとはせず。毎日、内大臣の到着を待つて居た。

内大臣得村越吉直之報大喜。乃命榊原康政中納言以兵三萬西上。以二十四日發下野、直出山道。間日得岐阜捷報、使人轉告東陲諸國、賜書正則・輝政以下賞之。曰「且勿戰。以待我出。命異父弟松平康元及石川家成留守江戶、五郎信吉及松平康直留守其西城、遂命諸城留任。」

内大臣、村越吉直の報を得て、大に喜ぶ。乃ち榊原康政に命じて中納言を輔け、兵三萬を以て西上せしむ。二十四日を以て下野を發し、直に山道に出づ。間日、岐阜の捷報を得て、人をして東陲の諸國に轉告せしめ、書を正則・輝政以下に賜ひ、之を賞して曰く「且く戦ふ勿れ。以て我が出づるを待て」と。異父弟松平康元、及び石川家成に命じて江戸を留守し、五郎信吉、及び松平康直に其の西城を留守せしめ、遂に諸城の留任を命ず。

通釋

内大臣は、村越吉直の報知を得て、大に喜んだ。そこで榊原康政に命じて、中納言を輔け、三方の兵を

率ゐて、西上させた。二十四日に、下野を出發して、直に中仙道へ出た。一日置いて、岐阜の捷報を聞いたので、人をして、東邊の諸國に告げ知らせ、正則・輝政以下に感狀を賜はり、其の功を賞して曰ふのに「暫らく、戦ふな。俺が討つて出るのを待つて居ろ」と。異父弟の松平康元及び石川家成に命じて、江戸を留守させ、五郎信吉及び松平康直には、江戸の西城を留守させ、遂に諸城の留守居役を任命した。

九月朔内大臣親將發江戶。酒井某・村串某、擊金扇馬表・葵章、白旗在馬前。近藤秀用・大久保忠教、掌槍渡部守綱、伊奈今成・成瀬正成・安藤直次等十五人、爲弓銃隊長。下野守忠吉以下親屬將領三十餘人、兵凡二萬五千。石川家成白曰、「臣聞星家之言、『今歲西方塞矣。』請避方而發。」内大臣曰、「西方塞、則我擊而開之。」遂發、自東海道鼓行而西。近畿西國將士爭發、使者上狀馬首者、絡繹屬道而東北空虛。

訓讀 九月朔、内大臣親將として江戸を發す。酒井某・村串某・金扇の馬表・葵章の白旗を撃つて馬前に在り。近藤秀用・大久保忠教、槍を掌り、渡邊守綱・伊奈今成・成瀬正成・安藤直次等十五人、弓銃隊長と爲る。下野守忠吉以下、親屬將領三十餘人、兵凡そ二萬五千なり。石川家成白して曰く「臣、星家の言を聞くに『今歲は西方塞る』と。請ふ、方を避けて發せよ」と。内大臣曰く「西方塞らば、則ち我れ撃つて之を開かん」と。遂に發し、東海道より鼓行して西す。近畿・西國の將士、争うて使者を發し、狀を馬首に上る者、絡繹道に屬す。

而して東北は空虛なり。

通釋 九月一日、内大臣は、親ら大將として江戸を出發した。酒井某・村越某は、金扇の馬じるし・葵の紋の白旗を差し上げて、馬前に立つた。近藤秀用、大久保忠教は槍を掌り、渡邊守綱・伊奈今成・成瀬正成・安藤直次等十五人は弓矢鐵砲組の頭となつた。下野守忠吉以下、親族大將ども三十餘人、その兵ざつと二萬五千であつた。石川家成が、申し上げて曰ふのに「私が天文家の説を聞きますのに、今年は、西の方角が塞がつて居るさうであります。然れば、其の方角をお避けに爲つて、御出發なされるがよろしいかと存じます」と。すると、内大臣が曰ふのに「西方が塞がつて居れば、我は撃ち開いて行くまでぢや」と。遂にそのまゝ、出發した。そして東海道から、鼓旗堂々と西へ向つた。近畿・西國の將士は、争つて使者を遣し、戦の模様を馬前に知らせるものが、ぞろぞろ、路に續き互つた。所で一方東北の方面は、全くの空つぽであつた。

語釋 星家(天象を見て存す) ○西方塞(今歲は辛丑で大將軍星は西方に在るから云) 卷五補氏の條下大將軍在西を參照)

宇都宮軍中訛言會津悉甲南下。少將秀康使人言於景勝曰、「小子受父命居守於此。不能從上國軍。甚苦無事。願與公一戰。公能來乎。抑小子當往也。」景勝辭、願遣兵北攻山形。最上義光・伊達政宗與之對守。堀秀治聞岐阜陷、大軍西上、乃攻取津川。前田利長將會大軍、發兵復攻小松。小松既通款、乃攻大正寺、遂敵守兵、遂招北莊。

會前田利政以能登叛乃不敢進。京極高次守大津。西軍三萬攻之不能拔。細川藤孝守田邊與西軍二萬相持兩月。加藤忠明迎擊毛利氏軍於伊豫。加藤清正攻小西氏於肥後。黑田孝高攻大友氏於豊後。迭有勝敗。

訓讀 宇都宮の軍中に訛言す。會津、甲を悉して南下すと。少將秀康、人をして景勝に言はしめて曰く「小子、父の命を受けて、此に居守す。上國の軍に従ふ能はず。甚だ無事に苦む。願はくは公と一戦せん。公能く來るか。抑々小子當に往くべきか」と。景勝、辭し、顧つて兵を遣はして北に山形を攻む。最上義光、伊達政宗、之と對守す。堀秀治、岐阜、陥り大軍西上すと聞き、乃ち攻めて津川を取る。前田利長、將に大軍に會せんとし、兵を發して復小松を攻む。小松既に款を通す。乃ち大正寺を攻め、敵の守兵を逐ひ、遂に北莊を招く。前田利政、能登を以て叛くに會ふ。乃ち敢て進まず。京極高次、大津を守る。西軍三萬、之を攻む。拔く能はず。細川藤孝、田邊を守り、西軍の二萬と、相持すること兩月。加藤忠明、迎へて毛利氏の軍を伊豫に撃つ。加藤清正小西氏を肥後に攻む。黒田孝高、大友氏を豊後に攻む。迭に勝敗有り。

通釋 宇都宮の軍中では、間違つた風聞が、傳へられた。會津の上杉は、有らん限りの軍勢を率ゐ、南へ討つて下るなど、噂したのである。少將秀康は、人を遣はして、景勝に言はせて曰ふには「それがしは、父の命を受けて、此處に居守して居る。上方への軍に従ふことが出来ない。ひどく閑散で困つて居る。どうだ、貴公と一戦したい。貴公から御出になるか。それとも、某が出かけようか」と。景勝は辭退した。しかし、還つて兵を遣

して、北の方、山形を攻めさせた。最上義光、伊達政宗が、之と對守して居た。堀秀治は、岐阜城が陥落し、大軍が西へ上ると聞いたので、津川を攻め取つた。前田利長は、大軍に會しようとし、麾下の兵を出發させて、再び小松を攻めた。小松は既に内通して居た。そこで大正寺を攻め、守の敵を逐ひ拂つて、北莊を招いた。前田利政は能登に據つて叛いた。敢て進まないで居た。京極高次は、大津を守つて居た。西軍が三萬で之を攻めた。所が抜くことが出来ない。細川藤孝は、田邊を守り、西軍二萬の兵と對陣して、兩月に及んで居る。そして、加藤忠明は、毛利氏の軍を迎へて、伊豫で散々撃ち破つた。加藤清正は、小西氏を肥後に攻めた。黒田孝高は、大友氏を豊後に攻めた。この戦は勝つたり負けたりの戦争であつた。

十一日、内大臣至清洲。召直政・忠勝於赤坂。賞其功勞。止軍二日。以埃山道軍。軍不至。内大臣決策獨發。十三日、至岐阜。或獻巨柿實。内大臣戲曰「大垣落我手矣。擲之地。使近士爭取之。蓋以垣柿國音相通也。十四日發岐阜。前軍諸將迎謁呂久川上。内大臣面褒岐阜戰功。遂率諸將至赤坂。當是時、天下之兵美濃以東者、概屬我軍。美濃以西者、概屬敵軍。四方豪傑割據方隅者、皆觀望其成敗。而東軍以內大臣來。士氣大振。

訓讀 十一日、内大臣、清洲に至る。直政・忠勝を赤坂に召し、其の功勞を賞す。軍を止むること二日、以て

山道の軍を疾つ。軍至らず。内大臣、策を決して獨り發す。十三日、岐阜に至る。或ひと、巨柿の實を獻す。内大臣戲れて曰く「大垣、我が手に落つ」と。之を地に擲ち、近士をして争つて之を取らしむ。蓋し垣と柿と國音相通するを以てなり。十四日、岐阜を發す。前軍の諸將、迎へて呂久川の上に謁す。内大臣、面のあたり岐阜の戦功を褒し、遂に諸將を率ゐて赤坂に至る。是の時に當り、天下の兵、美濃以東の者は、概ね我が軍に屬し、美濃以西の者は、概ね敵軍に屬す。西方の豪傑、方隅に割據する者、皆其の成敗を觀望す。而して東軍は内大臣來るを以て、士氣大に振ふ。

通釋 十一日に内大臣は、清洲に到着した。早速、直政・忠勝を赤坂に召して、其の戦功を賞した。軍兵を止めること二日で、中仙道からの軍兵を待った。未だ其の軍勢は到着しない。内大臣は、謀を定めてひとりで出發した。十三日に岐阜へ到着した。或る人が大きな柿の實を獻じた。内大臣は戲れて曰ふのに「大垣が、我が手に入つた」と。之を地に投げ付けて、近侍の者どもに、争つて拾ひ取らせた。蓋し、垣と柿とは、國音が同じいからである。十四日に、岐阜を出發した。前軍の諸將は、呂久川の邊で迎へて拜謁した。内大臣は、面のあたり、岐阜の戦功を賞せられ、諸將を率ゐて、赤坂に至つた。この時、天下の大勢を眺めると、美濃から東の諸大名は、大抵わが軍に屬し、美濃から西は大抵敵軍に屬して居た。四方の豪傑で隅々に割據して居る者は、その成敗を遠くから眺め、何れに味方しようかと考へて居た。しかし、内大臣が來られたので、東軍の士氣は大に振ひ立つた。

西軍偵騎走報大垣曰「赤坂多白旗。得非内府來乎。」秀家・三成等陽大言曰「彼方憂

語釋 或獻巨柿實(武德安民記附録には安八郡八幡村瑞雲禪寺の僧、大神を盆に盛りて獻すとある、柿は「たうめん」と稱するものであり、又烈祖成績には、厚見郡西萩村立正寺の僧が、大神を盤に盛つて獻すとある。何れが正しきは明かでない。)

上杉佐竹踏躡不進。焉得遽來此乎。我諸將請乘機攻大垣。内大臣曰「大垣城壘壯固、兵食皆足。秀家雖少、非暗者也。而義弘・行長・正家・吉隆、一心戮力、持重不出。攻之必損我兵矣。獨三成輕而恃衆。若誘出之外、使秀秋・秀元撓其後、則可一戰鑿也。我且動軍、以試之。」日午建大將旗鼓于岡山、令諸將少移陣而前。

訓讀 西軍の偵騎、走つて大垣に報じて曰く「赤坂に白旗多し。内府來るに非ざるを得んや」と。秀家・三成等、陽に大言して曰く「彼れ方に上杉・佐竹を憂へ、踏躡して進まず。焉んぞ遽に此に來るを得んや」と。我が諸將、機に乗じ大垣を攻めんと請ふ。内大臣曰く「大垣は城壘壯固、兵食皆足る。秀家少しと雖も、暗者に非ざるなり。而して義弘・行長・正家・吉隆、心を一にし力を戮せ、持重して出でず。之を攻むれば必ず我が兵を損ぜん。獨り三成、輕んじて衆を恃む。若し之を外に誘出し、秀秋・秀元をして、其の後を撓さしめば、則ち、一戦にして、鑿にす可きなり。我れ且らく軍を動かさし、以て之を試みん」と。日午、大將の旗鼓を岡山に建て、諸將をして少しく陣を移して前ましむ。

通釋 西軍の物見の騎兵は、走つて大垣に注進して曰ふには「赤坂には、白旗が多い。内大臣が來たのではあるまいか」と。秀家・三成等は、上べばかりの大言をして曰ふのに「彼は、上杉・佐竹の事を心配し、愚圖くして進まれないのである。どうして俄に此に來ることが出來ようか」と。味方の諸將は、よい機會だから、大垣を攻めたいと請うた。すると、内大臣が曰ふのに「大垣の城壘は立派で、堅固であり、又兵士も、軍糧も、皆十分

整つて居る。秀家は、年こそ若い、馬鹿ではない。その上、義弘・行長・正家・吉隆は、一心協力して守備に當つて居る。ちつとこらへて、手出ししてはならぬ。うっかり攻めれば、我が兵を損するに定つて居る。三成だけは、軽々しくして、多勢を恃んで居る。之を外に誘き出し、秀秋・秀元をして、其の後を亂させれば、一戦して、皆殺しにすることが出来る。俺は、少しばかり、軍隊を動かし、之を試みて見よう」と正午頃、大將の旗や陣太鼓を岡山に建て、諸將をして、少しく陣を移して進ませた。

三成邀秀家登丘而望曰「東軍塵升何也。偵騎爭報曰「内府來矣。諸軍聞之恟懼。島勝猛曰「是張聲勢以怵我耳。我當乘其動搖擊之。秀家曰「然。藉内府來亦吾所期也。吾與治部當以先鋒挑戰。勝猛建策設伏於一色村而遣輕銳涉株瀨犯中村一榮陣。一榮迎戰。有馬豊氏在其傍分兵援之。西軍走。一榮張左右翼追之。内大臣自中軍望見謂侍臣曰「式部嘗練兵。隊伍可觀也。追者渡而進。内大臣曰「嘻。敗矣。果遇伏走者皆還。我兵不得退。内大臣命直政忠勝往收之。二人即馳左右指揮自殿而退。敵兵不能尾收入大垣。」

訓讀

三成、秀家を邀へ、丘に登つて望んで曰く「東軍に塵の升るは何ぞや」と。偵騎、争ひ報じて曰く「内

府來る」と。諸軍、之を聞いて驚懼す。島勝猛曰く「是れ聲勢を張つて以て我を怵すのみ。我れ當に其の動搖に乗じて、之を撃つべし」と。秀家曰く「然り。藉内府來るも、亦吾が期する所なり。吾れ治部と、當に先鋒を以て戦を挑むべし」と。勝猛、策を建て、伏を一色村に設け、輕銳を遣はして株瀨を涉り、中村一榮の陣を犯す。一榮迎へ戦ふ。有馬豊氏、其の傍に在り、兵を分つて之を援く。西軍走る。一榮、左右の翼を張つて之を追ふ。内大臣、中軍より望み見、侍臣に謂つて曰く「式部は嘗て兵を練る。隊伍觀る可きなり」と。追ふ者渡つて進む。内大臣曰く「嘻、敗る」と。果して伏に遇ふ。走る者皆還る。我が兵退くを得ず。内大臣、直政、忠勝に命じ、往いて之を收めしむ。二人即ち馳す。左右指揮し、自ら殿して退く。敵兵、尾する能はず。收めて大垣に入る。

通釋 三成は秀家を招き寄せ、高い丘へ一緒に登つて、望んで曰ふのに「東軍に塵が上るのは、どうしたのだ」と。斥候の騎兵が、争ひ報じて曰ふのに「内大臣が來ました」と。諸軍は之を聞いて、驚き恐れた。島勝猛が曰ふのに「さうではあるまい。是れは虚勢を張つて、我を威すだけの事だ。我が軍は、其の動搖に乗じて、急に撃つが善い」と。秀家が曰ふのに「さうだ。内大臣が來ても、其れは我が待ち設けた所である。俺と治部とが、先鋒と爲つて戦を挑まう」と。そこで、勝猛は策を建て、一色村に伏兵を設けて置き、身輕の精兵を出して、株瀨を涉り、中村一榮の陣に衝きかゝつた。一榮は迎へ戦つた。有馬豊氏は、其の傍に陣取つて居たから、兵を分つて之を援けた。西軍は、逃げ出した。一榮は、左右の兩翼を張つて追ひかけた。此時、内大臣は、本陣から眺めて居り、近侍の者に向つて曰ふには「式部は、嘗つて兵士を訓練して居る。成る程、隊伍は整つて居り、觀るべきである」と。その内に追ひかけた兵が、河を渡つて、進んだ。内大臣が曰ふのに「しまつた。負け戦だ」と果して、伏兵に陥つた。走つた敵は皆引きかへした。我が兵は、前には敵、後には川を控へて退くことが出來

ない。内大臣は、直政・忠勝に命じ、往いて其の兵を救ひ出させた。二人は即座に馳せ付けた。左右から指揮して退かせ、自らは殿して退いた。敵兵は尾撃することが出来なかつた。そこで、兵を収めて大垣に入つた。

語釋 一色村(美濃、大垣の西)

大垣諸將會議曰「内府來確也。何以決勝。秀家曰「彼必悉銳來攻。我守備既具。足以待之。田邊・大津之兵。將不日來會。安藝黃門亦當繼至。我疲敵于堅城之下。而内外擊之。其勢如鷹鄼之搏鳥雀。是全勝之策也。」三成曰「不然。今敵兵半於我。吾聞倍則戰。未聞倍則守也。我輩擁大兵。征伐關東。而坐守孤城。不敢出戰。天下之望我者。皆沮喪矣。往年小牧之役。太閤過慮。當戰不戰。終成内府之名。今豈可貳過哉。諸將負勇者。多右其議。吉隆・正家爭之曰「當今之世。誰與内府決勝於野戰者。獨有持重以疲之而已。中納言謀慮深長。宜聽從之。」議未決。内大臣揣知之。乃宣言曰「敵不敢出。我將置兵而西。直取大阪矣。皆束裝。大垣諸將聞之。終決議出戰。曰「備前中納言出陣。關原安藝宰相以前軍邀敵。薩摩參議自菩提山赴赤坂之北。遶出敵背。三成以

下分屬三軍。胥機合擊。擠東軍于呂久。合渡。乃下令治兵。使人出戒三國之軍。

訓讀 大垣の諸將、會議して曰く「内府來れること確なり。何を以て勝を決せん」と。秀家曰く「彼れ必ず銳を悉して來り攻めん。我が守備既に具る。以て之を待つに足る。田邊・大津の兵、將に不日來り會せん」と。安藝黃門も亦、當に繼いで至るべし。我れ敵を堅城の下に疲らせて、内外より之を撃たば、其の勢、鷹鄼の鳥雀を搏つが如し。是れ全勝の策なり」と。三成曰く「然らず。今、敵兵我に半す。吾れ倍なれば則ち戰ふを聞く。未だ倍にして則ち守るを聞かず。我が輩、大兵を擁して、關東を征伐す。而して坐ながら孤城を守り、敢て出で戦はずば、天下の我を望む者、皆沮喪せん。往年、小牧の役に、太閤、過慮し、當に戰ふべくして戰はず。終に内府の名を成す。今豈、過を貳びすべけんや」と。諸將の勇を負む者、多く其の議を右く。吉隆・正家之を爭うて曰く「當今の世、誰か内府と勝を野戰に決する者ぞ。獨特重して以て之を疲らすあるのみ。中納言は謀慮深長、宜しく之に聽從すべし」と。議未だ決せず。内大臣、之を揣り知り、乃ち宣言して曰く「敵敢て出でず。我れ將に兵を置いて西し、直に大阪を取らん」と。皆束裝す。大垣の諸將、之を聞き、終に議を決して出で戰ふ。曰く「備前中納言は出でて關原に陣し、安藝宰相は前軍を以て敵を邀へ、薩摩參議は菩提山より、赤坂の北に赴き、遶つて敵背に出で、三成以下、分れて三軍に屬し、機を胥て合擊し、東軍を呂久、合渡に擠さん」と。乃ち令を下して兵を治め、人をして出で、三國の軍を戒めしむ。

通釋 大垣の諸將は、會議して曰ふに「内大臣の來たのは確だ。どうしたら勝つことが出来よう」と。秀家が曰ふのに「彼は、必ず精銳の兵を盡して、攻めて來るであらう。我が守備は、既に備整つて居る。敵を待ち設

けるに充分である。田邊・大津の兵も、遠からず來り會するであらう。安藝中納言輝元も、亦續いて來るであらう。我は敵を要害堅固な大垣城の下に疲らし、機會を窺つて、内外から、合撃すれば、鷹が小雀を搏つやうなものである。是れが必勝の策である」と。三成は之を反駁して曰ふのに「否々、さうでない。今、敵の兵數は、我が半數しかない。俺は「我が軍敵に倍すれば、乃ち戰ふ」と云ふことを聞いた。然し二倍の兵力を有しながら、城を守つて戰はないといふことは聞いたことがない。我が輩は、大兵を擁して、關東軍を征伐するのである。しかも孤城を守つて、出で、戰はなければ、天下の我れに望を懸けて居る者は、皆落膽して仕舞ふであらう。前年、小牧の役に於ても、太閤は、小心に過ぎて、戰ふべきにも、進んで戰はなかつた。そして終に、内大臣に勇名をなさしめたではないか。今日、斯かる過失を重ねてはならぬ」と。諸將の中でも、勇を恃むものは、多く其の議に賛成した。吉隆・正家が、之を争つて曰ふのに「當今の世、誰か内大臣と對陣し、野戰に於て勝を得ることが出来ようか。たゞ持重して、之を疲らす外には、必勝萬全の策はない。浮田中納言は、考が深いから、宜しく之に従ふべきである」と。評議は區々として纏まらなかつたが、内大臣は、大方そんな事であらうと、敵の内情を推測し、そこで、言ひ觸らして曰ふのに「敵は敢て討つて出ない。我は兵を置いて、之に備へ、そして、西に向つて、直に大阪を取らう」と。やがて、皆が支度に取り掛つた。すると大垣の諸將は、之を聞き、終に議を決し、出で、戰ふことにした。そこで、次の如く部將を定め、策戰を申し渡した「備前中納言秀家は、出で、關原に陣せよ。安藝宰相秀元は前軍を以て敵を迎へよ。薩摩參議義弘は菩提山から赤坂の北に赴き、遶つて敵の後にいでよ。三成以下は、夫れ々々三軍に分屬し、時機を窺つて合撃し、東軍を呂久・合渡の川に追ひ落せよ」と。そこで命令を下して、兵士を支度させ、人を遣つて、三國の軍兵に注意させた。

語釋 田邊・大津之兵(細川・京極兩氏) ○安藝黃門(中納言毛) ○倍則戰(孫子の) ○安藝宰相(秀元を指す) ○薩摩參議(島津) ○三國之軍(備前・安藝・薩摩の軍勢をいふ)

即夜島津義弘使族家久入説曰「東兵遠來衆心未定請今夜潛兵襲撃吾爲先鋒衝其麾下必利不利乃赴關原爲未晚」島勝猛曰「詰且之事吾將再見德川甲背何必草草爲也」三成曰「然家久顧勝猛曰子嘗見德川甲背乎」對曰「僕少仕甲斐嘗追之遠江矣家久曰今德川非舊德川子同視之可謂飯匕爲矩也」不辭而出毛利秀元素通於我乃託言不欲爲秀家先驅三成親往諭之不肯三成乃約曰「吾輔浮田君與敵交鋒而公橫擊之吾胥其時舉烽爲號」秀元佯諾三成乃赴筑前軍見秀秋昂之遂北赴小關村大垣諸將繼發設大炬于栗原山以燎路路隘隊伍不整又遇雨衣甲皆濕五更而達

訓讀 即夜、島津義弘、族家久をして入り説かしめて曰く「東兵遠く來る。衆心未だ定らず。請ふ、今夜、兵を潛めて襲撃せん。吾れ先鋒と爲つて、其の麾下を衝かば、必ず利あらん。利あらずば、乃ち關原に赴くも、未だ晩からずと爲す」と。島勝猛曰く「詰且の事、吾れ將に再び德川の甲背を見んとす。何ぞ必ずしも草々として

爲さんや」と。三成曰く「然り」と。家久、勝猛を顧みて曰く「子、嘗て徳川の甲背を見たる乎」と。對へて曰く「僕、少くして甲斐に仕へ、嘗て之を遠江に追へり」と。家久曰く「今の徳川は舊の徳川に非ず。子同じく之を視る。飯ヒを矩と爲すと謂ふべきなり」と。辭せずして出づ。毛利秀元、素より我に通ず。乃ち秀家の先驅と爲るを欲せずと託言す。三成親ら往いて之を諭す。肯せず。三成乃ち約して曰く「吾は浮田君を輔けて、敵と鋒を交へん。而して公は横に之を撃て。吾れ其の時を奪て、烽を擧げて號を爲さん」と。秀元伴り諾す。三成乃ち筑前の軍に赴き、秀秋を見て之を勗む。遂に北小關村に赴く。大垣の諸將繼いで發す。大垣を栗原山に設け、以て路を燎す。路隘く、隊伍整はず。又雨に遇ひ衣甲皆濕ふ。五更にして達す。

通釋 其の夜、島津義弘は、一族の家久を遣り、入つて説かして曰ふのに「東兵は、遠くから來たのです。衆の心が未だ落着かないで居ます。今夜兵を潛めて、襲撃しよう。我が部隊が先鋒となつて、其の麾下を衝けば必ず勝利を得るであらう。若し、又、負けた處で、關原へ打つて出ても、遅くはない」と。島勝猛が曰ふのに「明朝、吾々は再び徳川方の逃げる鎧武者の後姿を見るであらう。戦は勝つたに定まつて居るのに、何もあわて、夜討など、するに及ばない」と。三成は「さうだ。其の通りだ」といつた。家久は、勝猛を顧みて曰ふのに「貴公等は、徳川方の鎧の後でも見たことがあるのか」と。勝猛は對へて曰ふのに「俺は、若い時分に、甲斐の武田氏に仕へた、そして、遠江で徳川勢を追ひ捲つたことがある」と。家久が曰ふには「今の徳川は、昔の徳川ではない。然るに、貴公は、何時も同じだと思ふのか。それは杓子定規といふものだ」と。そのまゝ挨拶もしないで退出した。毛利秀元は、初めから、我が軍に内通して居た。依つて、秀家の先驅は御免だといふにかこつけて、命令を聽かない。三成は、自分で出かけ、之を諭した。承知しない。そこで三成は約束して曰ふのに「俺は、浮

田殿を援けて、敵と鋒を交へよう。貴公は横から撃つがい。俺はい、時を見計、烽火を擧げて、合圖をしよ」と。秀元は伴つて承諾した。そこで、三成は、筑前の軍に赴き、秀秋に遇つて之を勵ました。それから、北して小關村に赴いた。大垣の諸將は、相繼いで出發した。栗原山には大松明を燃やして、路を照らしたが、何分路が、狭いから、隊伍は揃はない。其上、雨に遇つたので、衣類や鎧は皆ぬれた。五更の頃、やつと目的地に到着した。

語釋 飯ヒ爲矩(杓子を定規にすること) ○小關村・栗原山(濶)

浮田秀家・島津義弘背天滿山、東向而陣。小西行長陣其左。石田三成又陣其左。有馬・河尻・糟谷・石河・布施・玉置氏陣其右。大谷吉隆與平塚爲廣・戸田重政又陣其右。小早川秀秋屯松尾山。脇坂安治・小川祐忠・朽木元綱・赤座久兵在麓。毛利秀元屯南宮山。鍋島勝茂・長束正家・長曾我部盛親・安國寺惠瓊在麓。皆北嚮而陣。騎卒凡十二萬八千。

訓讀 浮田秀家・島津義弘、天滿山を背にし、東向して陣す。小西行長は其の左に陣す。石田三成は又其の左に陣す。有馬・河尻・糟谷・石河・布施・玉置氏は其の右に陣す。大谷吉隆は平塚爲廣、戸田重政と又其の右に陣す。小早川秀秋は松尾山に屯す。脇坂安治・小川祐忠・朽木元綱・赤座久兵は麓に在り。毛利秀元は南宮山に

屯す。鍋島勝茂・長束正家・長曾我部盛親・安國寺惠瓊は麓に在り。皆北嚮して陣す。騎卒凡て十二萬八千。
通釋斯くて、浮田秀家・島津義弘は、天満山を後にして、東に向つて陣取つた。小西行長は其の左に陣取つた。石田三成は、又、其の左に陣取つた。有馬・河尻・糟谷・石河・布施・玉置の諸將は其の右に陣取つた。大谷吉隆は部下の平塚爲廣・戸田重政と共に、又其の右に陣取つた。小早川秀秋は松尾山に屯した。脇坂安治・小川祐忠・朽木元綱・赤座久兵は松尾山の麓にあつた。毛利秀元は南宮山に屯した。鍋島勝茂・長束正家・長曾我部盛親・安國寺惠瓊は南宮山の麓に居つた。皆北に向つて陣取つた。其の兵數は、騎兵歩卒合せて凡そ十二萬八千人であつた。

福島氏候吏法齋者走報曰敵出矣正則問何以知之曰臣撥馬矢皆溫是以知之正則乃使人赴岡山告之既而長松會根諸砦皆上狀内大臣晒曰敵墮我術中矣乃下令軍中部署諸將以福島正則爲先驅下野守忠吉與井伊直政本多忠勝爲申驅黑田長政加藤嘉明細川忠興田中吉政生駒一正竹中重門戸川達安等爲右軍藤堂高虎山内一豊織田長益津田信成京極高知等爲左軍蜂須賀至鎮筒井定次稻葉貞通遠藤慶隆小出秀家龜井茲矩寺澤廣高等爲游軍淺野左京大夫池田輝政與中村德永市橋有馬金森等備南宮山水野勝成松平康長與一柳

松下西尾津輕等備大垣内大臣自以麾下爲中軍酒井家次居前本多康重大須賀忠政居後騎卒凡七萬五千。

訓 福島氏の候吏法齋といふ者、走り報じて曰く「敵出づ」と。正則問ふ「何を以て之を知る」と。曰く「臣、馬矢を撥ひしに皆温なり。是を以て之を知る」と。正則乃ち人をして岡山に赴いて之を告げしむ。既にして長松・會根の諸砦、皆狀を上る。内大臣晒つて曰く「敵、我が術中に墮つ」と。乃ち令を軍中に下し、諸將を部署す。福島正則を以て先驅と爲し、下野守忠吉と井伊直政・本多忠勝とを申驅と爲す。黒田長政・加藤嘉明・細川忠興・田中吉政・生駒一正・竹中重門・戸川達安等、右軍たり。藤堂高虎・山内一豊・織田長益・津田信成・京極高知等、左軍たり。蜂須賀至鎮・筒井定次・稻葉貞通・遠藤慶隆・小出秀家・龜井茲矩・寺澤廣高等、游軍たり。淺野左京大夫・池田輝政は、中村・德永・市橋・有馬・金森等と、南宮山に備へ、水野勝成・松平康長は一柳・松下・西尾・津輕等と、大垣に備へ、内大臣は自ら麾下を以て中軍と爲る。酒井家次は前に居り、本多康重・大須賀忠政は後に居る。騎卒凡て七萬五千。

通釋 福島氏の斥候の役人、法齋といふ者が、走り還つて注進して曰ふのに「愈々敵は出掛けました」と。正則が何うして知つたかといつた。すると、答へて私が、馬糞を拾つて見ると、皆温かでありますから、それと察しました」と。そこで正則は人を、岡山の本陣へ遣り、其の旨告げさせた。次いで、長松・會根の諸砦から、同じく注進して来た。内大臣は、笑つて曰ふのに「敵は我が計略にはまつた哩」と。そこで、命令を軍中に下して、諸將の部署を定めた。福島正則を先がけとなし、下野守忠吉は井伊直政・本多忠勝と共に第二陣、黒田長政

・加藤嘉明・細川忠興・田中吉政・生駒一正・竹中重門・戸川達安等は右軍となつた。藤堂高虎・山内一豊・織田長益・津田信成・京極高知等は左軍と爲つた。蜂須賀至鎮・筒井定次・稻葉貞通・遠藤慶隆・小出秀家・龜井茲矩・寺澤廣高等は遊撃軍となつた。淺野左京大夫、池田輝政は中村・徳永・市橋・有馬・金森等と、もに南宮山の軍に備へ、水野勝成・松平康長は一柳・松下・西尾・津輕等と、もに大垣の軍に備へ、内大臣は、自ら麾下を率ゐて、中軍となつた。酒井家次は前に、本多康重・大須賀忠政は後に居つた。其の兵數は、騎兵歩卒、合せ七萬五千人程である。

○皆温(敵が城を出て、馬が出てから) ○岡山(家康の) ○申驅(申は重ねること。即ち) ○岡山(本陣の)

遣奥平貞治潛赴松尾山、監秀秋軍使、蒞戰、酬爲内應。黑田氏將毛谷主水使至中軍。召問敵數。對曰「三萬」。曰「我候騎皆以十餘萬告。汝何所見」。對曰「臣算其闘士而已」。内大臣大悅。十五日黎明、親擐甲不胄而中、上馬率諸軍進至桃配野。召忠勝曰「南宮之敵可疑」。忠勝曰「彼若挾詐、當下山陣。今猶在頂。是無慮也」。内大臣曰「然賜忠勝以名馬三國驪者、遣之自進軍。可半里。家次以白旗十二旒先行三百步。會天大霧、咫尺不可辨。東西之軍遇于關原。」

訓讀 奥平貞治を遣はし、潛に松尾山に赴き、秀秋の軍を監し、戰酬なるを俟つて内應を爲さしむ。黒田

氏の將毛谷主水、使して中軍に至る。召して敵數を問ふ。對へて曰く「三萬」と。曰く「我が候騎は皆十餘萬を以て告ぐ。汝は何の見る所ぞ」と。對へて曰く「臣は其の闘士を算するのみ」と。内大臣、大に悦ぶ。十五日黎明、親ら甲を擐し、胄せずして中し、馬上つて諸軍を率ゐ、進んで桃配野に至る。忠勝を召して曰く「南宮の敵疑ふべし」と。忠勝曰く「彼れ若し詐を挾まば、當に山を下つて陣すべし。今猶頂に在り。是れ慮無きなり」と。内大臣曰く「然り」と。忠勝に賜ふに名馬三國驪といふ者を以てし、之を遣はし、自ら軍を進むること半里可り。家次、白旗十二旒を以て先行すること三百步。會天、大に霧ふり、咫尺辨すべからず。東西の軍關原に遇ふ。

通釋 奥平貞治を遣はし、竊かに、松尾山に赴いて、秀秋の軍を監督させ、戰酬になるを待つて裏切させた。黒田氏の部將毛谷主水は、使して、中軍に至つた。内大臣は召して敵の人數を問うた。三萬だと答へた。内大臣は怪んで訊ねるのに「我が斥候は、皆十餘萬といふ。三萬とは、貴様、何か考でもあるのか」と。すると、主水が答へて曰ふのに「私は、その中で、まことに戰ふ者の、人數を申したのであります」と。内大臣は、大に悦んだ。十五日の夜明け頃、内大臣は、自ら鎧を着たが、わざと兜はかぶらずして頭巾を蒙り、馬に乗つて、諸軍を率ゐ、進んで桃配野に至つた。そして忠勝を召して曰ふのに「南宮の敵は、裏切するといつたが、何うも疑はしいぞ」と。忠勝が曰ふに「若し彼が、詐を挾むならば、山を下つて、陣すべき筈であります。今も矢張、山頂に居ます。これは何も心配はありませんまい」と。内大臣は「それもさうだ」といつた。そして忠勝に名馬の三國驪を賜はつて、之を遣はし、自ら半里ばかり軍を進めた。家次は十二旒の白旗を押し立て、先行すること三百步であつた。折しも、大霧の天氣で、一寸先も分らぬ位。愈々、東西の兩軍は、關原に於て出遇つた。

語釋 南宮之敵(秀元の兵)

日加辰而天霽。敵諸將觀我軍已近。欲誘致而夾擊之。未敢挑戰。忠吉時年十二。與直政以兵三百踰正則陣而前。正則臣可兒才藏誰何之。答曰「下野公子井伊侍從自爲斥候也。」曰「候騎不可多。」直政乃附兵於其老木俣右京而以十餘騎馳。既而中軍鼓螺起。諸隊大開。弓銃已交。忠吉親冒義弘陣。與一驍騎搏墮馬。命從兵斬之。復進被創。直政扞戰。右京尋至。忠勝乘三國驪橫衝敵陣。陣皆披靡。其子忠朝手斬二騎。義弘行長戰甚力。秀家亦擊正則。殺傷數百。我衆將卻。正則叱咤督戰。會游軍來援。合兵疾擊。

訓讀 日、辰を加へて天霽る。敵の諸將、我が軍の已に近づくを觀、誘致して之を夾撃せんと欲す。未だ敢て戰を挑まず。忠吉、時に年十二なり。直政と兵三百を以て正則の陣を踰えて前む。正則の臣可兒才藏、之を誰かす。答へて曰く「下野公子、井伊侍從、自ら斥候を爲すなり」と。曰く「候騎は多かるべからず」と。直政乃ち兵を其の老木俣右京に附して、十餘騎を以て馳す。既にして中軍に鼓螺起り、諸隊、大に開し、弓銃已に交る。忠吉、親ら義弘の陣を冒し、一驍騎と搏つて馬より墮し、從兵に命じて之を斬らしめ、復進んで創を被る。直政

扞ぎ戦ふ。右京尋いで至る。忠勝、三國驪に乗り、横に敵陣を衝く。陣皆披靡す。其の子忠朝、手づから二騎を斬る。義弘、行長、戰甚だ力む。秀家も亦、正則を撃つて、殺傷數百。我が衆、將に卻かんとす。正則、叱咤督戦す。會々游軍來り援く。兵を合せて疾く撃つ。

通釋 やがて、朝の八時(辰刻)になると霧がかりりと、霽れた。敵の諸將は、我が軍の近づくを見、おびき寄せて挾討にしようとした。未だ戰を挑まうとしなかつた。忠吉は、其の時、僅か十二歳であつた。直政と共に、三百人の兵を率ゐ、正則の陣を踰えて進んだ。正則の家來、可兒才藏が「誰だ」といつて尋ねた。答へて曰ふのに「下野の若君と井伊侍從が、自ら斥候をするのである」と。才藏は「斥候の騎兵が多いのはよくない」といつた。そこで直政は家老の木俣右京に兵を引き渡し、十餘騎を率ゐて馳せた。間もなく、本陣では、攻太鼓を打ち、法螺貝を吹き立て、諸方の隊からは喊聲が揚り、弓や鐵砲を打ち出した。忠吉は自ら義弘の陣屋を犯し、強い一人の騎馬武者と組討して、馬から落し、從兵に命じて、首掻き斬らせ、更に進むと、創を受けた。直政は拒ぎ戦つて居た。家老の右京が、間もなく至つて、援けた。忠勝は名馬三國驪に打乗り、横から敵陣を衝いた。敵軍は皆披靡した。其の子忠朝は、進んで手づから二騎を斬つた。義弘は、戦つて甚だ力めた。秀家は、正則の陣を撃つて、殺傷すること數百に及んだ。此の勢に我が軍は退却しようとした。すると、正則は、大音聲で叱咤して督軍した。折しも游軍が來り援たので兵を合せて、疾く撃つた。

語釋 辰(午前八時) ○下野公子(忠) ○一驍騎(島津の家來松浦三郎兵衛)

我右軍自菩提山南循麓而進。長政豫揀死士十餘。自從。欲必擊三成。先諸將迫其

柵斃三成、將島勝猛。吉政一正與三成、將蒲生備中・北川十郎戰而不利。嘉明・忠興擊其橫。吉政等返之。左軍諸將自道南進、直擊吉隆。與爲廣・重政健闘。我兵不可進。時日將午。兩軍迭進互退、勝敗未決。

訓讀 我が右軍、菩提山の南より、麓に循つて進む。長政、豫め死士十餘を揀んで自ら従へ、必ず三成を撃たんと欲す。諸將に先だつて其の柵に迫り、三成の將島勝猛を斃す。吉政・一正、三成の將蒲生備中・北川十郎と戦つて利あらず。嘉明・忠興、其の横を撃つ。吉政等、之に返す。左軍の諸將は道南より進み、直に吉隆を撃つ。吉隆、爲廣・重政と健闘す。我が兵進むべからず。時に日將に午ならんとす。兩軍、迭に進み互に退き、勝敗未だ決せず。

通釋 我が右軍は、菩提山の南から、麓を通つて進んだ。長政は、豫め、決死の士十餘人を選んで、自ら率ゐ、必ず三成を撃たうと念じて居た。そして、諸將に先立つて、其の柵に迫つて、三成の大將島勝猛を斃した。吉政・一正は三成の部將蒲生備中・北川十郎と戦つたが、情況は不利であつた。嘉明・忠興が、其の横を撃つた。吉政は引返してこれと戦つた。左軍の諸將は、道の南から進み、直に吉隆を撃つた。吉隆は爲廣・重政と激しく闘つた。我が兵は、進むことが出来なかつた。時は丁度正午に近かつた。東西の兩軍は、進むもあり、退くもあり、勝敗は容易に決しなかつた。

西軍數、舉烽。秀元不敢動。秀秋亦不敢。應東軍。東軍發礮松尾山、以試之。與平貞治

亦促之。秀秋乃以兵八千下山。平岡重定・稻葉正成爲先鋒、追吉隆之右。不利。貞治戰死。脇坂・朽木・小川・赤座、諸將與我左軍相翼而進。信成・長益、斬重政。小川氏部兵、斬爲廣。秀秋返戰、三面合擊。於是內大臣傳令諸軍、鼓譟、齊進、聲震天地。西軍大動。我先驅乘之、擊走秀家。我左軍既獲吉隆、進與右軍夾擊、走三成、斬十郎。備中・行長之軍望見、擾亂、欲卻而整。我申驅迫、擊走之。義弘以一軍東南走。正家・盛親等皆潰。西軍遂大敗。我軍乘勝、追北、斬首四萬級。原草爲之赤。

訓讀 西軍、數烽を擧ぐ。秀元敢て動かさず。秀秋も亦、敢て東軍に應ぜず。東軍、礮を松尾山に發し以て之を試む。與平貞治も亦、之を促す。秀秋乃ち兵八千を以て山を下る。平岡重定、稻葉正成、先鋒と爲り、吉隆の右に迫る。利あらず。貞治、戰死す。脇坂、朽木、小川、赤座の諸將、我が左軍と相翼けて進む。信成、長益は重政を斬り、小川氏の部兵は爲廣を斬る。秀秋返り戦ひ、三面より合撃す。是に於て、內大臣令を諸軍に傳へ、鼓譟して齊しく進み、聲、天地に震ふ。西軍、大に動く。我が先驅、之に乗じ、撃つて秀家を走らす。我が左軍は既に吉隆を獲、進んで右軍と夾撃し、三成を走らせ、十郎、備中を斬る。行長の軍望み見て擾亂し、卻いて整へんと欲す。我が申驅迫り撃つて之を走らす。義弘、一軍を以て東南に走る。正家、盛親等、皆潰え、西軍遂に大に敗る。我が軍、勝に乗じて北ぐるを追ひ、首を斬ること四萬級。原草、之が爲に赤し。

通釋 西軍は屢々烽火を擧げて促した。秀元は未だ動かうともしなかつた。秀秋も亦た東軍に應じようとの氣振を見せない。東軍は、松尾山に向つて大砲を打つて、これを試みた。軍監奥平貞治も亦た催促した。秀秋はそこで、漸く決心の臍を固め、兵八千を率ゐて、山から下つた。平岡重定、稲葉正成が、其の先鋒となり、吉隆の陣の右に迫つた。然し忽ち敗れた。そして貞治は戦死した。脇坂、朽木、小川、赤座の諸將も、東軍に内應し、我が左軍と相助けて進んだ。信成、長益は重政を斬り、小川氏の部下は、爲廣を斬つた。秀秋も返して戦つたので、三面から合撃した。斯くて、内大臣は、諸軍に命令を傳へ、攻太鼓、喊の聲高く、一齊に進ませたが、其の聲は、天地に震ふる程であつた。西軍は氣勢挫けたので大に動を來した。我が先鋒は、之に乗じて撃つて撃つて走らせた。左軍は、既に、吉隆を討ち取つたので、進んで右軍と共に、夾討にして、三成を走らせ、十郎、備中を斬つた。すると、行長の軍は、この有様を望み見て、亂れ出し、退いて、陣を立て直さうとした。すると、我が二陣は、迫り撃つて、之を走らせた。この間、義弘は一軍を率ゐて、東南に走つた。正家、盛親等は、皆潰え、西軍は大敗北をした。我が軍は、勝に乗じて、北ぐるを追つて敵を斃し、首を斬ること四萬餘級。さしもに廣い關原の草は、その流れる血汐で赤く染まつた。

未時戰罷。我士卒死傷不滿四千。將帥無一人死者。盡赴中軍。效首虜。内大臣據胡床。顧左右取冑。左右怪問故。内大臣笑曰。諺所謂勝而肅冑者。也。乃以忠勝爲擯。延見諸將。忠勝贊曰。列侯今日之戰皆絕類離群矣。正則曰。中務用兵乃過所聞。忠

勝曰。敵脆弱。不足較也。忠朝來謁。刀反不入室數寸。衆壯之。忠吉直政裏創而至。内大臣起視直政。創手注藥。以其餘賜忠吉。直政告忠吉戰狀曰。鄙語言「鷹之俊者其雛亦俊」。臣於四郎見之。内大臣曰。發縱者得宜爾。

訓讀 未の時に戰罷む。我が士卒の死傷は四千に満たず。將帥に一人の死する者無し。盡く中軍に赴いて首虜を效す。内大臣、胡床に據り、左右を顧みて冑を取らしむ。左右怪しんで故を問ふ。内大臣笑つて曰く「諺に所謂、勝つて冑冑を肅する者なり」と。乃ち忠勝を以て擯と爲し、諸將を延見す。忠勝、贊して曰く「列侯、今日の戰、皆絶類離群なり」と。正則曰く「中務の兵を用ふること、乃ち聞く所に過ぐ」と。忠勝曰く「敵は脆弱なり。較するに足らず」と。忠朝來り謁す。刀反つて室に入らざること數寸。衆、之を壯とす。忠吉、直政、創を裏んで至る。内大臣、起つて直政の創を視、手づから藥を注ぎ、其の餘を以て忠吉に賜ふ。直政、忠吉の戰狀を告げて曰く「鄙語に言ふ『鷹の俊なる者は、其の雛も亦俊なり』と。臣、四郎に於て之を見る」と。内大臣曰く「發縱者宜しきを得しのみ」と。

通釋 戰は午前二時(未刻)に至つて、全く濟んだ。我が士卒の死傷は四千にも満たず。大將株には、一人の戦死者もない。盡く本軍に來て、首や生捕を差し出した。内大臣は、胡床に據つて、近侍の者を顧み、冑を持ち來させた。左右の者は怪んで其の故を尋ねた。内大臣は笑つて曰ふのに「諺にいふ、勝つて冑の緒をしめるといふは、是れである」と。そこで忠勝を接待役として、諸將を招いて、對面した。忠勝は譽め立て、曰ふのに

諸大名方、今日の戦は、皆、人並すぐれた、目覺しい働ばかりであつた」と。正則が曰ふのに「申務が用兵に巧みだとは、豫ねてから聞いて居たが、思つたより優れて居る」と。忠勝が曰ふに「敵が弱い。全く較べものにはならないのだ」と。臆て、忠朝が來つて謁した。刀が曲つて、何寸も鞘へ這入らない。皆の人々は之を壯なりとして賞歎した。忠吉、直政の兩人は創に纏帶して遣つて來た。内大臣は起つて、直政の創を視、手づから藥を注ぎかけて手當をし、其の残りを忠吉に賜はつた。直政は忠吉の戰つた有様を告げて曰ふのに「諺に逸物の鷹は、其の雛まで優れて居るといふことだ。全く其の通りで、私は今日、四郎殿に見せて貰つた」と内大臣が曰ふのに「夫れは、貴様の指圖が善かつたからだ」と。

○鷹之後者云々(親に似てすぐれた親鷹の子は、矢張) ○發縱(せるはなして、自由にはたらか) ○刀反(刀がそり曲つたこと。戰の激しかつたことを示す)

秀秋・秀元疑懼未至。内大臣使人召秀秋。乃與脇坂安治等來謁膝行而前。莫敢仰視。正則耳語長政曰「黃門何醜也」。長政曰「雉而遇鷹固宜如此」。内大臣使秀秋攻澤山。自效以。小川赤座有罪奪邑放之。秀元使使賀捷。以其父輝元在大阪不敢先謁。引而西歸。池田淺野等亦撤備上謁。正則進而言曰「足下決天下勝敗於一日。振古所無也」。岡江雪曰「譬之猶昏夜向明也」。蓋凱内大臣曰「諸君爲我努力得以取此大捷。而諸君家室皆在大阪。吾心未降也。不出數日取附之諸君。然後凱耳。諸將聞之。有感泣者。於是發使者東報捷於中納言及少將秀康。使直政忠勝西次。今須自以諸軍止舍藤川。」

捷而諸君家室皆在大阪。吾心未降也。不出數日取附之諸君。然後凱耳。諸將聞之。有感泣者。於是發使者東報捷於中納言及少將秀康。使直政忠勝西次。今須自以諸軍止舍藤川。

訓讀 秀秋、秀元、疑懼して未だ至らず。内大臣、人をして秀秋を召さしむ。乃ち脇坂安治等と來り謁し、膝行して前む敢て仰視する莫し。正則、長政に耳語して曰く「黃門何ぞ醜きや」と。長政曰く「雉にして鷹に遇はば、固より宜しく此の如くなるべし」と。内大臣、秀秋をして澤山を攻めて自ら効さしむ。小川、赤座は罪有るを以て邑を奪つて之を放つ。秀元、使をして捷を賀せしむ。其の父輝元、大阪に在るを以て敢て先謁せずと。引いて西歸す。池田、淺野等も亦、備を撤して上謁す。正則進んで言つて曰く「足下、天下の勝敗を一日に決す。振古無き所なり」と。岡江雪曰く「之を譬ふる、猶昏夜の明に向ふが如きなり。蓋ぞ凱せざる」と。内大臣曰く「諸君、我が爲に努力し、以て此の大捷を取るを得たり。而も諸君の家室、皆大阪に在り。吾が心未だ降らざるなり。數日を出でずして、取つて之を諸君に附し、然して後、凱せんのみ」と。諸將之を聞き、感泣する者有り。是に於て、使者を發し、東に捷を中納言、及び少將秀康に報ず。直政、忠勝をして西今須に次せしめ、自ら諸軍を以て止つて藤川に舍す。

政に耳打して曰ふのに「中納言は、何たる見苦しい態だ」と。長政が曰ふのに「鷹に出合つた雉だもの、是れが當然だ」と。内大臣は、秀秋に、澤山を攻めさせて、其の罪を償はしめた。小川、赤座は、罪があるから、其の領地を取り上げて、追放した。秀元は、使を差し立て、戦捷を賀せしめた。父の輝元が、大阪に居るから、自分一人、先立つて拜調をしないと云つた。そして軍勢を引き連れて西へ歸つた。池田、淺野等も、備を取り拂つて拜調した。正則は進んで曰ふのに「内大臣殿は天下の勝敗を一日に決せられた。昔から全く例の無いことである」と。岡江雪が曰ふのに「譬へて見ると、夜が明けた様なものです。なぜ勝鬨を揚げないのですか」と。内大臣が曰ふのに「諸君は、余の爲めに盡力せられたので、此の大捷を得たのだ。處で諸君の家族は、皆大阪に居る。これを思へば我が心は、未だ落ち着かない。數日中には、之を取つて、諸君に引き渡し、其の後に、勝鬨を揚げるとしよう」と。諸將は之を聞き、有難く思つて、泣いたものさへあつた。そこで、使者を遣はして、勝を中納言秀忠、少將秀康に知らせた。直政、忠勝を西に遣つて、今須に駐屯させ、内大臣自身は、諸軍を率ゐて、藤川に泊つた。

語釋 吾心未降(心が安らかにならぬ。落付かぬ。) ○今須・藤川(濃)

内大臣既大捷。西軍崩潰散之四方。四方豪傑莫不震懼。旬月之間六十餘國盡服。於德川氏先大捷。四日、田邊圍解細川藤孝徒龜山先大捷。一日、大津陷。京極高次之。高野。敵圍二城者、或奔或降。

訓讀 内大臣既に大捷す。西軍は崩潰し、散じて四方に之く。四方の豪傑、震懼せざるは莫し。旬月の間に六十餘國、盡く德川氏に服す。大捷に先だつこと四日、田邊の圍解け、細川藤孝、龜山に徙る。大捷に先だつこと一日、大津陷り、京極高次、高野に之く。敵の二城を圍みし者、或は奔り、或は降る。

通釋 内大臣が、大勝利を得た。西軍は總崩れとなり、ちり／＼になつて、逃げ失せた。四方の豪傑は、震懼れぬものはなかつた。爾後十月ばかりの間に、日本全國、六十餘州は、擧げて德川氏に服從した。大捷に先立つこと四日、田邊の圍も解け、細川藤孝は龜山に徙つた。大捷前、一日には、大津の城は陥落し、城主京極高次は、高野山に逃げ込んだ。依つて敵の二城を圍んだ敵兵は、或は逃げ失せ、或は降參した。

語釋 旬月(旬は十日、月は三十日。一説に旬月は十ヶ月、又は一説に二ヶ月。) ○二城(田邊、大津。)

大捷後一日、内大臣進躡磨鉞嶺陣。正法寺山使直政忠勝率小早川脇坂以下攻澤山。澤山兵已逃殘黨死守。明日直政自城後水道入縱火焚之。諸軍繼入族誅石田氏。遂徙陣永原。明日又徙八幡山。懸令大索諸渠。率我軍留備大垣者、聞關原戰作進薄其陣。城將福原某石田氏戚屬也。與熊谷垣見相良。秋月高橋等固守不下。松平康長令銃卒以銃代楯破陣而入奪其外郭。議曰大師既捷。是何足損我兵。乃緩攻之。四日相良以下素通款。於是斬熊谷垣見以降。福原削髮遁。尋賜死。我軍留

備南宮者奉命追擊多所斬獲池田長吉龜井茲矩逼水口獲正家還報以城內貨財賞賜之近江人捕行長獻之田中吉政捕三成于伊吹山中獻之

大捷の後一日、内大臣、進んで磨鍼嶺を踰え、正法寺山に陣し、直政、忠勝をして、小早川、脇坂以下を率ゐて澤山を攻めしむ。澤山の兵已に逃れ、殘黨、死守す。明日、直政、城後の水道より入り、火を縦つて之を焚く。諸軍繼いで入り、石田氏を族誅し、遂に徙つて永原に陣す。明日、又八幡山に徙り、令を懸けて大に諸々の渠率を索む。我が軍の留つて大垣に備ふる者、關原の戰、作ると聞き、進んで其の陣に薄る。城將福原某は、石田氏の戚屬なり。熊谷、垣見、相良、秋月、高橋等と、固く守つて下らず。松平康長、銃卒に令し、銃を以て檣に代へ、陣を破つて入り、其の外郭を奪ふ。議して曰く、「大師既に捷つ。是れ何ぞ我が兵を損するに足らん」と。乃ち緩く之を攻むること四日、相良以下、素より款を通ず。是に於て、熊谷、垣見を斬り、以て降る。福原は髪を削つて遁る。尋いて死を賜ふ。我が軍の留つて南宮に備ふる者、命を奉じて追撃し、斬獲する所多し。池田長吉、龜井茲矩、水口に逼り、正家を獲て還り報す。城内の貨財を以て、之に賞賜す。近江の人、行長を捕へて、之を獻す。田中吉政、三成を伊吹山中に捕へて、之を獻す。

通釋 大捷の後一日、内大臣は進んで磨鍼嶺を越え、正法寺山に陣取り、直政、忠勝を遣はし、小早川、脇坂以下を率ゐて、三成の居城、澤山を攻めさせた、澤山を守つた敵兵は、多く逃れ去つたが、一部の殘黨は死を決して守つて居た。翌日、直政は、越後の下水口から押し入り、火を放つて、之を焚いた。諸軍も續いて入り、石田氏の一族を皆殺にし永原へ徙つて陣取つた。翌日、又、八幡山に徙り、所々に立札して、敵の大將どもを詮議して索

めた。大垣の備に留つた我が軍は、關原の戰が始まつたと聞き、進んで、其の牆に押し寄せた。城將福原某は、石田氏の親戚である。熊谷、垣見、相良、秋月、高橋等と共に固く守つて下らない。松平康長は、銃卒をして、鐵砲を棒に代用し、牆を破つて攻め入らせ、其の外郭を奪つた。そして評議して曰ふのに「本軍が勝つた。然る上は味方の兵を損するは無駄だ」と。日を緩うして攻めること。四日の後豫ねてから、相良以下の者が内通して居た。この時になつて、熊谷、垣見を斬つて降参した。福原は髪を剃つて遁れた。間もなく死を賜はつた。留まつて、南宮山に備へた我が軍は、命を奉じて、追撃し、殺したり生捕にした數は多かつた。池田長吉、龜井茲矩は、水口に押し寄せ、長束正家を打捕へて、捷軍を報じた。城内の貨財を褒美として賜はつた。近江の人は、小西行長を捕へて獻じた。田中吉政は石田三成を伊吹山中に捕へて之を獻じた。

語釋 磨鍼嶺・正法寺山(近) ○永原・八幡山(美) ○檣(棒のこ) ○近江人捕行長(行長は逃げて槽川で林藏主に捕へられた。)

十九日内大臣幕于草津。天皇使使勞之。内大臣拜謝曰。姦人託事擾亂天下。臣家康賴諸將吏之力得以攘除之。四方殘黨當不日來降。幸勿勞聖慮焉。乃命池田左衛門尉福島左衛門大夫淺野左京大夫先入京師。鎮撫士民。且慰問北廳氏。大阪聞敗内外失色。輝元長盛馳使乞降。内大臣不答。使大野治長往諭秀賴母子。曰。近日之事吾明知不出冲子也。今亂人既獲。宜安堵如故。於是衆情大安。京畿帖服。而

山道軍亦至。

訓讀 十九日、内大臣、草津に暮す。天皇、使をして之を勞せしむ。内大臣拜謝して曰く「姦人、事に託して、天下を擾亂す。臣家康、諸將吏の力に頼り以て之を攘除するを得たり。四方の殘黨は、當に日ならずして來り降るべし。幸に聖慮を勞する勿れ」と。乃ち池田左衛門尉、福島左衛門大夫、淺野左京大夫に命じ、先づ京師に入つて、士民を鎮撫し、且つ北廳氏を慰問せしむ。大阪、敗を聞き、内外、色を失ふ。輝元、長盛、使を馳せて降を乞ふ。内大臣答へず。大野治長をして往いて秀頼母子を諭さしめて曰く「近日の事、吾れ明に沖子に出でざるを知る。今や亂人既に獲たり。宜しく安堵故の如くなるべし」と。是に於て、衆情、大に安んじ、京畿、帖服す。而して山道の軍も亦至る。

通釋 十九日、内大臣が、草津に陣した。天皇は使を遣はして、之を慰勞せしめられた。内大臣は拜謝して曰ふのに「悪人どもは、事に託して天下を搔き亂しました。臣家康は、諸將吏の力に頼つて、拂ひ除くことが出来ました。四方の殘黨も、不日、來つて降參するであります。何卒、大御心を惱ませ賜はぬやう」と。斯くて池田左衛門尉輝政、福島衛門大夫左正則、淺野左京大夫幸長に命じ、先づ京都に入つて、士民を鎮撫せしめ、且つ北政所を慰問せしめた。大阪では、關原の敗報を聞き、内外共々色を失つた。輝元、長盛は、急使を馳せて降參を乞うた。内大臣は返事をしなかつた。大野治長を遣つて、秀頼母子を諭さしめて曰ふのに「近日の一件、若君の心から出たのでないことは、私も明かに承知して居る。今や、悪者共は、討ち取られた。従前通り安堵なさるが善い」と。斯くて衆情は大いに安心した。京畿も安定して靜まつた。そして中山道からの軍も亦到着した。

語釋 亂人(石田) ○帖服(穩かに定ま)

山道軍以是月二日至小室使眞田信幸招其父昌幸昌幸不肯榊原康政曰彼必夜來嚴備以待昌幸果至不敢迫本多正信勸攻之戶田一西爭之不聽六日攻之不利乃令小室城主仙石秀久川中城主森忠政備之而西十七日至妻籠遇報捷使者兼程以至内大臣怒其愆期稱疾不見中納言垂泣而出

訓讀 山道の軍、是の月二日を以て、小室に至る。眞田信幸をして其の父昌幸を招かしむ。昌幸肯せず。榊原康政曰く「彼れ必ず夜來らん」と。備を嚴にし以て待つ。昌幸、果して至る。敢て迫らず。本多正信、勸めて之を攻む。戸田一西、之を争ふ。聽かず。六日、之を攻む。利あらず。乃ち小室城主仙石秀久、川中城主森忠政をして、之に備へしめて西す。十七日、妻籠に至る。捷を報ずる使者に遇ひ、程を兼ね以て至る。内大臣、其の期を愆れるを怒り、疾と稱して見ず。中納言、垂泣して出づ。

通釋 中山道からの軍は、是の月二日を以て、小室に至つた。眞田信幸をして其の父の昌幸を招かしめた。昌幸は聽きいれなかつた。榊原康政が曰ふのに「彼は必ず夜討に來るだらう」と。守備を嚴重にしてこれ待ち受けた。昌幸は、案の如く遣つて來た。敢て迫らなかつた。本多正信は、勸めて、之を攻めさせた。戸田一西が、不可だと言つて争つた。聽き入れない。六日に之を攻めた。負け戦であつた。そこで、小室の城主仙石秀久、川中城主森忠政をして、之に備へしめ、西に向つて進んだ。妻籠まで往つた。其處で關原の戦勝を知らせる使者に

出合つたので、晝夜兼行、程を急いで来た。内大臣は、約束の期日に遅れたのを怒り、病氣だといつて、逢はなかつた。中納言は涙を流して退出した。

康政・正信與大久保忠鄰・酒井忠利請見亦使井伊直政辭之直政素受寵任又爲公子忠吉婦翁於是出傳命因颺言曰儲君逗撓不及大事公等亦焉得不分責也諸將惶恐而退獨忠利留謂之曰儲君後期以攻上田爾主公不必深尤子何遽詬之爲直政曰吾爲儲君歎恨不能不言忠利作色曰藉令儲君失驩於主公子勳戚也宜彌縫之今乃衆彰其過果何意乎願得聞其說焉扣刀而進牧野康成本多成重救解而止衆指忠利曰彼今日舌戰過往年武功萬萬本多正純入白曰愆期由於正信也願罰正信以著儲君之無過内大臣意稍解

訓讀 康政、正信、大久保忠鄰、酒井忠利と、見えんと請ふ。亦井伊直政をして之を辭せしむ。直政、素より寵任を受く。又公子忠吉の婦翁たり。是に於て、出で、命を傳ふ。因つて颺言して曰く「儲君、逗撓して、大事に及ばず。公等も亦、焉んぞ責を分たざるを得んや」と。諸將、惶恐して退く。獨り忠利留つて、之に謂つて曰く「儲君の期に後れしは、上田を攻めしを以てのみ。主公、必ずしも深く尤めじ。子、何ぞ遽に之を諍るを爲す」と。

直政曰く「吾れ儲君の爲に歎恨す。言はざる能はず」と。忠利、色を作して曰く「藉令、儲君、驩を主公に失ふも、子は勳戚なり。宜しく之を彌縫すべし。今乃ち其の過を衆彰す。果して何の意ぞ。願はくは其の說を聞くを得ん」と。刀を扣へて進む。牧野康成本多成重、救解して止む。衆、忠利を指して曰く「彼、今日の舌戰は、往年の武功に過ぐることも萬々なり」と。本多正純、入つて白して曰く「期を愆りしは、正信に由るなり。願はくは正信を罰し以て儲君の過、無きを著せ」と。内大臣、意稍解く。

通釋 康政、正信は、大久保忠鄰、酒井忠利と共に、謁見を請うた。井伊直政をして、之を斷らせた。直政は、もともと、内大臣の寵任を受けて居た。又若君忠吉の嫁の父であつた。そこで、出で、命を傳へた。大聲で吹聴して曰ふのに「若殿が愚圖々々して、大事の間に合はなかつた。それは貴公等にも、責があるのだ」と、諸大將は何れも恐れ入つて退出した。獨り、忠利は、留まり直政に向つて曰ふには「若殿が間に合はれなかつたのは、上田を攻めたからである。主公でさへ、深く咎められない。貴公は、何故之を罵るか」と。直政が曰ふのに「若殿のことを思ふと、儂は殘念で堪らない。だから言はない譯には行かない」と。忠利は顔色をかへて曰ふのに「たとひ、若殿が主公の機嫌を損つたにせよ、貴公は勳功のある一族だ。それをうまく繕ふが然る可きだ。場所柄も辨へず、多勢の前で、其の過を大仰に言ひ立てた。果して何事だ、さあ其の譯を聞かう」と。刀の柄に手をかけて進むだ。牧野康成、本多成重が仲裁して事無く濟んだ。衆の人は、忠利を指して曰ふには「彼が今日の言ひ分は、前年の武功よりも、優れて居る」と。本多正純は、内に入つて申し上げて曰ふのに「若殿が間に合はなかつたのは、正信の所爲であります。何うか正信を罰して、若殿に罪のないことを明かに致したう御座います」と。内大臣も、少し機嫌が直つた。

語釋 大事(關原の合戦) ○衆彰(衆中で明か)

二十日、至_ル大津。召見_{シテ}中納言謂_レ之曰、「爲_ニ天下_ニ猶奕碁_ノ也。既_ニ勝_ニ其全局_ニ則雖_モ有_ニ敵子_ノ存者_ハ何足_レ較_ニ輸贏_ニ哉。汝未_ダ聞_ク若_シ說_フ乎。」中納言曰、「爾時_ニ戸田左門諫_ル兒勿_レ以_テ小失_大誠_ニ如_シ大人所_レ言_ク曰、「彼_ハ微_{者也}。故_ニ其言_ニ不行_耳。」乃_シ召_シ一西_ニ褒_レ之曰、「吾使_汝言_可行_矣。命_爲爲_ニ大津_ニ留守_ト。淺野彈正少弼奉_命從_ニ中納言_ニ而至_ル。内大臣召_{シテ}謂_レ之曰、「西面_ノ事_ハ我與_ニ秀忠_ニ能_レ辨_之。東面_ハ獨_リ有_ニ秀康_ノ子_往助_之。以_テ經理_{奥羽}。彈正少弼乃_東。」

訓讀 二十日、大津に至る。中納言を召見して、之に謂つて曰く「天下を爲むるは猶奕碁の如し。既に其の全局に勝てば、則ち敵子の存する者有りとも雖も、何ぞ輸贏を較するに足らんや。汝未だ若し説を聞かざるか」と。中納言曰く「爾時、戸田左門、兒を諫む、小を以て大を失ふ勿れ」と。誠に大人の言ふ所の如し」と。曰く「彼は微者なり。故に其の言行はれざるのみ」と。乃ち一西を召し、之を褒めて曰く「吾れ汝の言をして行ふ可からしめん」と。命じて大津の留守と爲す。淺野彈正少弼、命を奉じ、中納言に従つて至る。内大臣、召して之に謂つて曰く「西面の事は、我と秀忠と能く之を辨せん。東面は獨り秀康有るのみ。子往いて之を助け、以て奥羽を經理せよ」と。彈正少弼乃ち東す。

通釋

二十日、大津に至つた中納言を召し之に向つて曰ふには「天下を治めるのは、丁度碁を打つやうなもので

のぢや。既に碁盤全體で勝てば、たとひ敵の石が残つていても、勝負は較べるには及ばない。汝は、まだ斯様の議論を聞かなかつたか」と。中納言が曰ふのに「彼の時、戸田左門が私を諫めて「小事に拘つて大事を取り逃してなりませぬ」と。云ひました。眞に父君の御言葉と同じであります」と。内大臣が曰ふのに「左門は賤しい者だ。それ故其の言葉が行はれなかつたのぢや」と。そこで、戸田一西を召して、之を褒めて曰ふのに「俺は、今汝の言葉通りを行はせてやらう」と。そして大津の留守を命じた。淺野彈正少弼は、命を奉じ、中納言に従つて到着した。内大臣は、之に向つて曰ふには「西面の事は、我と秀忠で引き受ける。東面には、秀康、獨りしか居ない、甚だ覺束ないから、貴公は、往つて之を助け、奥羽を切り盛りして呉れるやう」と。そこで、彈正少弼は東に向つて出發した。

語釋 爾時(上田攻め) ○以小失大(小は上田、大は上國の敵)

於是兩道之軍盡萃_ニ于大津_ニ。侯伯將士來謁者如_レ雲。前田利長圍_ム青木一矩_于越前_ニ。數日而捷聞_至。一矩懼_レ降_納質_及賂_利長_受質_卻賂_{而來}謁_{内大臣}。慰_勞之_間曰_レ「令弟_何如_ト利長_囁嚅_不敢_對。内大臣曰_ク「子安_之尊_公嘗_以子_{兄弟}託_於我_我豈_忘之_哉。」使_罷蒞_命山岡_景友_奉命_徇伊勢_援福島_正賴_守長_島及_捷聞_至出_兵要_南宮_敗兵_擊走_之。取_桑名_龜山_神戸_諸城_{而來}謁_{内大臣}。乃_遣奥_平信_昌入_京師_以板_倉勝_重。

加藤正次・大久保長安爲副行所司代事捕僧惠瓊。

訓讀 是に於て、兩道の軍、盡く大津に萃る。侯伯、將士、來調する者雲の如し。前田利長、青木一矩を越前に圍む。數日にして捷聞至る。一矩懼れて降り、質及び賂を納る。利長、質を受け賂を卻け、而して來調す。内大臣、之を慰勞す。問うて曰く「令弟は何如」と。利長、嘔喘して敢て對へず。内大臣曰く「子、之を安んぜよ。尊公、嘗て子の兄弟を以て我に託す。我れ豈に之を忘れんや」と。罷りて命を俵たしむ。山岡景友、命を奉じて伊勢を徇へ、福島正頼を援けて長島を守る。捷聞至るに及び、兵を出して南宮の敗兵を要し、撃つて之を走らす。桑名、龜山、神戸の諸城を取つて來調す。内大臣、乃ち奥平信昌を遣はして京師に入り、板倉勝重、加藤正次、大久保長安を以て副と爲し、所司代の事を行はしむ。僧惠瓊を捕ふ。

通釋 是に於て、東海東山、兩道の軍は、盡く大津に集つた。大名、小名の來り調するものは、雲の如く、誠に夥しいものであつた。前田利長は、青木一矩を越前に圍んだ。數日にして、關原の敗報が到着した。一矩は懼れて降參し、人質及び賂路を差し出した。利長は、人質丈け取つて、賂路は突き返へし、總て來り調した。内大臣は、之を慰勞した。利長に問うて曰ふのに「御舍弟は、何んな様子か」と。利長は、口ごもつて返事をしなかつた。内大臣が曰ふのに「心配なさるな。嘗て、御尊父が貴公等兄弟の事を俺に頼まれてあつた。何うして忘れよう」と。國へ還つて、重ねての命令を待たしめた。山岡景友は、命を奉じて、伊勢を徇へ、福島正忠を援けて、長島を守つた。捷報が至るに及び、兵を出して、南宮山からの落武者を待ち受け、撃つて之を走らせた。又、桑名、龜山、神戸の諸城を攻め取り、やがて來り調した。内大臣は、奥平信昌を遣して、京都に入らしめ、

板倉勝重・加藤正次・大久保長安を脇添役として、所司代の事を行はしめた。僧惠瓊をも捕縛した。
語釋 兩道(海道と山道) ○尊公(他人の父の敬稱)

二十二日遣直政・忠勝、率列侯臨大坂。輝元長盛復乞降。不答。二十四日中納言入京師。二十七日内大臣入大阪。遠近屏息。十月朔命奥平信昌徇石田三成・小西行长・僧惠瓊、斬于六條河原。併長束正家首梟于三條。磔伏見城中。應敵者十八人于栗田口。遂下令伐西南諸國。未定者以中納言爲大將。刻期發軍。十九日中納言入大阪。輝元長盛乞降益力。乃放長盛于高野。使藤堂高虎收其郡山。釋其留守渡邊了屬高虎。削輝元六國。收浮田秀家三國。浮田氏臣某來告秀家既死。而潛使秀家奔依島津氏。

訓讀 二十二日、直政・忠勝を遣はし、列侯を率ゐて、大阪に臨ましむ。輝元・長盛、復降を乞ふ。答へず。二十四日、中納言、京師に入る。二十七日、内大臣、大阪に入る。遠近、屏息す。十月朔、奥平信昌に命じ、石田三成・小西行长・僧惠瓊を徇へて、六條河原に斬り、長束正家の首を併せて、三條に梟し、伏見城中にて敵に應ぜし者十八人を栗田口に磔す。遂に令を下して、西南諸國の未だ定らざる者を伐つ。中納言を以て大將と爲

し、期を刻して軍を發す。十九日、中納言、大阪に入る。輝元・長盛、降を乞ふこと益々力む。乃ち長盛を高野に放ち、藤堂高虎をして其の郡山を收めしむ。其の留守渡邊了を釋して、高虎に屬せしむ。輝元の六國を削り、浮田秀家の三國を收む。浮田氏の臣某、來つて秀家既に死すと告ぐ。而して潛に秀家をして奔つて島津氏に依らしむ。

通釋 二十二日、直政・忠勝を遣はし、諸大名を率ゐて、大阪に臨ませた。輝元・長盛は再び降參を乞うた。返事をしなかつた。二十四日、中納言は、京都に入つた。二十七日、内大臣が大阪に入つた。遠近の者は、息を殺して畏れ入つた。十月一日、奥平信昌に命じ、石田三成・小西行長・僧惠瓊を引き廻した後で、六條河原に斬らしめ、長束正家の首と一所に、三條の獄門にかけて晒し、伏見の城中に居て、敵に應じた者十八人を、粟田口で磔にした。遂に令を下して、西南諸國の未だ定まらない者を伐つことにした。中納言を大將に任じ、日を決めて、出發させることにした。十九日、中納言は大阪に入つた。輝元・長盛等は、一向降參、たいと願ひ出た。依つて、長盛を高野山に追放し、藤堂高虎をして、その領地の郡山を收めさせた。留守居役の渡邊了を赦して、高虎に屬させた。又、輝元の領地の中、備中・備後・安藝・伯耆・出雲・石見の六國を削り、浮田秀家の領地備前・美作・出雲の三國を取り上げた。浮田氏の家來某が來て、秀家は既に死んだといつた。そして密かに秀家を遣り島津氏に依らせることにした。

語釋 六國(備中・備後・安藝・伯耆・出雲・石見) ○三國(備前・播磨)

島津義弘之歸自關原其兄義久囚之而乞降内大臣曰我初遇義弘父子甚厚何

所負而黨亂人。是固在所不許。雖然、吾不忍復勞兵。乃許其降。義久欲來謝。會疾作。伊集院族亦爲亂。以故未能來也。初豐後故主大友義統、應西軍欲復其舊國。首逼杵築。杵築告急於黑田・加藤氏。黑田孝高方以募兵萬人。發中津南伐。聞之赴援。與杵築兵合擊。破而降之。轉攻熊谷・垣見氏。邑偶得關原逃卒。縱入其城。城皆降。遂助中川氏。攻下大田氏。盡定豐後。還入豐前。攻香春・小倉。踰月皆下之。轉入筑前。

訓讀 島津義弘の關原より歸るや、其の兄義久、之を囚へて降を乞ふ。内大臣曰く「我れ初め、義弘父子を遇すること甚だ厚し。何の負く所あつてか亂人に黨する。是れ固より許されざる所に在り。然りと雖も吾れ復兵を勞するに忍びず」と。乃ち其の降を許す。義久來り謝せんと欲す。會て疾作り、伊集院の族亦亂を爲す。故を以て未だ來る能はざるなり。初め豐後の故主大友義統、西軍に應じて、其の舊國を復せんと欲し、首として杵築に逼る。杵築、急を黑田・加藤氏に告ぐ。黑田孝高、方に募兵萬人を以て、中津を發して南伐す。之を聞いて赴き援け、杵築の兵と合擊し、破つて之を降し、轉じて熊谷・垣見氏の邑を攻む。偶と關原の逃卒を得、縱つて其の城に入らしむ。城皆降る。遂に中川氏を助け、攻めて大田氏を下し、盡く豐後を定め、還つて豐前に入る。香春・小倉を攻め、月を踰えて皆之を下す。轉じて筑前に入る。

通釋 島津義弘が關原から逃げ歸ると、其の兄の義久は、之を囚へて、降參を乞うた。内大臣が曰ふのに「我、

最初から義弘、父子を随分手厚く待遇して遣つた。何を不足に思つて、謀叛人に味方したのか。是れは誠に許し難いことである。然し乍ら再び兵を勞して征伐するに忍びない」と。そこで、其の降参を聞き届けた。義久は、來つて御禮を申し上げようとした。偶々病氣に罹つた上、伊集院の一族が亂をなした。その爲に來ることが出来なかつた。初め、豊後の元の領主大友義統は、西軍に味方して、その舊領を回復したいと思ひ、先づ杵築に押し寄せた。杵築では、急を黒田・加藤の兩氏に告げた。黒田孝高は、其の頃、募集した一萬の兵を率ゐて、中津を出發し、南下して征伐しようとした。之を聞いて、赴き援け、杵築の兵と共に合撃し、破つて之を降し、更に轉じて、熊谷・垣見二氏の領邑を攻めた。折しも、關原からの落武者が來たので、許して城に入らしめた。城中では、西軍の敗を聞いて、皆降参した。遂に中川氏を助けて、太田氏を攻め下し、盡く豊後を平定して、還つて豊前に入つた。香春、小倉を攻め、月を踰えて皆之を下した。又轉じて筑前に入つた。

語釋 杵築(豊) ○中津(豊) ○其城(富來)

加藤清正援杵築不及。乃攻宇土八代。肥前大村氏始不應西軍。於是發兵助清正。清正亦使關原逃卒入諭焉。二城皆降。薩摩兵援八代。至水股而遁去。清正乃與孝高約。夾攻筑後。鍋島直茂舉兵應之。擊立花宗茂。宗茂既降。東軍孝高、清正和解之。召立花增時行成。宗茂乃出面曰。公等豫知內府必勝。非我所及也。清正置之熊本。

遂與孝高、徇下毛利秀包、筑紫廣門、邑。十一月合二肥、二筑、二豐、兵臨薩摩境上。日向伊東氏世、與薩摩仇。攻取宮崎、佐土原、引兵來會。內大臣聞之、下令告島津氏既降、弭其兵、以定九國。

訓讀 加藤清正、杵築を援くるに及ばず。乃ち宇土・八代を攻む。肥前の大村氏は始より西軍に應ぜず。是に於て、兵を發して清正を助く。清正も亦、關原の逃卒をして入つて諭さしむ。二城皆降る。薩摩の兵、八代を援け、水股に至つて遁れ去る。清正乃ち孝高と約し、夾んで筑後を攻む。鍋島直茂、兵を擧げて之に應じ、立花宗茂を撃つ。宗茂既に東軍に降る。孝高・清正之を和解す。立花増時を召して、成を行ふ。宗茂乃ち出で、面して曰く「公等、豫め内府の必勝を知る。我が及ぶ所に非るなり」と。清正、之を熊本に置き、遂に孝高と、毛利秀包・筑紫廣門の邑を徇へ下す。十一月、二肥・二筑・二豊の兵を合せて、薩摩の境上に臨む。日向の伊東氏、世薩摩と仇す。攻めて宮崎・佐土原を取り、兵を引いて來會す。內大臣、之を聞き、令を下して、島津氏既に降るを告げ、其の兵を弭めて以て九國を定めしむ。

通釋 加藤清正は、杵築を援けようとしたが、間に合はなかつた。依つて、宇土・八代を攻めた。肥前の大村氏は、最初から西軍に味方しなかつた。そこで、兵を遣つて、清正を助けた。清正も、亦た關原の落武者をして、城に入つて諭さしめた。二城は皆降つた。薩摩の兵は、八代を援けようとして、水股まで來たが、遁れ去つた。清正は、孝高と約束して、筑後を夾討にすることにした。鍋島直茂は、兵を擧げて、之に應じ、立花宗茂を撃つ

た。宗茂、既に東軍に降つた。孝高・清正は、之をなだめた。立花増時を召し寄せて、和睦させた。依つて宗茂は、出で、對面して曰ふのに「貴公等は、豫め内大臣の必勝を知つて居られた。とても、我が輩の及ぶところではない」と。清正は、之を熊本に置き、遂に孝高と共に毛利秀包・筑紫廣門の領邑を徇へ下した。十一月肥前・肥後・筑前・筑後・豊前・豊後の兵を合せて、薩摩の國境まで打つて出た。日向の伊東氏は、代々薩摩とは、仇同志の間柄であつた。そこで、之を攻めて宮崎・佐土原を取り、兵を率ゐて來り會した。内大臣は之を聞いて、令を下し、島津氏は既に降つたことを告げ、其の兵を攻め、九州を定めさせた。

語釋 宇土・八代・水股(後肥) ○宮崎・佐土原(日向)

初、毛利氏遣將徇伊豫、攻眞崎。加藤忠明爲兄嘉明留守、與其將佃一成隨方防禦。大破之。長曾我部盛親還自關原、因井伊氏乞降。許之。盛親有庶兄。與藤堂氏善。盛親恐其代己、迫使自殺。内大臣怒、遣井伊氏將鈴木重好奪其封、以定四國。

訓讀 初め毛利氏、將を遣はして伊豫を徇へ、眞崎を攻む。加藤忠明、兄嘉明の爲に留守し、其の將佃一成と方に隨つて防禦し、大に之を破る。長曾我部盛親、關原より還り、井伊氏に因つて降を乞ふ。之を許す。盛親に庶兄有り。藤堂氏と善し。盛親、其の己に代るを恐れ、追つて自殺せしむ。内大臣怒つて井伊氏の將鈴木重好を遣はし、其の封を奪ひ以て四國を定めしむ。

通釋 初め、毛利氏は、大將を遣はし、伊豫を徇へて、眞崎を攻めた。加藤忠明は、兄嘉明の爲に留守して居

た。其の將、佃一成と共に、敵の方略につれて、防禦し、大に之を破つた。長曾我部盛親は、關原から還り、井伊氏に因つて降參を乞うた。それで之を許した。盛親には、妾腹の兄があつた。藤堂氏とは親密の間柄であつた。盛親は兄が自分に代ることを恐れたので、追つて、無理に自殺させた。之を聞いて、内大臣は怒り、井伊氏の將、鈴木重好を遣はし、その封を取り上げて、四國を定めさせた。

語釋 隨方(敵の方略につれて、味方)

初、福知山城主小野木重勝與圍田邊城。既解據其邑。及大捷細川忠與以其父仇、請而討之。重勝自殺。石川頼明與圍大津。及捷而降。其父數正爲我叛臣。以故不許。當斬并重勝首梟之。細川藤孝之守田邊也、以死自矢。藤孝長詞學。受古今集於西三條氏。敵將谷衛友等其弟子也。陰通款不丸於銃。朝廷恐其學絕傳也、遣廷臣諭使行成。及聞捷、藤孝自愧遁高野。京極高次亦愧不敢來謁。内大臣使人諭高次曰「子守孤城、使數萬敵衆不及於事。功亦多矣。乃召見之。以前田玄以坐視田邊大津之難、黜之。尋徙封丹波八上。」

訓讀 初め福知山の城主小野木重勝、田邊城を圍むに與る。既に解いて、其の邑に據る。大捷に及び、細川忠

興、其の父の仇なるを以て、請うて之を討つ。重勝、自殺す。石川頼明、大津を圍むに與る。捷に及んで降る。其の父數正、我が叛臣たり。故を以て許さず。斬に當つ。重勝の首を并せて之を梟す。細川藤孝の田邊を守るや、死を以て自ら矢ふ。藤孝、詞學に長ず。古今集を西三條氏に受く。敵將谷衛友等は、其の弟子なり。陰に款を通じ、銃に丸せず。朝廷、其の學の傳を絶たんことを恐れ、廷臣を遣はし、諭して成を行はしむ。捷を聞くに及び、藤孝自ら愧ぢて高野に遁る。京極高次も亦愧ぢ、敢て來謁せず。内大臣、人をして高次を諭さしめて曰く「子孤城を守り、數萬の敵衆をして事に及ばざらしむ。功亦多し」と。乃ち召して之を見る。前田玄以は、田邊・大津の難を坐視せるを以て、之を黜け、尋いで封を丹波の八上に徙す。

通釋 初め、福知山の城主小野木重勝は、田邊城を圍む仲間に加つて居た。圍を解いた後は、其の領邑に立籠つた。關原の大捷後に、細川忠興は父の仇だといふので、請うて之を討つた。重勝は自殺した。又、石川頼明は大津を圍む同勢の中に居た。關原の大捷に及んで降参した。が、其の父數正は、我が叛臣であつた。この故に之を許さないで斬罪に處し、重勝の首と一所にこれを獄門に懸けた。細川藤孝が、田邊の城を守つた時には、全く死ぬ覺悟をして居た。藤孝は深く、歌學に達して居り、古今集の傳授を西三條家から受けた。敵將谷衛友等は、その弟子であつた。陰に内通し、鐵砲に丸をこめなかつた。朝廷では、萬一藤孝が戦死すれば、歌學の傳授が絶えること云ふ心配があるので、廷臣を遣はし、諭して和睦させた。斯くて、關原の大捷を聞くに及び、藤孝は深く自ら愧ぢて、高野山に遁れた。京極高次も、亦守城の大津を落されたことを愧ぢて、來つて拜謁しなかつた。内大臣は、人を遣つて、高次を諭させて曰ふのに「貴公は、無援、孤立の城を守り、數萬の敵衆をして、關原役の間に合はぬ様にさせた。其の手柄は多とす可きである」と。そこで召し寄せて對面された。前田玄以は田邊・大

津の難儀を救はうともせず、居ながら視て居たかどで退けられ、間もなく、領地を丹波の八上へ徙された。
語釋 長詞學(和歌の道に達) ○受古今集(古今集は勅選和歌集の最初のもの。其の傳授は容易に受けられぬが、) ○不丸銃(鐵砲に彈丸をこめぬない空鐵砲) ○絶傳(秘訣の傳授が絶え) ○不及於事(關原の大合戦の間)

青木一矩丹羽長重等、亦坐觀望失邑。九鬼守隆初招其父嘉隆。嘉隆不肯。守隆乃止陣于畔乘。及大軍西上、恐獲罪乃進戰。效首級於途。内大臣不懌。及大捷、嘉隆懼奔新宮。守隆爲乞命得允。馳使迎之。未至而嘉隆自殺。真田昌幸與少子幸村來乞命。不許。長子信幸因井伊・榊原二氏固請。内大臣使言之於中納言。中納言曰「我失關原之期、實終身之憾。而致之者昌幸也。必處之死。信幸固請曰「嚮也、臣寧負父不能負君。今也寧死殉父、不生事君。榊原康政入白。兩公嘉之、爲宥死一等。放之高野。先是關原之報至陸奥。上杉景勝大驚、急召還山形軍。佐竹義宣亦懼議降。東北亦稍定。

訓讀 青木一矩・丹羽長重等、亦觀望に坐して邑を失ふ。九鬼守隆、初め其の父嘉隆を招く。嘉隆肯せず。守隆乃ち止り、畔乘に陣す。大軍の西上するに及び、罪を獲んことを恐れて、乃ち進み戦ひ、首級を途に效す。内

大臣懼ばず。大捷に及び、嘉隆懼れて、新宮に奔る。守隆、爲に命を乞ひ、允さるゝを得たり。使を馳せて之を迎ふ。未だ至らずして、嘉隆、自殺す。眞田昌幸、少子幸村と、來つて命を乞ふ。許さず。長子信幸、井伊・榊原二氏に因つて固く請ふ。内大臣之を中納言に言はしむ。中納言曰く「我れ關原の期を失ひしは、實に終身の憾なり。而して之を致す者は昌幸なり。必ず之を死に處せん」と。信幸固く請うて曰く「嚮には臣寧ろ父に負くも、君に負く能はず。今は、寧ろ死して父に殉ずるも、生きて君に事へず」と。榊原康政入つて白す。兩公、之を嘉し、爲に死一等を宥して、之を高野に放つ。是より先、關原の報、陸奥に至る。上杉景勝、大に驚き、急に山形の軍を召し還す。佐竹義宣も亦懼れて、降を議す。東北も亦、稍定る。

通釋 青木一矩・丹羽長重等も、亦た様子を眺めて居たといふ罪で、領地を取上げられた。九鬼守隆は、初め、其の父嘉隆を招いたが、嘉隆は聽き入れなかつた。そこで、守隆は留まつて、畔乘に陣取つた。大軍が西へ上つたので、罪を獲むことを恐れ、奮ひ戦つて敵を打ち取り、其の首を途中で差し出した。内大臣の機嫌は悪かつた。依つて大捷の後、嘉隆は懼を爲して、新宮へ奔つた。守隆は爲に命乞をして赦された。急いで使を馳せて父を迎へた。使が彼方へ到着せぬ中に、嘉隆は自殺した。眞田昌幸は少子幸村と共に來り、命乞をしたが、赦されなかつた。すると其の長子信幸は、井伊・榊原の二氏に因つて、固く請うた。内大臣は、之を中納言に言はせた。中納言が言ふのに「我が關原の役に合はなかつたのは、實に一生の不覺である。斯くさせたは誰あらう、昌幸である。許しはならぬ、是非とも、死刑に行はう」と。信幸は、更に固く請うて曰ふのに「さきには、私は寧ろ父に負くとも、君に負くことが出来なかつた。今の場合は、寧ろ死して父に従ふとも、生き永らへて君に仕へることは出来ない。父が殺されるなら、私も諸共に」と。榊原康政が、内に入つて、申し上げた。内大臣・中納言の兩公は、其の心掛を賞し、死一等を減じて、高野山へ追放した。是れより先、關原の捷報が陸奥へ到着した

すると、上杉景勝は大に驚き、急に山形から軍を召し還した。佐竹義宣も、亦た懼れを抱いて、降參の評議を爲した。東北地方も亦、稍や定まつて來た。

語釋 畔乘(摩) ○新宮(伊)

十二月、内大臣與中納言及諸親信議曰「禍亂略定當裂天下賞有功乃以關東八國立爲根本之地居江戸城如故以越前尾張近江伊勢封宗族舊臣其餘盡爲外藩賜加賀能登越中于前田利長爲一百萬石賜肥後于加藤清正爲七十萬石賜備前美作于小早川秀秋安藝備後于福島正則筑前黑田長政播磨于池田輝政竝爲五十萬石賜豐前于細川忠興爲四十萬石賜紀伊于淺野左京大夫筑後于田中吉政竝爲三十萬石賜丹後若狹于京極高知因幡伯耆于中村忠一出雲隱岐于堀尾吉晴土佐于山内一豊阿波于蜂須賀至鎮讚岐于生駒一正伊豫于加藤嘉明藤堂高虎竝爲二十萬石賜飛彈于金森可重丹波福知山于有馬豐氏美濃高須于德永壽昌伊勢神戶于一柳直盛其阿濃津于富田知信其松坂于古田

重恆伊賀于筒井定次信濃上田于真田信幸因幡鳥取于池田長吉備中庭瀨于戶川達安豐後日出于木下延俊或益封或依舊賜肥前四萬石于寺澤廣高美濃二萬石于西尾光教以信濃之邑賞木曾諸士

訓讀 十二月、内大臣、中納言、及び諸々の親信と議して曰く「禍亂略定る。當に天下を裂いて有功を賞すべし」と。乃ち關東八國を以て、立て、根本の地を爲し、江戸城に居ること故の如し。越前・尾張・近江・伊勢を以て、宗族・舊臣を封す。其餘は盡く外藩と爲す。加賀・能登・越中を前田利長に賜ひ、二百萬石と爲す。肥後を加藤清正に賜ひ、七十萬石と爲す。備前・美作を小早川秀秋に、安藝・備後を福島正則に、筑前を黒田長政に、播磨を池田輝政に賜ひ、並に五十萬石と爲す。豊前を細川忠興に賜ひ、四十萬石と爲す。紀伊を淺野左京大夫に、筑後を田中吉政に賜ひ、並に三十萬石と爲す。丹後・若狹を京極高知に、因幡・伯耆を中村忠一に、出雲・隱岐を堀尾吉晴に、土佐を山内一豊に、阿波を蜂須賀至鎮に、讃岐を生駒一正に、伊豫を加藤嘉明、藤堂高虎に賜ひ、並に二十萬石と爲す。飛騨を金森可重に、丹後の福知山を有馬豊氏に、美濃の高須を徳永壽昌に、伊勢の神戸を一柳直盛に、其の阿濃津を富田知信に、其の松坂を古田重恆に、伊賀を筒井定次に、信濃の上田を眞田信幸に、因幡の鳥取を池田長吉に、備中の庭瀨を戸川達安に、豊後の日出を木下延俊に賜ひ、或は封を益し、或は舊に依る。肥前の四萬石を寺澤廣高に、美濃の二萬石を西尾光教に賜ひ、信濃の邑を以て木曾の諸士を賞す。

通釋

十二月、内大臣は、中納言及び多く親信の謀臣等と相談して曰ふのに「天下の騷亂は漸く治まった。國

國を裂いて有功の者を賞すべきである」と。そこで、關東八州を根本の土地と定め、江戸城に居ることは、從來の通であつた。越前・尾張・近江・伊勢を以て、一族や舊臣を封じて大名とした。其の外は盡く外様の諸藩とし、分ち與へた。加賀・能登・越中を前田利長に賜はつて、百萬石とした。肥後を加藤清正に賜はつて、七十萬石。備前・美作を小早川秀秋に賜はり、安藝・備後を福島正則に、筑前を黒田長政に、播磨を池田輝政に賜はつて、共に五十萬石とした。豊前を細川忠興に賜はつて四十萬石、紀伊を淺野左京大夫に、筑後を田中吉政に賜はつて、共に三十萬石。丹後・若狹を京極高次に、因幡・伯耆を中村忠一に、出雲・隱岐を堀尾吉晴に、土佐を山内一豊に、阿波を蜂須賀至鎮に、讃岐を生駒親正に、伊豫を加藤嘉明、藤堂高虎に賜はつて、共に二十萬石となした。飛騨を金森可重に、丹波の福知山を有馬豊氏に、美濃の高須を徳永壽昌に、伊勢の神戸を一柳直盛に、同じく阿濃津を富田知信に、同じく松坂を古田重恆に、伊賀を筒井定次に、信濃の上田を眞田信幸に、因幡の鳥取を池田長吉に、備中の庭瀨を戸川達安に、豊後の日出を木下延俊に賜はり、或は封邑を増加し、或は従前通にした。肥後の四萬石を寺澤廣高に、美濃の二萬石を西尾光教に賜はり、信濃の邑を木曾の諸士に賜はつて、之を賞した。

諸降附之國改立其嗣賜薩摩大隅日向于島津忠恆爲七十萬石賜長門周防于毛利秀元肥前于鍋島勝茂並爲三十萬石以攝津河内和泉六十餘萬石隸大阪賜越前于少將秀康爲六十七萬石賜尾張于下野守忠吉爲二十萬石賜近江澤山于井伊直政爲十八萬石賜伊勢桑名于本多忠勝併舊封爲十七萬石賜美濃

加納于奥平信昌其大垣于石川康通賜上野高崎于酒井家次駿府于内藤信成濱松于松平忠頼岡崎于本多康重増酒井忠利秩爲萬石餘各有差外藩以今歲發命舊臣以明歲發命乃使中納言入朝告成事令諸冒豐臣氏者皆復本姓豐臣氏嘗立皇庶子良仁爲太子而非天子意也於是欲立皇嫡子政仁諮於内大臣内大臣對曰是非臣所敢議也嫡庶之分唯帝心裁之天子即以政仁爲皇太子

訓讀 諸々の降附の國は、改めて其の嗣を立つ。薩摩・大隅・日向を島津忠恆に賜ひ、七十萬石と爲す。長門・周防を毛利秀元に、肥前を鍋島勝茂に賜ひ、並に三十萬石と爲す。攝津・河内・和泉、六十餘萬石を以て大阪に隸す。越前を少將秀康に賜ひ、六十七萬石と爲す。尾張を下野守忠吉に賜ひ、二十萬石と爲す。近江の澤山を井伊直政に賜ひ、十八萬石と爲す。伊勢の桑名を本多忠勝に賜ひ、舊封を併せて十七萬石と爲す。美濃の加納を奥平信昌に、其の大垣を石川康通に賜ひ、上野の高崎を酒井家次に、駿府を内藤信成に、濱松を松平忠頼に、岡崎を本多康重に賜ひ、酒井忠利の秩を増して萬石と爲す。餘は各々差有り。外藩は今歳を以て命を發し、舊臣は明歳を以て命を發す。乃ち中納言をして入朝して成事を告げしむ。諸々の豐臣氏を冒す者は、皆本姓に復せしむ。豐臣氏、嘗て皇庶子良仁を立て、太子と爲す。而して天子の意に非るなり。是に於て、皇嫡子政仁を立てんと欲し、内大臣に謀る。内大臣對へて曰く「是れ臣の敢て議する所に非るなり。嫡庶の分、唯帝心にて之を裁せよ」

と。天子即ち政仁を以て皇太子と爲す。

通釋 降參して附き従つた國々は、改めて、其の後嗣を立てた。薩摩・大隅・日向を島津忠恆に賜はつて、七十萬石とした。長門・周防を毛利秀元に賜はり、肥前を鍋島勝茂に賜はつて、共に三十萬石とした。攝津・河内・和泉の三國六十餘萬石を大阪に附屬させた。越前を少將秀康に賜はつて、六十七萬石とした。尾張を下野守忠吉に賜はつて二十萬石。近江の澤山を井伊直政に賜はつて十八萬石。伊勢の桑名を本多忠勝に賜はり、舊封と併せて十七萬石とした。美濃の加納は奥平信昌に賜はり、大垣は石川康通に賜はつた。上野の高崎は酒井家次に、駿府は内藤信成に、濱松は松平忠頼に、岡崎は本多康重に賜はり、酒井忠利の領地を増して一萬石とした。そして、其の外は、何れも差等があつた。外藩は、來年から命令を發して領内の政治をなし、舊臣は來年からとした。そこで、中納言を入朝させて、諸事の片付いたことを報告させた。豐臣氏を名乗つた多くの者には、何れも本姓に復せしめた。豐臣氏は、嘗て、皇庶子良仁親王を立て、太子とした。しかし、之れは天子の御心からはなかつた。そこで、御嫡子の政仁親王を立てようとして、之を内大臣に問はれた。内大臣は對へて曰ふのこ「斯かることは、臣等が彼を評議すべきことではありませぬ。しかし、嫡子・庶子の區別は、大御心で御裁斷あらせられるがよい」と。そこで天子は、政仁親王を皇太子になされた。

六年正月、内大臣在大阪西城。中納言在二城。入見秀頼于牙城。列侯諸將盡朝。西城賀正。先是修伏見城。三月成徙焉。朝廷欲酬内大臣勤勞。擬以大將軍。大將軍之

拜、自足利氏亡後、莫復舉其禮。內大臣不敢當。且恐其勞費天下也。固辭。乃以中納言爲大納言、陞從二位。下野守忠吉、敍從四位下、任侍從。舊臣多進爵者。

訓讀 六年正月、内大臣、大阪の西城に在り。中納言、二城に在り。入つて秀頼を牙城に見る。列侯・諸將、盡く西城に朝して、正を賀す。是より先、伏見城を修む。三月成つて徙る。朝廷、内大臣の勳勞に酬いんと欲し、擬するに大將軍を以てす。大將軍の拜は、足利氏の亡後より、復其の禮を擧ぐる莫し。内大臣、敢て當らず。且つ其の天下を勞費するを恐るゝや、固辭す。乃ち中納言を以て大納言と爲し、從二位に陞す。下野守忠吉を從四位下に敍し、侍從に任す。舊臣に爵を進めらるゝ者多し。

通釋 六年正月、内大臣は、大阪の西城に居つた。中納言は二の丸に居つた。入つて本丸で、秀頼に對面した。諸々の大小名や諸將は、盡く西城へ朝して、年賀の辭を述べた。これより先、伏見城を修復した。三月には落成したので、こゝに徙つた。朝廷では内大臣の功勞を思召され、大將軍に任ずる御内意であつた。大將軍の拜命は、足利氏が亡んでからは、絶えて其の禮を擧げなかつた。内大臣は、何うしても、上の仰を受けない。天下に多くの入費を懸けることを心配し、固く辭退したのである。そこで、中納言を大納言とし、陞して從二位とした。又、下野守忠吉を敍して從四位下とし、侍從に任じた。舊臣の中でも、爵位を進められたものが多かつた。

語釋 勞費(拜賀の費用を出させて、難儀をかけること)

於是、以西事既平、使大納言往平關東諸國。四月發伏見歸江戶。佐竹義宣懼討迎

之品川、謝罪請降。使往伏見、請之於内大臣。内大臣曰：「乘時舉事、英雄之常、不足深咎也。獨觀望兩端者、可鄙之甚。故吾憎義宣、過於景勝。乃不許見。使就第、竢罪。景勝屢因少將秀康、謝罪。秀康以爲景勝方失勢、乘之非武。因爲請納其降。内大臣許之。」

訓讀 是に於て西事既に平ぐを以て、大納言をして往いて關東の諸國を平げしむ。四月、伏見を發して、江戸に歸る。佐竹義宣、討たれんことを懼れて、之を品川に迎へ、罪を謝して降を請ふ。伏見に往いて之を内大臣に請はしむ。内大臣曰く、「時に乘じて事を擧ぐるは、英雄の常、深く咎むるに足らざるなり。獨り兩端を觀望する者は、鄙むべきの甚しきなり。故に吾れ義宣を憎むは景勝に過ぐ」と。乃ち見るを許さず。第に就いて罪を竢たしむ。景勝、屢、少將秀康に因つて罪を謝す。秀康以爲へらく「景勝方に勢を失ふ。之に乗ずるは武に非ず」と。因つて爲に其の降を納れんと請ふ。内大臣、之を許す。

通釋 こゝに於て、西方の事は、何れも平いだから、大納言をして、往いて關東の諸國を平らげしめた。四月、伏見を出發して、江戸へ歸つた。佐竹義宣は、征伐されることを懼れ、大納言を品川に迎へて、罪を詫び、降參を乞うた。伏見へ往つて内大臣に請はしめた。すると、内大臣が曰ふのに「機會に乗じて、大事を擧げるは、英雄の常であるから深く咎めるには及ばない。首鼠兩端を持して、様子を覗ふは、賤むの甚だしいものである。それ故、吾は、義宣を憎むこと、景勝にも過ぎて居る」と。對面を許さない。そして屋敷に居つて、仰を待たせた。景勝は度々少將秀康に因つて、罪を詫びた。秀康が考へるに「景勝は、今丁度勢を失つて居る。之に付け込む

は、武士たるもの、道でない」と。爲に其の降參を聞き届けられむことを請うた。内大臣は、之を許した。

七月、景勝來謝伏見。八月、收其會津一百萬石、賜米澤三十萬石、以會津賜蒲生秀行、食六十萬石。伊達政宗藉大捷之威、數侵上杉氏、違密命、又誘南部、反臣和賀忠親作亂。及事不成、殺忠親滅口。乃停前約、割上杉氏地十二郡六十二萬石賜之。加最上義光堀秀治之封、命二人率南部、戶澤本堂、村上溝口氏、擊平會津城邑。未服者、會津之老直江兼續初、與石田三成定密謀。本多正信請特加刑。内大臣曰、「與此謀者、豈獨一兼續。吾蕩滌天下、何必介介也。」釋不問。九月、召前田利長、任子利常、冠之遣歸、以大納言女妻之。

訓讀 七月、景勝來つて伏見に謝す。八月、其の會津一百萬石を收め、米澤三十萬石を賜ひ、會津を以て蒲生秀行に賜ひ、六十萬石を食ましむ。伊達政宗、大捷の威に藉つて、數、上杉氏を侵して、密命に違ひ、又南部の反臣和賀忠親を誘つて亂を作さしむ。事成らざるに及び、忠親を殺して口を滅す。乃ち前約を停め、上杉氏の地十二郡六十二萬石を割いて之を賜ふ。最上義光・堀秀治の封を加へ、二人に命じて、南部・戶澤本堂・村上溝口氏を率ゐて、擊つて會津城邑の未だ服せざる者を平げしむ。會津の老直江兼續、初め石田三成と密謀を定む。本

多正信、特に刑を加へんと請ふ。内大臣曰く、「此の謀に與る者、豈獨り一の兼續のみならんや。吾れ天下を蕩滌す。いざ必すしも介介たらんや」と。釋して問はず。九月、前田利長の任子利常を召し、之に冠して遣歸し、大納言の女を以て之に妻す。

通釋 七月、景勝は、伏見へ來て、御禮を申し上げた。八月、其の會津一百萬石を取り上げて、米澤の三十萬石を賜はり、會津を蒲生秀行に賜はつて、六十萬石を領せしめた。伊達政宗は、關東大捷の威光を笠に着て、度上杉氏を侵し、討つて出てはならぬといふ内密の命令に背いたばかりでなく、南部の叛臣和賀忠親を誘つて、亂を起させた。うまく往かなかつたので、忠親を殺して、口留をした。そこで百萬石に封ずるといふ前約を取り消し、上杉氏の領地、十二郡六十二萬石を割いて、之を賜はつた。又、最上義光・堀秀治の封域を増加し、二人に命じて、南部・戶澤本堂・村上溝口の諸氏を率ゐ、會津の城邑で未だ降服しないものを撃ち平げさせた。會津、上杉氏の家老の直江兼續は、初め、石田三成と陰謀を通じた。依つて、特別の刑罰を加へるやう、本多正信から請うた。内大臣が曰ふのに「此の謀に組した者は、兼續ばかりではない。吾は天下を拂ひ清めるのである。どうしてこの様なことにこせづくに及ばうか」と。赦して構はなかつた。九月、前田利長から、人質、利常を召出し、元服して國へ歸らせ、大納言は自分の娘を之に妻せた。

語釋 密命(中譯主税を以て、言ひつけた「兵を」) ○蕩滌(水で洗ひ流すこと、) ○介々(こせくす)

内大臣方銳意求治。時藤原肅益、有名。石田三成嘗欲聘之。不就。尋應淺野氏之招。至是内大臣數延之。諮問太平之策。後聘其門人林信勝爲博士、以備顧問。

訓讀 内大臣、方に銳意、治を求む。時に藤原肅、益々名有り。石田三成、嘗て之を聘せんと欲す。就かず。尋いで淺野氏の招に應ず。是に至つて、内大臣、數々之を延き、太平の策を諮問す。後に其の門人林信勝を聘し、博士と爲し、以て顧問に備ふ。

通釋 内大臣は、熱心に太平の治を求められた。此の時、藤原肅は、益々名が四方に聞えて居た。嘗て、石田三成が之を招聘しようとしたが承諾しなかつた。間もなく、淺野氏の招きに應じた。そこで、内大臣は、度々之を招き寄せ、天下太平の政策を尋ねられた。後、其の門人林信勝を聘し、博士として、相談役に備へた。

是、歲夏、奏加供御之地及延臣、食邑給豊國廟、以萬石、其他、寺祠皆給采田。初本願寺、祖姓藤原氏稱親鸞、創一向法、蓄妻食肉。八世、孫兼壽始建寺于山科、尋徙大阪。其曾孫光佐與織田信長構兵、所在門徒爭戰不已。後助豊臣秀吉西伐、誘其門徒通薩摩之道、以功建寺于京師、六條。光佐死、二子光壽、光昭、母美、秀吉納之。因立光昭、内大臣之東、伐二人皆送之江戶、爲石田氏所沮。光壽獨間行而達、歸匿京師。已而大軍西上、黑田長政請誘門徒、撓京畿。内大臣曰、「吾以武定天下、何借浮屠力哉。」乃止。大捷、後光壽迎賀、大津。内大臣曰、「光壽本當嗣也。」乃爲建寺于六條、東、令

天下門徒分屬東西

訓讀 是の歲夏、奏して供御の地、及び延臣の食邑を加へ、豊國廟に給するに萬石を以てし、其の他の寺祠に皆采田を給す。初め本願寺の祖、姓は藤原氏、親鸞と稱す。一向法を創め、妻を蓄へ肉を食ふ。八世の孫兼壽、始めて寺を山科に建て、尋いで、大阪に徙る。其の曾孫光佐、織田信長と兵を構へ、所在の門徒争ひ戦つて已まず。後に豊臣秀吉を助けて西伐し、其の門徒を誘つて、薩摩の道を通ず。功を以て寺を京師の六條に建つ。光佐、死す。二子光壽・光昭あり。光昭の母は美なり。秀吉、之を納る。因つて光昭を立つ。内大臣の東伐するや、二人皆之を江戶に送る。石田氏の沮む所と爲る。光壽獨り間行して達す。歸つて京師に匿る。已にして大軍西上す。黒田長政、門徒を誘つて京畿を撓さんと請ふ。内大臣曰く、「吾れ武を以て天下を定む。何ぞ浮屠の力を借らんや」と。乃ち止む。大捷の後、光壽、迎へて大津に賀す。内大臣曰く、「光壽は本、嗣に當るなり」と。乃ち爲に寺を六條の東に建て、天下の門徒をして分れて東西に屬せしむ。

通釋 此の年の夏、奏上して、天子供御の地、及び公卿方の領邑を増し、豊國廟には一萬石、其の他の寺社へも、夫れく朱印地を給附された。初め、本願寺の開祖は、藤原氏の出で親鸞と稱した。一向宗を創始し、肉食妻帯を許した。其の八世の孫兼壽が、初めて寺を山科に建立し、間もなく大阪へ徙つた。其の曾孫の光佐は、織田信長と戦を交へ、各地の門徒も戦争して止まなかつた。其の後、豊臣秀吉を助けて、九州征伐に出かけ、門徒を誘つて、薩摩の道を開いた。其の功に依り、寺を京都の六條に建て、遣つた。光佐が死んだ。光壽・光昭といふ二人の子があつた。光昭の母は標致が善かつた。秀吉は之を納れて妾とした。因つて、光昭を立て、後嗣

にした。内大臣が、東、上杉氏を征伐される時、二人は皆之を江戸に送らうとした。石田氏の爲に妨げられた。光壽だけは、潛かに行つて、江戸に到着した。又歸つて、京都に匿れて居た。間もなく、大軍が西上した。黒田長政は門徒を誘ひ、京畿を亂さうと請うた。内大臣が曰ふのに「我は、武を以て天下を定める。何うして坊主どもの力を借るやうなことをしようか」と。そこで止めた。大捷の後、光壽は大津に迎へて、祝賀を申し上げた。内大臣が曰ふのに「本來は、光壽が後嗣なのだ」と。そこで寺を六條の東に建て、遣り、天下の門徒を、東西の二本願寺に附屬させた。

語釋 豐國廟(豐臣秀吉) ○采田(社領、寺領)

以板倉勝重・加藤正次爲京師所司代、掌獄訟及寺祠事。尋罷正次、專任勝重。亂後物情不定、事務極繁。勝重詳雅強敏、人人無不厭心。其他大津・草津・界浦・尼崎等地、皆置吏、吏皆稱職。又城于膳所、使戶田一西守焉。遂命關西諸侯城于京師二條、以爲駐駕之地。以大番士人更戍之。十一月内大臣乃歸江戸。尋使大納言居牙城、而自居西城。天下牧長請朝于江戸。辭不許。先是以本多正信・内藤清成爲關東奉行、以綜庶務。於是命青山忠成爲副。賜與平家昌以宇都宮、食十萬石。

訓讀 板倉勝重・加藤正次を以て、京師の所司代と爲し、獄訟及び寺祠の事を掌らしむ。尋いで正次を罷めて

専ら勝重に任ず。亂後、物情定らず。事務極めて繁し。勝重、詳雅、強敏、人人、心に厭かざる無し。其の他、大津・草津・界浦・尼崎等の地、皆吏を置く。吏、皆職に稱ふ。又膳所に城き、戸田一西をして守らしむ。遂に關西の諸侯に命じて、京師の二條に城き、以て駕を駐むるの地と爲す。大番士人を以て、更之を戍らしむ。十一月、内大臣乃ち江戸に歸る。尋いで大納言をして牙城に居らしめ、自ら西城に居る。天下の牧長、江戸に朝せんと請ふ。辭して許さず。是より先、本多正信・内藤清成を以て關東奉行と爲し、以て庶務を綜べしむ。是に於て、青山忠成に命じて、副と爲す。與平家昌に賜ふに宇都宮を以てし、十萬石を食ましむ。

通釋 板倉勝重・加藤正次の二人を京師の所司代として、裁判沙汰及び寺社の事を掌らせた。程なく、正次を罷めて勝重を専任にした。亂後間も無いことゝて、人情はまだ落着かず、事務は極めて繁多であつた。しかし、勝重は萬事に行き届き、根氣が強いのみならず、善く物事に氣が付いたので、満足しない人はなかつた。其の外、大津・草津・界浦・尼崎等の各地には、皆役人を置いた。其の役人は、何れも職に叶ひ、成績が擧がった。又膳所に城を築き、戸田一西をして、之を守らせた。遂に關西の諸大名に命じて、京都の二條に城を築かせ、上京する時に車駕を駐める所とした。大番の侍に更代で、之を守らせた。十一月、内大臣は、江戸へ歸つた。程なく大納言を、本丸に徙らせ、自分は西丸に居た。天下の大小名は、江戸へ參觀したいと請うたが、辭退して許さなかつた。これより先、本多正信・内藤清成を關東奉行として、庶務を司らせ、青山忠成を脇添役に命じた。又、與平家昌に宇都宮を賜うて、十萬石を領せしめた。

七年正月、内大臣進從一位、大納言進正二位。前田利長請朝江戸、以爲天下之率。

自山道東下。内大臣避之京師。留大納言當之。利長至。大納言親送之于板橋。待遇甚渥。利長喜出望外。乃就第獻名刀馬鷹金百枚。旦日入謁。大納言出坐前殿。諸將群臣左右臚列。擯者出延利長。坐之下座。尋行饗禮。賜名刀一口。金百枚。銀千枚。時服百領。遣之。利長遂赴伏見。謁内大臣而去。三月内大臣適大阪。賀正。尋還伏見。後以為常。四月賜島津氏印信。島津義久既平國內反者。欲與疾入謝。反者復起。不果。

訓讀 七年正月、内大臣は從一位に進み、大納言は正二位に進む。前田利長請ふ「江戸に朝し、以て天下の率を爲さん」と。山道より東下す。内大臣、之を京師に避け、大納言を留めて之に當らしむ。利長至る。大納言親ら之を板橋に送へ、待遇甚だ渥し。利長、喜び、望外に出づ。乃ち第に就いて、名刀・馬・鷹・金百枚を獻す。且日、入謁す。大納言出で、前殿に坐し、諸將・群臣、左右に臚列す。擯者出で、利長を延いて之を下座に坐せしめ、尋いで饗禮を行ひ、名刀一口・金百枚・銀千枚・時服百領を賜うて之を遣はす。利長遂に伏見に赴き、内大臣に謁して去る。三月、内大臣、大阪に適き、正を賀し、尋いで伏見に還る。後、以て常と爲す。四月、島津氏に印信を賜ふ。島津義久、既に國內の反者を平げ、疾を興して入謝せんと欲し、反者復起つて果さず。

通釋 七年正月、内大臣は從一位に進み、大納言は正二位に進んだ。前田利長は請うて江戸へ參觀し、天下に率先しようと申し出た。そして中山道から東下した。内大臣は、京都へ往つて避け、大納言を留めて之に當らしめた。斯くて、利長が到着した。大納言は、自ら板橋まで出迎へて、手厚い待遇を興へた。利長は思ひ設けぬ喜びで面目を施した。そこで屋敷に入つて、名刀・馬・鷹・金百枚を獻上した。翌日登城して拜謁した。大納言は出で、大書院に坐し、諸將や群臣は左右に列坐し、接待役が出て利長を案内して下座に坐らせ、それから、馳走をなし、名刀一口・黄金百枚・白銀千枚・時服百領を賜はつて、之を歸した。其の後、利長は伏見へ赴き、内大臣にも拜謁した。三月、内大臣は、大阪へ往つて年賀を申し上げ、間もなく伏見へ還つた。其の後には、之を常例とした。四月、島津氏に御朱印を賜はつた。島津義久は、國內の謀叛人を平定したので、病氣を押して東へ上り、親しく御禮を申し上げようとした。又、謀叛人が起つたので、果さなかつた。

語釋 天下之率(率は率先。利長が江戸へ朝して、天下) ○前殿(大書院を) ○臚列(臚はつらな)

五月朔、内大臣入朝。二日朝皇太后。因留在京師。六月奏請剪南都。黃熟香。天使來莅。本多正純掌其事。八月生母水野氏卒。爲建傳通院。十月内大臣歸江戶。十一月復赴伏見。十二月島津忠恆盡平國內亂。來謁謝其稽緩之罪。先是、前田利長告浮田秀家未死。乃召浮田氏臣。嘗告其死者。詰之。告者請死。内大臣嘉其忠祿之。於是忠恆白曰「秀家實在臣所。彼爲關原渠率。天下所不容。雖然窮來投臣。臣不忍殺。願幕下枉包容之。乃宥死一等流之。八丈島。以明年赴配所。」

訓讀 五月朔、内大臣、入朝す。二日、皇太后に朝す。因つて留つて京師に在り。六月、奏請して南都の黃熟香を剪る。天使來り莅む。本多正純、其の事を掌る。八月、生母水野氏、卒す。爲に傳通院を建つ。十月、内大臣、江戸に歸る。十一月、復伏見に赴く。十二月、島津忠恆、盡く國內の亂を平けて、來り謁し、其の稽緩の罪を謝す。是より先、前田利長、浮田秀家未だ死せずと告ぐ。乃ち浮田氏の臣の嘗て其の死を告げし者を召して、之を詰る。告ぐる者、死を請ふ。内大臣、其の忠を嘉して、之を祿す。是に於て、忠恆白して曰く「秀家は實に臣の所に在り。彼れ關原の渠率たり。天下の容れざる所。然りと雖も、窮して來り、臣に投ず。臣殺すに忍びず。願はくは幕下、枉げて之を包容せよ」と。乃ち死一等を宥して、之を八丈島に流す。明年を以て配所に赴かしむ。

通釋 五月一日、内大臣は入朝した。二日には皇太后に拜謁した。それで留まつて、京都に居つた。六月、奏し請うて、奈良東大寺の黃熟香を剪つて頂戴した。勅使が來て立ち合つた。本多正純が其の事を掌つた。八月、内大臣の生母水野氏が死んだ。よつて、傳通院といふ寺を建立して供養を營んだ。十月、内大臣は、江戸へ歸つた。十一月、再び伏見へ赴いた。十二月、島津忠恆は、國內の亂が盡く平定したので、來つて拜謁し、遅れた罪を詫びた。これより先、前田利長は、浮田秀家が未だ死なずに居るといふことを告訴した。そこで、浮田氏の家來で、さきに秀家が死んだと告げた者を召し出して詰問した。其の者は、上を欺いたからといつて、死刑に處せられるやう請うた。内大臣は、其の忠義を感心し、却つて之に扶持を與へた。忠恆は申し上げて曰ふには「實は秀家は私の國、薩摩に居ります。彼は關原の張本人です。天下の許さないところでありませぬ。弱り切つて私を頼り逃げ込んで來たのです。私は之を殺すに忍びませぬ。何卒閣下枉げて御赦し下さい」と。そこで、死一等を

滅じ、伊豆の八丈島に流した。其の翌年、配所へ赴かせた。

語釋 南都黃熟香(黃熟香は東大寺に在る名香で、聖武天皇) ○稽緩(長ひく) ○渠率(張本)

是歲春、井伊直政卒。直政以關原功、首賜石田氏、居于澤山。尋奉命城彦根。未成而沒。其子直勝襲封。是歲夏、内大臣欲廢佐竹義宣爲庶人。以其父義重乞哀。乃收其常陸八十萬石、賜出羽。秋、田二十萬石、收其弟貞隆之岩城、賜出羽、龜田。以秋田氏不從關原之役、收其國、賜常陸、宍戶。命松平康重檢常陸地。佐竹氏將車猛虎作亂、襲水戶。康重豫知之、邀擊擒猛虎。是歲冬、小早川秀秋卒。無嗣。收其備前、以其老稻葉平岡氏嘗有功于關原、召而用之。

訓讀 是の歲春、井伊直政、卒す。直政、關原の功を以て、首として石田氏の故邑を賜ひ、澤山に居る。尋いで命を奉じて彦根に城く。未だ成らずして没す。其の子直勝、封を襲ぐ。是の歲夏、内大臣、佐竹義宣を廢して庶人と爲さんと欲す。其の父義重哀を乞ふを以て、乃ち其の常陸八十萬石を收めて、出羽の秋田二十萬石を賜ひ、其の弟貞隆の岩城を收めて、出羽の龜田を賜ふ。秋田氏は關原の役に從はざるを以て、其の國を收めて、常陸の宍戶を賜ふ。松平康重に命じて、常陸の地を檢せしむ。佐竹氏の將車猛虎、亂を作して、水戸を襲ふ。康重豫め之を知り、邀へ撃つて猛虎を擒にす。是の歲冬、小早川秀秋、卒す。嗣無し。其の備前を收め、其の老稻葉・

平岡氏、嘗て關原に功有るを以て、召して之を用ふ。

通釋 是の年の春、井伊直政が死んだ。直政は、關原の役で、第一の功勞者だから、石田氏の舊領地を賜はつて、澤山に居つた。後、間もなく、命を奉じて、彦根城を築いた。然し落成に至らない中に死んだ。其の子直勝が、封を繼いだ。是の年の夏、内大臣は佐竹義宣を改易して庶人にしようとした。其の父義重が、憐れみを乞うたので、常陸領地八十萬石を召し上げ、出羽の、秋田二十萬石を賜はり、又、其の弟、貞隆の岩城を召し上げて出羽の龜田を賜はつた。秋田氏は關原の役に從軍しなかつたから、其の領地を召し上げて、常陸の宍戸を賜はつた。松平康重に命じて、常陸の檢地をさせた。佐竹氏の將軍猛虎が亂を起して、水戸を襲はうとした。康重は豫め知つたので、迎へ撃つて、猛虎を擒にした。是の年の冬、小早川秀秋が死んだ。其の後には相續人がなかつた。依つて、其の領邑備前を取り上げ、其の家老の稻葉・平岡の兩人は、關原の役に功勞があつたので、召し出して、之を任用した。

内大臣欲賜榊原康政以水戸辭曰臣有罪於關原之役免罰受賞臣所不安臣邑密邇江戶緩急得以致身不可徙也遂馳還館林本多正信使人止之不聽於是封五男信吉于水戸二十萬石以其舊封佐倉封七男忠輝以岩城賜鳥居忠政食二十萬石以酬其父元忠死義自關原之役至于此賞罰略畢天下大定

訓讀 内大臣、榊原康政に賜ふに水戸を以てせんと欲す。辭して曰く「臣、關原の役に罪有り。罰を免されて

賞を受く。臣の安んぜざる所なり。臣の邑は江戶に密邇す。緩急以て身を致すを得ん。徙る可からず」と。遂に馳せて館林に還る。本多正信、人をして之を止めしむ。聽かず。是に於て、五男信吉を水戸二十萬石に封じ、其の舊封佐倉を以て七男忠輝を封じ、岩城を以て鳥居忠政に賜ひ、二十萬石を食ましむ。以て其の父元忠の義に死するに酬ゆ。關原の役より此に至り、賞罰略畢り、天下、大に定る。

通釋 内大臣は、榊原康政に水戸を賜はらうとした。康政は、辭退して曰ふには「私は、關原の役に間に合はなかつた罪があります。罪を赦された上に、賞を賜はる。これは私の心に濟まぬことであります。私の領地は、江戶に近うございます。何か大事が起つた折には、一番駈して働くことが出来ます。徙る譯には参りませぬ」と。遂に馳せて其の邑館林に還つた。本多正信は、人を遣つて止めさせた。聽き入れなかつた。そこで、内大臣は五男の信吉を水戸の二十萬石に封じ、其の舊領地佐倉へは、七男忠輝を封じ、岩城を鳥居忠政に賜はつて、二十萬石を領せしめた。其の父元忠が伏見城を守つて、義の爲に死んだのに酬いた。關原の役より今日まで、賞罰は略ぼ片付き、天下は大に定まつた。

語釋 元忠死義(元忠伏見城を守り、討死した。)

八年、二月、天皇詔以源家康爲征夷大將軍、進右大臣、兼淳和拜學兩院別當、補源氏長者、賜隨身兵仗。十二日、大納言藤原兼勝參議、藤原光豐以傳奏司奉詔書、就伏見拜焉。少將秀康進參議、敍從三位。其餘戚屬將吏敍任有差。二十二日、入朝拜

命。井伊直勝本多忠勝等十餘將騎從與傍參議德川秀康參議細川忠興參議京極高次少將池田輝政少將福島正則爲後乘獻白金萬兩。皇后皇太子及宗室百官皆有贈遺。天皇賜之酒曰天下亂久矣。汝能略定之。朕勤汝功。使舉乃祖之職。宜統我師以鎮護王室。大將軍稽首曰家康雖不才敢不服膺王命。禮畢而出。文武庶僚悉詣二條城賀之。

訓讀 八年二月、天皇詔して、源家康を以て征夷大將軍と爲し、右大臣に進め、淳和辨學兩院別當を兼ね、源氏長者に補し、隨身兵仗を賜ふ。十二日、大納言藤原兼勝・參議藤原光豊、傳奏司を以て詔書を奉じ、伏見に就いて拜す。少將秀康、參議に進み、從三位に敘せらる。其餘の戚屬・將吏、敘任、差有り。二十二日、入朝して命を拜す。井伊直勝・本多忠勝等の十餘將、騎して輿傍に從ひ、參議德川秀康・參議細川忠興・參議京極高次・少將池田輝政・少將福島正則、後乘と爲つて、白金萬兩を獻す。皇后・皇太子、及び宗室・百官、皆贈遺有り。天皇、之に酒を賜ふ。曰く「天下亂る、こと久し。汝能く之を略定す。朕、汝の功を勤り、乃祖の職に擧げしむ。宜しく我が師を統べ、以て王室を鎮護すべし」と。大將軍、稽首して曰く「家康不才と雖も、敢て王命を服膺せざらんや」と。禮畢つて出づ。文武庶僚、悉く二條城に詣つて、之を賀す。

め、源氏長者に補し、隨身兵仗を賜はつた。十二日、大納言藤原兼勝・參議藤原光豊は、傳奏司として、詔書を持參して伏見に来て、拜命させた。この時、少將秀康は、參議に進み、從三位に敘した。其の外、一族將吏の、叙任されたものが多く、夫れ々差等があつた。二十二日には入朝して、御受をした。井伊直勝・本多忠勝等の十餘將は、騎馬で乘輿の傍に付き添ひ、參議德川秀康・參議細川忠興・參議京極高次・少將池田輝政・少將福島正則は、後備となつて、之に従ひ、白金一萬兩を獻じた。皇后・皇太子及び皇族百官へも、皆夫れ々贈物をした。天皇は、家康に御酒を下された。そして仰せられるのに「天下の亂れて居たことは久しかった。卿は能く之を平定された。朕は、卿の勳功を慰勞して、卿が祖先の職に登用する。我が軍兵を統轄して、王室を鎮められよ」と。大將軍家康は、頓首して申し上げるには「家康は、不才のものはありますが、大御言を胸に疊み込み、力を王事に盡さずに居りませうか」と。斯くて儀式も濟み退出した。文武百官は、悉く二條城に来て、御祝の辭を申し述べた。

語釋 源家康(内大臣と書かないのは天皇に對し、君臣の分を) 淳和辨學兩院別當(足利記に) ○源氏長者(源氏の一族を) ○乃祖之職(先祖の受け繼ぐ)

大將軍初捷於關原、即使永井直勝就細川藤孝諮室町禮式。於是又與藤孝議禮。是歲春、封七男忠輝于信濃、川中、封八男義直于甲斐。義直幼未之國、使平岩親吉攝其國事。徙川中城主森忠政于美作、加其封。三月西道、牧長、盡朝江戶。

訓讀 大將軍の初め關原に捷つや、即ち永井直勝をして、細川藤孝に就いて室町の禮式を諮はしむ。是に於て又藤孝と禮を議す。是の歳春、七男忠輝を信濃の川中に封じ、八男義直を甲斐に封ず。義直幼にして、未だ國に之かず。平岩親吉をして其の國事を攝せしむ。川中の城主森忠政を美作に徙して、其の封を加ふ。三月、西道の牧長、盡く江戸に朝す。

通釋 大將軍は、初め關原に捷つた時、永井直勝に命じ、細川藤孝に就いて、室町・足利時代の禮儀作法を問はせた。又藤孝と共に、儀式の制定を相談させた。この年の春、七男忠輝を信濃の川中に封じ、八男義直を甲斐に封じた。義直は未だ幼年であるから、封ぜられた國へは往かなかつた。それで平岩親吉を遣つて、其の國の政治を取り捌かせた。又、川中の城主森忠政を美作に移し、其の封を加増した。三月になると、西國の諸大名は盡く江戸へ參觀した。

四月、大將軍還伏見。時豊臣秀頼爲内大臣。年已十一。大將軍欲以孫女妻之。六月、大納言使夫人淺井氏攜女赴京師。七月、使大久保忠鄰送女子于大阪。黑田長政以弓銃手三百衛之。大將軍聞之弗懌。豊臣氏素尙奢華。於是欲以白綾覆城內道途。片桐且元曰「徳川公不喜此等事。趣撤之。婚既成。秀頼不妻視之。淀君不婦視之。使福島正則密徵西諸侯誓書。十月、大將軍辭右大臣。尋歸江戸。十一月、大納言兼右

近衛、大將、補右馬寮御監。先是水戸城主信吉卒。無嗣。封九男頼宣於水戸。是歲召井伊直政、遺腹子直孝于江戸。

訓讀 四月、大將軍、伏見に還る。時に、豊臣秀頼、内大臣と爲る。年、已に十一。大將軍、孫女を以て之に妻さんと欲す。六月、大納言、夫人淺井氏をして、女を携へて京師に赴かしむ。七月、大久保忠鄰をして女を大阪に送らしむ。黒田長政、弓銃手三百を以て之を衛る。大將軍、之を聞いて懌はず。豊臣氏素より奢華を尙ぶ。是に於て、白綾を以て城内の道途を覆はんと欲す。片桐且元曰く「徳川公、此等の事を善はず」と。趣に之を撤す。婚既に成る。秀頼、之を妻視せず。淀君、之を婦視せず。福島正則をして、密に西の諸侯の誓書を徵せしむ。十月、大將軍、右大臣を辭し、尋いで江戸に歸る。十一月、大納言、右近衛大將を兼ね、右馬寮御監に補せらる。是より先、水戸の城主信吉、卒す。嗣無し。九男頼宣を水戸に封ず。是の歳、井伊直政の遺腹の子直孝を江戸に召す。

通釋 四月、大將軍は伏見へ還つた。時に豊臣秀頼は内大臣となつた。年は既に十一であつた。大將軍は孫女を以て之に妻さうと思つた。六月、大納言は、夫人の淺井氏に娘を連れさせて、京都へ往かせた。七月、大久保忠鄰に命じて、娘を大阪へ送り込ませた。黒田長政は、弓矢鐵砲組三百人を以て、之を護衛した。大將軍は、之を聞いて餘りの仰々しさに、機嫌が悪かつた。豊臣氏は、元來奢つて居り、派手好きであつた。そこで、白綾で城内の途を覆はうとした。片桐且元が曰ふのに「徳川公は、斯かる事を喜ばれぬ、見合せたがよからう」と。早速、此のことは取止めに爲つた。かくて婚姻の儀式が、滞りなく濟んだが、秀頼は妻のあしらひをせず。淀君

は嫁のあしらひをしない。加之、福島正則をして、陰密の間に、西國諸大名の誓書を召し出させた。十月、大將軍は、右大臣を辭し、間もなく江戸へ歸つた。十一月、大納言は、右近衛大將を兼ね右馬寮御監に補せられた。これより先、水戸城主信吉は、死んだ。後に相續人がなかつた。依つて、大將軍は九男の頼宣を水戸に封じた。この年、井伊直政の忘れ形見の直孝を江戸に召し寄せた。

語釋 孫女(秀忠の女) ○不妻視(不婦視) 君は嫁あつかひせぬ。蔑視すること。母の淀

九年二月令東北三道定道程置塚樹以三十六町爲一里用織田氏故法既而西南四道皆倣之三月大將軍入京師六月入朝七月大納言夫人淺井氏生男家光于江戸大將軍授其幼字呼竹千代是歲藤堂高虎倡議使諸侯置邸及質于江戸相良氏首納其母衆繼之是歲黑田孝高卒關原之事孝高之計居多其定九州不妄戮一人既而告老謝絕世事大納言比以漢張良及卒殊悼惜之

訓讀 九年二月、東北の三道に令して、道程を定め、塚樹を置き、三十六町を以て一里と爲す。織田氏の故法を用ふ。既にして西南の四道、皆之に倣ふ。三月、大將軍、京師に入り、六月、入朝す。七月、大納言夫人淺井氏、男家光を江戸に生む。大將軍、其の幼字を授けて竹千代と呼ぶ。是の歲、藤堂高虎、議を倡へ、諸侯をして邸及び質を江戸に置かしむ。相良氏、首として其の母を納る。衆、之に繼ぐ。是の歲、黑田孝高、卒す。關原の

事、孝高の計、多きに在る。其の九州を定むるや、妄に一人を戮せず。既にして老を告げ、世事を謝絶す。大納言、比するに漢の張良を以てす。卒するに及び、殊に之を悼惜す。

通釋 九年二月、東北の東海・東山・北陸の三道に令して、道程を定め、一里塚を置き、三十六町を一里とした。織田氏の古い法式を用ひたのである。既にして、西南の四道も、皆之に倣つた。三月、大將軍、京都に入り、六月、入朝した。七月、大納言の夫人淺井氏は、江戸で家光を産んだ。大將軍は、自分の幼名を授けて、竹千代と呼んだ。この年、藤堂高虎が發議して、諸大名の邸宅及び人質を江戸に置かせることにした。相良氏は、第一に其の母を納れて人質とした。その他の者も續いて其の通にした。この年黒田孝高が死んだ。關原の役には、孝高の計略を用ひたものが多かつた。其の九州を平定した時も、一人の兵さへも殺さずに濟んだ。既にして、老いたといふことを名目にして隱居し、世の中の事に全く關係しなかつた。大納言は、之を漢の張良に比して尊敬された。卒するに及んで、大將軍の悼み惜まれたことは、並一通ではなかつた。

語釋 三道(東山・東海・北陸) ○塚樹(土を封じて塚とし、樹を植ふる里を記し) ○張良(韓の人、字は子房、幼少の折下邳の圯橋で、老人から太公運らして、強楚の項誦を倒し、漢の基を開くに力があつた。後留侯に封ぜられた。)

自關原之捷、德川氏威溢海外。紅毛・安南諸國皆來貢。而松前慶廣奉教旨、約束蝦夷。先是、大將軍謂對馬守宗義智曰、豐臣氏伐朝鮮、非我所知。我與彼皆無怨仇。彼苟欲入貢、我當許之。然非自我求和、子體此意、往試計之。義智之國遣使諷之、朝鮮

朝鮮苦明人來成也。欲速成和。然喜懼相半。是歲使孫文或等來對馬。請入見。且求還其俘囚。義智馳使報之。大將軍答曰。明春吾父子將入朝。卿率詣京師。以俟。義智如其教。板倉勝重受旨。館之大德寺。十年正月。大將軍入京師。二月。見韓人于伏見。令諸道檢韓俘返予。謂義智曰。吾將老矣。貢使來致之。江戸。又曰。吾欲舉鎌倉禮。使右大將拜賀。期在近矣。宜留韓人觀其儀衛。乃賜義智邑于肥前。

訓讀 關原の捷より、徳川氏の威、海外に溢る。紅毛・安南の諸國、皆來貢す。而して松前慶廣、教旨を奉じて、蝦夷を約束す。是より先、大將軍、對馬守宗義智に謂つて曰く「豊臣氏の朝鮮を伐つは、我が知る所に非ず。我と彼と皆怨仇無し。彼れ苟も入貢を欲せば、我れ當に之を許すべし。然れども我より和を求むるに非ず。子此の意を體して、往いて試に之を計れ」と。義智、國に之を許すべし。使を遣はして之を朝鮮に諷す。朝鮮、明人來り成るに苦しむ、速に和を成さんと欲す。然れども喜懼相半す。是の歲、孫文或等をして、對馬に來つて入見を請はしめ、且つ其の俘囚を還さんことを求む。義智、使を馳せて之を報す。大將軍答へて曰く「明春、我が父子、將に入朝せんとす、卿、率ゐて京師に詣り、以て俟て」と。義智、其の教の如くす。板倉勝重、旨を受けて、之を大德寺に館す。十年正月、大將軍、京師に入る。二月、韓人を伏見に見る。諸道をして韓俘を檢して返予せしむ。義智に謂つて曰く「吾れ將に老せんとす。貢使來らば、之を江戸に致せ」と。又曰く「吾れ鎌倉の禮を舉げて、

右大將をして拜賀せしめんと欲す。期、近きに在り。宜しく韓人を留めて其の儀衛を觀しむべし」と。乃ち義智に邑を肥前に賜ふ。

通釋 關原の大勝利以來、徳川氏の威望は、國內のみならず、遠い外國へも及び溢れた。和蘭・安南の諸國は何れも來つて貢を納れた。そして、松前慶廣は、仰を受けて、蝦夷が島を取締つた。これより先、大將軍は、對馬守宗義智に向つて曰ふには「豊臣氏の朝鮮征伐は、乃公の知つたことではない。我は、朝鮮に對して、怨も仇もない。彼れ朝鮮が入貢したいとなれば、俺は之を許してやらう。しかし、此方から和を求めめるのではない。貴様よく、この意を含んで出かけ、試に取計つて見よ」と。義智は歸國して、使を遣はし、それとなく、朝鮮國王に言はせた。朝鮮では、明國の兵が來て守備して居るのを厄介に思つた。早く和睦を結ばうとした。喜と懼とが相半するので、決行することゝ出来なかつた。この年、孫文或等を遣はし、對馬來つて謁見したいと請はせ、且つ俘虜を返して貰ひたいと願つた。義智は、使を馳せて、之を報告した。大將軍は答へて曰ふのに「來年、春、吾々親子が入朝するから、貴公は、其の使者を引き連れ、京都へ來て待つがよい」と。義智は、仰の通にした。板倉勝重は、内命を受けて、大德寺を旅館とし、韓使を宿泊させた。十年正月、大將軍が京都に入つた。二月になると朝鮮の使者を伏見へ召し寄せて面會した。そして諸道に命じて、朝鮮の捕虜を取檢べさせ、返し與へた。大將軍は、義智に向つて曰ふには「自分は隱居しようと思ふ。今後、貢を上る使は、江戸へ差し向けてよ」と。又曰ふのに「俺は、鎌倉で禮を擧げ、右大將をして拜賀させようと思ふ。期日も近いことだ。朝鮮人を留め置いてその儀式の伴連を見させるが良い」と。斯くて、義智の功を多とし、別に領邑を肥前に賜はつた。

語釋 紅毛(毛髮のあかい人で、外國人を指す) ○蝦夷(北海道を) ○使(柳川調) ○鎌倉禮(類朝の行つ) ○右大將(忠)

三月、大納言率^ニ上杉・佐竹・伊達・最上氏^ヲ西上^ス。特命^ニ鳥居忠政^ヲ爲^ス後殿^ト。仗載^{スル}載^ス途者^ニ十有七日、先入^リ伏見^ニ、遂^ニ入朝^シ拜^シ大將命^ヲ。四月、大將軍奏請^シ辭職^ト。優詔^シ許^シ之^ヲ、且^ツ欲^ス遷^シ爲^ス左大臣^ト。固辭^シ而還^ル。十六日、詔^シ以^テ源秀忠^ヲ爲^ス征夷大將軍^ト、遷^シ内大臣^ニ。陞^シ正二位^ニ、仍帶^シ舊職^ト。弟忠吉進^シ三位中將^ニ、弟忠輝任^シ四位少將^ニ。十日、入朝^シ拜命^ヲ。東諸侯及前田・毛利・島津氏盡^ク從^フ。自是世號^シ前大將軍^ト。曰^ク大御所^ト。五月、前將軍諷^シ豐臣秀賴^ヲ使^シ入朝^シ。淀君性猜忌、固執^シ不遣^ラ。少將忠輝奉命^シ往^キ告^グ襲職^ヲ焉^ト。六月、大將軍歸^ル江戶^ニ。七月、課^シ諸侯^ニ十餘名^ト、重修^シ伏見城^ト。十月、前將軍歸^ル江戶^ニ。十二月、養^フ榊原康政女^ヲ妻^ス池田利隆^ニ。又謂^フ異父弟松平定勝^ニ曰^ク、島津・淺野皆冀^シ與^リ我結婚^ス。汝二男皆已可有^シ室矣^ト。宜使^シ長男娶^ス島津、次男娶^ス淺野^ト。定勝奉命^シ。

訓讀 三月、大納言、上杉・佐竹・伊達・最上氏を率ゐて西上す。特に鳥居忠政に命じて後殿と爲す。仗載、途に載すること十有七日、先伏見に入り、遂に入朝して、大將の命を拜す。四月、大將軍、奏して職を辭せんと請ふ。優詔して、之を許し、且つ遷して左大臣と爲さんと欲す。固辭して還る。十六日、詔して、源秀忠を以て征夷大將軍と爲し、内大臣に遷し、正二位に陞す。仍舊職を帶ぶ。弟忠吉、三位中將に進み、弟忠輝、四

位少將に任ぜらる。十日、入朝して命を拜す。東の諸侯及び前田・毛利・島津氏、盡く從ふ。是より世のひと、前大將軍を號して、大御所と曰ふ。五月、前將軍、豐臣秀賴に諷して入朝せしむ。淀君、性猜忌、固執して遣らす。少將忠輝、命を奉じて往き、職を襲ぐを告ぐ。六月、大將軍、江戶に歸る。七月、諸侯十餘名に課して、重ねて伏見城を修めしむ。十月、前將軍、江戶に歸る。十二月、榊原康政の女を養うて、池田利隆に妻はす。又異父弟松平定勝に謂つて曰く、「島津・淺野、皆我と婚を結ぶを冀ふ。汝が二男皆已に室有る可し。宜しく長男をして島津に娶り、次男をして淺野に娶らしむべし」と。定勝、命を奉す。

通釋 三月、大納言は、上杉・佐竹・伊達・最上の諸氏を率ゐて西上した。特に鳥居忠政に命じて、後備とならせた。兵器が道中一面に滿つること、十七日も及び、先づ、伏見に入り、それから、入朝して、右大將に任命された御受をした。四月、大將軍は、奏聞して職を辭したいと請うた。厚い御思召で聞き届けられた。その上、遷して、左大臣にしようとなせられたが固く辭退して還つた。十六日、詔があつて、源秀忠を征夷大將軍となし、内大臣に遷し正三位に陞された。又、右大將の舊職は、其の儘であつた。弟の忠吉は三位中將に進み、又の弟忠輝は四位少將に進んだ。十日、入朝して、御受をした。關東の諸大名及び前田・毛利、島津等の諸侯は、盡く從つて入朝した。これより、世間では、前大將軍家康を稱して大御所といつた。五月、前將軍は、豐臣秀賴に諷して、入朝させようとした。性來淀君は邪推の深い性質で、頑固に構へて、遣らなかつた。そこで、少將忠輝は、仰を奉じて、大阪へ往き、秀忠が征夷大將軍の職を襲いだ旨を告げた。六月、大將軍は、江戶へ歸つた。七月、十餘人の諸大名に割りあて、重ねて伏見城を修復させた。十月、前將軍は、江戶へ還つた。十二月、榊原康政の娘を養女にして、池田利隆に妻はせた。又、異父弟松平定勝に向つて「島津・淺野等は、皆我

と縁組したいといつて居る。それに、貴様の倅二人も最早、家内があつて良い頃だ。長男は島津氏から娶り、次男は浅野氏から娶つたが善からう」といつた。定勝は仰に從つた。

訓讀 大御所(天子の禁裏を御所といふ。鎌倉の頃から將軍の處を備して。御所といつた。家康は將軍の父だから大御所といつた。)

是歲、令金工光次更造方金。初上杉氏有佐渡、毛利氏有石見、皆出白金。然不能多鑄。豐臣氏收佐渡、亦無大利。及前將軍收二國、使甲斐、人大久保長安掌之。居二歲、得數萬斤。長安又採於伊豆。其利亦等。乃因豐臣氏故製造金幣。次年又鑄新錢。民皆便之。

訓讀 是の歲、金工光次をして、更に方金を造らしむ。初め上杉氏、佐渡を有し、毛利氏、石見を有して、皆白金を出す。然れども多く鑄造する能はず。豐臣氏、佐渡を收む。亦大利無し。前將軍の二國を收むるに及んで、甲斐の人大久保長安をして之を掌らしむ。居ること二歲、數萬斤を得。長安又伊豆に採る。其の利亦等し。乃ち豐臣氏の故制に因つて、金幣を造る。次年、又新錢を鑄る。民皆之を便とす。

通釋 この年、鑄金工光次に命じ、從來の貨幣の外、更に一分金を造らしめた。はじめ、上杉氏は佐渡に領有し、毛利氏は石見を所有し、何れも、銀を産出した。しかし、泥山の貨幣を鑄造するほどはなかつた。よつて、豐臣氏は佐渡を取り上げたが、たいした利益はなかつた。前將軍が佐渡・石見の兩國を收むるに及び、甲斐の人大久保長安に之を掌らせた。二年の中に黄金數萬斤を得た。長安は、又、伊豆で採掘した。其の利は、前と同じ

程であつた。豐臣氏の古き法度に從つて、小判を造り翌年又新貨幣を鑄造したが、人民は皆之を便利とした。

語釋 光次(金工で姓は後藤) ○方金(金一分) ○白金(しろがね) ○金幣(金貨。小判) ○新錢(慶長通寶)

十一年春、前將軍建白、禁廷狹隘、不可行朝儀。遂課天下侯伯修拓之、各刻名于礎。參議秀康掌其事。秀康尋遷中納言。又大修江戶城。使藤堂高虎率池田・福島・加藤・黑田・淺野・細川等十五姓助工。三月、前將軍赴京師。五月、榊原康政卒。命子康勝襲封。九月、賜島津忠恆、松平氏及偏諱、改名家久。自是諸藩多賜氏。是月、江戶城成。宏壯稱天下第一。藤堂氏以功賜備中地萬石。其餘有差。十月、前將軍歸江戶。是歲、封十男賴房子常陸、下妻、食五萬石。爲少將忠輝、娶伊達氏。罷内藤清成、青山忠成、奉行職、以安藤重信代之。徙駿府、城主内藤信成于長濱。

訓讀 十一年春、前將軍、建白す「禁廷狹隘にして、朝儀を行ふ可からず」と。遂に天下の侯伯に課して、之を修拓し、各々名を礎に刻す。參議秀康、其の事を掌る。秀康、尋いで中納言に遷る。又大に江戶城を修め、藤堂高虎をして、池田・福島・加藤・黑田・淺野・細川等の十五姓を率ゐて工を助けしむ。三月、前將軍、京師に赴く。五月、榊原康政、卒す。子康勝に命じて封を襲がしむ。九月、島津忠恆に、松平氏及び偏諱を賜ひ、名

を家久と改めしむ。是より諸藩に多く氏を賜ふ。是の月、江戸城成る。宏壯なること天下第一と稱す。藤堂氏、功を以て備中の地萬石を賜ふ。其餘、差有り。十月、前將軍、江戸に歸る。是の歳、十男頼房を常陸の下妻に封じ、五萬石を食ましむ。少將忠輝の爲に伊達氏に娶る。内藤清成・青山忠成の奉行職を罷め、安藤重信を以て之に代ふ。駿府の城主内藤信成を長濱に徙す。

通釋 十一年の春、前將軍が、建白した。「御所は手狭で、朝儀を行ふことが出来ぬ」といふのである。天下の諸大名に割りあて、之を取廣げて修復し、各々、其の名を礎に彫り付けさせた。參議秀康が、其の事を掌つた。秀康は間もなく、中納言に遷つた。それから又、江戸城の大修繕を行ひ、藤堂高虎に命じ、池田・福島・加藤・黒田・淺野・細川等、十五侯を率ゐて工事を助けさせた。三月、前將軍は、京都に赴いた。五月、榊原康政が死んだ。其の子康勝に命じて、封を繼がせた。九月、島津忠恆に、松平氏及び諱の一字を賜はつて、家久と改名させた。これが例に爲つて、諸藩に多く氏を賜はつた。この月、江戸城の普請は落成した。其の規模の大きく且つ立派なことは、天下第一と稱せられた。藤堂氏は、功を以て備前の地、一萬石を賜つた。その餘の諸侯には差等があつた。十月、前將軍は、江戸へ歸つた。この年、十男の頼房を常陸の下妻に封じて、五萬石を領せしめた。少將忠輝の爲に伊達氏を娶つた。又、内藤清成・青山忠成の奉行職を罷めて、安藤重信に代らせた。駿府の城主内藤信成を長濱に移り居らせた。

十二年正月、課海道及畿西諸國、城于駿府。前將軍嬰疾昏倒。既而愈。有訛言。二月、乃張四部散樂、下令縱觀。前將軍將軍率諸侯臨焉。訛言立止。先是中將忠吉有疾。

少間來江戸寓大久保氏。三月、忠吉卒。無嗣。徙義直于尾張、食六十萬石、令平岩親吉居犬山。中納言秀康爲伏見留守。是月、以疾謁歸。兩月而卒。秀康武而善政。内外惜之。其子忠直襲封。後任少將。次子直基繼結城氏。三月、前將軍老子駿府。以松平定勝爲伏見留守。以井伊直孝副之。先是韓囚歸其國、說我新政。韓主心嚮之。五月、遣使者呂祐吉等入貢、詣兩府。自是每將軍禪代輒來、永爲我屬國。兩將軍奏宗義智之功、爲四位侍從。比十萬石。前代外國書信皆委僧侶。於是命博士林信勝掌之。是夏、課東北諸侯、作江戸天主閣。

訓讀 十二年正月、海道、及び畿西の諸國に課して、駿府に城く。前將軍、疾に嬰つて昏倒す。既にして愈ゆ。訛言有り。二月、乃ち四部の散樂を張り、令を下して縱觀せしむ。前將軍、將軍、諸侯を率ゐて臨む。訛言、立ちどころに止む。是より先、中將忠吉、疾有り。少間あり、江戸に來つて大久保氏に寓す。三月、忠吉、卒す。嗣無し。義直を尾張に徙し、六十萬石を食ましめ、平岩親吉をして犬山に居らしむ。中納言秀康、伏見に留守たり。是の月、疾を以て謁歸す。兩月にして卒す。秀康、武にして政を善くす。内外、之を惜しむ。其の子忠直、封を襲ぐ。後、少將に任ぜらる。次子直基、結城氏を繼ぐ。三月、前將軍、駿府に老す。松平定勝を以て伏見の留守と爲す。井伊直孝を以て之に副とす。是より先、韓の囚、其の國に歸つて、我が新政を説く。韓主、心、之

に響ふ。五月、使者呂祐吉等を遣はして入貢し、兩府に詣らしむ。是より將軍の禪代毎に輒ち來り、永く我が屬國と爲る。兩將軍、宗義智の功を奏して、四位侍從と爲し、十萬石に比す。前代は、外國の書信は、皆僧侶に委す。是に於て、博士林信勝を命じて之を掌らしむ。是の夏、東北の諸侯に課して、江戸の天主閣を作る。

通釋 十二年正月、東海道及び畿内より西の諸國に割りあて、駿府に城を築いた。前將軍は、病氣に罹り、目を廻して倒れたが、間もなく全快した。色々の風説が立つた。そこで二月には、四座の猿樂を催し、勝手に縦覽させるやう、命令を下した。前將軍及び將軍は、諸大名を率ゐて臨席した。風説は、立どころに止んだ。これより先、中將忠吉が、病氣に罹つた。少し快方に向つたので、江戸に來て、大久保氏に寓居した。三月、忠吉は死んだ。相續者がなかつた。依つて、義直を尾張に徙して、六十萬石を領有せしめ、平岩親吉を大山に居させた。中納言秀康は、伏見の留守居と爲つて居た。この月、病氣の爲め、届け出の上歸國した。二個月の後に死んだ。秀康は、武勇に富んだ上に、政治を善くし。内外の人はその死を惜んだ。其の子忠直が、封を繼いだ。後、少將に任ぜられた。次男の直基は、結城家を相續した。三月、前將軍は、駿府へ隱居した。松平定勝を伏見の留守居とし、井伊直孝を其の脇添とした。これより先、朝鮮の捕虜は國へ歸つて、我が新政を説いたので、朝鮮の國王は、心に慕はしく思つた。五月、呂祐吉等を使者とし、貢を奉り、駿府・江戸の兩府に至つて謁見した。これより、將軍の跡目相續ごとくに、何時でも來て、長く我が屬國となつた。兩將軍は、宗義智の功績を奏上して、四位侍從とし、十萬石の家格にした。以前、外國への往復文書は、皆、僧侶の手に任せてあつたが、こゝに於て、博士林信勝に命じて、之を掌らせた。この年の夏、東北の諸大名に割りあて、江戸城の天主閣を造つた。

語釋 四部散樂(觀世・金春・金剛・實生の四家) ○禪代(禪はゆづる。將軍が隱居したり、或は死んで之を續樂の四座といふ) ○禪代(禪はゆづる。將軍が隱居したり、或は死んで之を續樂の四座といふ) ○禪代(禪はゆづる。將軍が隱居したり、或は死んで之を續樂の四座といふ)

十月、前將軍之江戶、擧西城府藏、貳將軍、又設茶會而招將軍。以上杉景勝・佐竹義宣・伊達政宗爲接待、皆手賜茶。當是時、兩公數臨諸侯邸、每極歡焉。十二月、前將軍還駿府。府城災。十三年、再城之。三月成。九月、將軍率諸侯往賀焉。自是兩公往來二府。而豐臣氏以下、歲使駿府賀正。是歲、筒井定次以淫虐、前田利宗以喪心、竝收封。以利宗、邑八上、徙封松平康重。以其地形不足、以扼山陰、乃改城于篠山、課藤堂及池田・福島・加藤・淺野氏。

訓讀 十月、前將軍、江戸に之き、西城の府藏を擧げて將軍を招く。上杉景勝・佐竹義宣・伊達政宗を以て接待と爲し、皆手づから茶を賜ふ。是の時に當り、兩公、數々諸侯の邸に臨み、毎に歡を極む。十二月、前將軍、駿府に還る。府城、災あり。十三年、再び之を城く。三月成る。九月、將軍、諸侯を率ゐて往いて賀す。是より兩公、二府に往來す。而して豐臣氏以下、歲々使を駿府に使はして正を賀す。是の歲、筒井定次は淫虐を以て、前田利宗は喪心を以て竝に封を收め、利宗の邑八上を以て松平康重を徙封す。其の地形、以て山陰を扼するに足らざるを以て、乃ち改めて篠山に城き、藤堂、及び池田・福島・加藤・淺野氏に課す。

通釋 十月、前將軍は、江戸に赴き、西丸の庫に在るものを、残らず將軍に賜はり、又、茶湯を催して將軍を招待した。上杉景勝・佐竹義宣・伊達政宗を相伴となし、此等の人々に、手づから茶を賜はつた。この時に當り、

前將軍・大將軍の兩公は、度々諸大名の屋敷へ出かけ、何時も上々の機嫌であつた。十二月、前將軍は駿府へ歸つた。府城が火事で焼けたので、十三年に再び之を築いた。三月、落成したので引移つた。九月將軍は諸大名を率ゐ、往いてお祝ひを言上した。これから、兩公は江戸、駿府の間を往來した。豊臣氏以下の大小名は、年毎の使を駿府へ遣はし、年賀の言葉を上上げた。この年、筒井定次は淫亂暴虐、前田利宗は發狂の故を以て、何れも領地を取り上げ、利宗の領地八上を以て、松平康重を徙し封じた。しかし、地形上、山陰道をくひ留めるに足らないので、改めて篠山城を築き、藤堂及び池田・福島・加藤・淺野の諸侯に割りあて、之が工事に當らせた。

語釋 八上(波丹)

十四年正月、義直之國。前將軍送之。二月歸。九月、徙脇坂安治于大洲、富田知信于宇和島、以伊賀・伊勢二十三萬石、賜藤堂高虎、治于阿濃津、比勳舊之臣。先是、廷臣有結伴姦淫者。前將軍奉勅、命板倉勝重按治之。十一月、誅其首罪一人、流竄其餘。十二月、封賴宣于駿河、遠江五十萬石、治于濱松。徙賴房于水戸。是歲諸侯妻子盡至江戸。令其會同者留期年而去。著爲永制。禁西諸侯多造戰艦。

訓讀 十四年正月、義直、國に之く。前將軍、之を送り、二月、歸る。九月、脇坂安治を大洲に、富田知信を宇和島に徙し、伊賀・伊勢二十三萬石を以て、藤堂高虎に賜ひ、阿濃津に治し、勳舊の臣に比す。是より先、廷臣、

件を結んで姦淫する者有り。前將軍、勅を奉じ、板倉勝重に命じて之を按治せしむ。十一月、其の首罪一人を誅し、其餘を流竄す。十二月、賴宣を駿河・遠江五十萬石に封じ、濱松に治せしむ。賴房を水戸に徙す。是の歲諸侯の妻子、盡く江戸に至る。其の會同する者は、留ること期年にして去らしむ。著して永制と爲す。西の諸侯の多く戰艦を造るを禁ず。

通釋 十四年正月、義直は領國の尾張に赴いた。前將軍は之を送り、二月に歸つた。九月、脇坂安治を大洲に、富田知信を宇和島に徙し、伊賀・伊勢の二十三萬石を、藤堂高虎に賜はり、居城を阿濃津に定めさせて、譜代の大名の扱をした。これより先、公卿の中で、組を作つて宮女を姦淫したものがあつた。前將軍は、勅を奉じ、板倉勝重に命じ、之を裁判させた。十一月、其の發頭一人を誅し、其の外の者を遠流の刑に處した。十二月、賴宣を駿河・遠江の五十萬石に封じ、居城を濱松に定めさせた。賴房を水戸に徙した。この年、諸大名の妻子は、盡く江戸へ來た。其の大名の當主とこゝで會同したものは、滿一年で去らせた。斯くて之を定めて、永代まで法度とした。又西國の諸大名には多くの戰艦を造ることを禁じた。

語釋 大洲(伊豫) ○永制(子孫いつまで)

先是島津家久奉教招琉球。琉球不至。請而討之。是歲春、遣其將新納一氏、將八千人南伐。樺山久高爲先鋒。抵東求島、執琉球、戍兵三百。夏攻難巴津。虜以鐵鎖聯船。扼守津口。而津傍有山。險多蛇蝎。虜恃不置兵。我軍放火、赭山而上。進奪楊啖灘。戰

于千里山不利。轉攻朝築城拔之。琉球王尙寧使其弟具志來乞降。不許。五戰而至。國都擒尙寧及王子大臣數十人而嚴禁抄掠安撫國民。以六十日定琉球。秋幕議以琉球賜島津氏爲其臣隸。先是我買船至阿媽港皆見誘殺。其三人潛逃歸告之。是歲港人二百至長崎。幕府命原城主有馬晴信助長崎奉行長谷川藤廣擊慶港人。後二歲其大人來謝。乃給印信許互市。

訓讀 是より先、島津家久、教を奉じて琉球を招く。琉球至らず。請うて之を討つ。是の歲、春、其の將新納一氏を遣はし、八千人に將として南伐す。樺山久高、先鋒たり。東求島に抵り琉球の成兵三百を執る。夏、難巴津を攻む。虜、鐵鎖を以て船を聯ね、津口を扼守す。而して津傍に山有り。險にして蛇蝎多し。虜、恃んで兵を置かず。我が軍、火を放ち山を楮にして上り、進んで楊咲灘を奪ひ、千里山に戰ふ。利あらず。轉じて朝築城を攻めて、之を拔く。琉球王尙寧、其の弟具志をして來つて降を乞はしむ。許さず。五戰して國都に至り、尙寧及び王子・大臣數十人を擒へて、嚴しく抄掠を禁じ、國民を安撫す。六十日を以て琉球を定む。秋、幕議、琉球を以て島津氏に賜ひ、其の臣隸と爲す。是より先、我が買船、阿媽港に至り、皆誘殺せらる。其の三人、潛に逃れ歸り、之を告ぐ。是の歲、港人二百、長崎に至る。幕府、原城主有馬晴信に命じ、長崎奉行長谷川藤廣を助け、擊つて港人を慶にす。後二歲、其の大人來り謝す。乃ち印信を給して、互市を許す。

通釋 これより先、島津家久は、仰を承つて、琉球王を招いたが召しに應じなかつた。之が征伐を請うて討つた。この年の春、部將の新納一氏を遣はし、八千の兵を率ゐて南伐させた。樺山久高は、其の先鋒となつた。東求島に至つて、琉球の番兵三百人を捕へた。夏難巴の津を攻めた。すると、琉球人は鐵の鎖で舟をつなぎ合せ、港の口を食ひ止めて、守つた。港の傍には、山が有つた。險阻な上に蛇や蝎が多く住んで居た。琉球人は之を恃みとして、守の兵を置かなかつた。我が軍は、火を放ち山を楮き拂つて上り、進んで、楊咲灘を奪つて、千重山で戰つた。然し、勝たなかつた。轉じて、朝築城を攻めて、之を抜いた。琉球王の尙寧は、弟の具志を遣はし、降參を乞うて來たが、許さなかつた。五戰して、國都に攻込み、尙寧及び王子大臣等數十人を擒にし、嚴しく分捕を禁じ、國民を鎮撫し安心させた。六十日で、琉球を平定した。秋、幕府が評議を重ねた結果、琉球を島津氏に賜うて、その附屬とした。これより先、我が商船が阿媽港に至つて、皆誘殺せられた。其の三人が潛かに逃歸つて、之を告訴した。この年、阿媽港の人が二百名、長崎へ至つた。幕府は、原の城主有馬晴信に命じ、長崎奉行の長谷川藤廣を助けて、擊つて港人を皆殺しにせしめた。二年の後、其の他の頭役共が來つて、御詫をした。そこで、朱印を與へて、貿易を許した。

語釋 東求島(琉球の島名) ○難巴津(沖繩本島の港) ○楊咲灘(千里山朝築城(沖繩)) ○阿媽港(支那廣東) ○原(肥前) ○大人(族貴)

十五年正月、將軍以內藤忠重爲嗣子、傅松平正綱、子信綱、阿部正次、子正秋爲侍臣。二月、將軍適駿府。先是堀忠俊之宰堀直清專政、讒庶兄直寄逐之。直寄奔訴之。

駿府。閏二月、兩公親聽之。直清辭屈。放之山形。放忠俊岩城。封直寄于信濃。飯山。以越後封少將忠輝。併舊封爲五十萬石。治于福島。尋遷高田。是月將軍大獵于遠江。本多忠勝自桑名來謁曰。往年老僕從太公拒武田信玄于茲。爾時以信玄兵爲衆盛不可當也。今郎君之衆什倍信玄矣。

訓讀 十五年正月、將軍、内藤忠重を以て嗣子の傳と爲し、松平正綱の子信綱・阿部正次の子正秋を侍臣と爲す。二月、將軍、駿府に適く。是より先、堀忠俊の宰堀直清、政を專にし、庶兄直寄を讒して、之を逐ふ。直寄奔つて之を駿府に訴ふ。閏二月、兩公、親ら之を聽く。直清、辭、屈す。之を山形に放ち、忠俊を岩城に放ち、直寄を信濃の飯山に封す。越後を以て少將忠輝を封じ、舊封を併せて五十萬石と爲し、福島に治せしむ。尋いで高田に遷る。是の月、將軍、大に遠江に獵す。本多忠勝、桑名より來謁して曰く「往年、老僕、太公に従うて、武田信玄を茲に拒ぐ。爾時、信玄の兵を以て、衆盛當る可からずと爲す。今郎君の衆、信玄に什倍す」と。

通釋 十五年正月、將軍は、内藤忠重を以て若君の守役となし、松平正綱の子信綱・阿部正次の子正秋を侍臣とした。二月、將軍は、駿河へ赴いた。これより先、堀忠俊の家老、堀直清といふものが、政を專にし、妾腹の兄直寄を讒して、之を追放した。すると、直寄は、走つて、之を駿府に訴へた。閏二月、兩公は親ら之を裁判せられた。直清は、一言もなく畏れ入つた。依つて、之を山形へ、忠俊を岩城へ追放し、直寄を信濃の飯山に封じた。又、少將忠輝を越後へ封じ、舊領と併せて、五十萬石となし、居城を福島に定めさせた。間もなく、高

田へ遷つた。此の月、將軍は大に遠江で狩をせられた。本多忠勝は、桑名から來り謁して曰ふには「先年、私は御隠居、家康公に従つて、武田信玄を此地で拒ぎました。其の時には、信玄の兵は多勢でも叶はぬと思ひました。今若殿の麾下は、信玄に十倍して居ます」と。

是、春爲義直、城名護屋。課前田氏以下十七國助役。諸侯助篠山役者告竣。命助名護屋。福島正則謂池田輝政曰。土木荐興、我輩困敝若夫。兩府所不敢辭。此等私役復驅使我輩何也。子爲駿府愛婿。盍爲我輩說之。清正奮髯曰。左衛門何出此言。不欲助役。則不如速反。不能反。則何出此言乎。輝政大笑而止。前將軍聞之。使輝政言諸侯曰。厭土木者。宜速就國。高壘深溝。以俟我旆。諸侯大懼。併力就役。數月而成。八月島津家久攜琉球王來謁駿府。獻方物。遂造江戶。九月將軍釋王使復其國。命島津氏歸俘虜。十月本多忠勝卒。忠勝自十四歲從軍。大小五十餘戰。每戰皆捷。而未嘗被創。前將軍殊悼之。使長子忠政襲封。自是藤堂高虎代忠勝鎮伊勢。

訓讀 是の春、義直の爲に名護屋に城く。前田氏以下十七國に課して役を助けしむ。諸侯の篠山の役を助くる者、俟を告ぐ。命じて名護屋を助けしむ。福島正則、池田輝政に謂つて曰く「土木、荐に興つて、我が輩、困敝

す。夫の兩府の若きは、敢て辭せざる所なり。此等の私役に、復我が輩を驅使するは、何ぞや。子は駿府の愛婿たり。盍ぞ我が輩の爲に之を説かざる」と。清正、髯を奮つて曰く「左衛門、何ぞ此の言を出す。役を助くるを欲せずば、則ち速に反くに如かず。反く能はずば、則ち何ぞ此の言を出すか」と。輝政、大に笑つて止む。前將軍、之を聞き、輝政をして、諸侯に言はしめて曰く「土木を厭ふ者は、宜しく速に國に就き、壘を高くし溝を深くし、以て我が旆を俟つべし」と。諸侯、大に懼れ、力を併せて役に就く。數月にして成る。八月、島津家久、琉球王を携へて駿府に來謁し、方物を獻じ、遂に江戸に造る。九月、將軍、王を釋して其の國に復らしめ、島津氏に命じて俘虜を歸さしむ。十月、本多忠勝卒す。忠勝、十四歳より軍に従ひ、大小五十餘戰、每戰、皆捷つ。而して未だ嘗て創を被らず。前將軍、殊に之を悼み、長子忠政をして封を襲がしむ。是より藤堂高虎、忠勝に代つて伊勢を鎮す。

通釋 この年の春、義直の爲に、城を名護屋に築いた。前田氏以下の十七國に割りあて、工事を助けさせた。諸大名で、篠山の工事を手傳つて居たものが、落成して手があいた。そこで命じて名護屋の方を助けしめた。福島正則が池田輝政に向つて曰ふには「色々の工事が次ぎ」と續いて、我輩は疲弊して難澁する。江戸とか、駿府とかの工事は、辭退する所でない。斯んな私の工事にまで、使役されるのは、何とした事か。貴公は、駿府の氣に入りの婿だ。我等の爲に少し説いて貰ひたい」と。すると清正は、長い髯を振り立て、曰ふには「左衛門、なぜ貴公はそんな事をいふのか。若し工事は手傳ひが厭なら、速に謀叛するが善い。謀叛が出来ぬれば、何故、そんな文句をいふか」と。輝政は大に笑つて、そして其の話は止んだ。前將軍は、之を聞いて、輝政をして、諸大名に言はせて曰ふのに「工事を厭ふものは、速に國へ歸り、壘を高くし、濠を深くして、我が軍旗の

向ふを待つのが善い」と。諸侯は大に懼を爲し、力を併せて工事を急いだ。僅か數ヶ月で落成した。八月、島津家久は、琉球王を連れ、來つて駿府に謁し、土産を獻じ、それから、江戸へ往つた。九月、將軍は、琉球王を赦して、其の國に還らせ、島津氏に命じて、捕虜を歸させた。十月、本多忠勝が死んだ。忠勝は、十四の時から戰場に臨み、大小五十餘戰、戰ふ毎に、いつでも捷つた。そして未だ嘗て負傷したことがなかつた。前將軍は、殊に其の死を悼み、長子忠政をして、封を襲がせた。これより、藤堂高虎は忠勝に代つて、伊勢を鎮撫した。

語釋 奮髯(長い髯を逆立て、怒る) ○方物(其の地方で生ずるもの。土産)

十六年三月、前將軍如京師。先是朝旨欲以爲太政大臣。固辭不拜。是月皇太子受禪。是爲後水尾天皇。前將軍命諸侯、修上皇宮、多置供御地。前將軍使人謂豐臣秀頼曰「自結婚末相見、恐生生物議。願一來、以定衆情。秀頼年十九。驕逸不知外事。事皆決於淀君。淀君欲不遣嫡母淺野氏使使諭其不可再違命。乃遣之。四月、詣二條城。前將軍饗而還之。遣義直、賴宣往大阪謝之。遺白金一萬三千兩。乃歸駿府。是月淺野彈正少弼卒。前將軍最與少弼親善。以常陸眞壁五萬石爲其湯沐邑。而時召見與圍碁。及其沒、不復奕也。乃賜眞壁于其季子長重。五月、加藤清正卒。嗣子忠廣猶

幼幕議使藤堂高虎往視國事。十一月、兩公偕獵于上野。先是京師富人角倉某、上書言便宜、請通丹波之漕。許之。尋命通甲斐駿河之漕。是歲又請引鴨川通伏見。又許之。

訓讀 十六年三月、前將軍、京師に如く。是より先、朝旨、以て太政大臣と爲さんと欲す。固辭して拜せず。是の月、皇太子、禪を受く。是を後水尾天皇と爲す。前將軍、諸侯に命じて、上皇の宮を修めしめ、多く供御の地を置く。前將軍、人をして豊臣秀頼に謂はしめて曰く、「婚を結んでより未だ相見ず。恐らくは物議を生ぜん。願はくは一たび來り、以て衆情を定めよ」と。秀頼年十九。驕逸にして外事を知らず。事皆淀君に決す。淀君、遣らざらんと欲す。嫡母淺野氏、使をして其の再び命に違ふ可からざるを諭さしむ。乃ち之を遣る。四月、二條城に詣る。前將軍、饗して之を還し、義直・頼宣を遣はして大阪に往き、之を謝し、白金一萬三千兩を遣る。乃ち駿府に歸る。是の月、淺野彈正少弼、卒す。前將軍、最も少弼と親善なり。常陸の眞壁五萬石を以て、其の湯沐の邑と爲す。而して時に召し見、與に碁を圍む。其の没するに及んで、復たせず。乃ち眞壁を其の季子長重に賜ふ。五月、加藤清正、卒す。嗣子忠廣、猶幼し。幕議、藤堂高虎をして往いて國事を視しむ。十一月、兩公、偕に上野に獵す。是より先、京師の富人角倉某、上書して便宜を言ひ、丹波の漕を通せんと請ふ。之を許す。尋いで甲斐・駿河の漕を通ずるを命ず。是の歲、又鴨川を引いて伏見に通せんと請ふ。又之を許す。

通釋

十六年三月、前將軍は、京都へ往つた。これより先、朝廷の内命にて、太政大臣にしようとなされた。固

く辭退して受けなかつた。この月、皇太子が帝位を受けさせられて、即位された。之を後水尾天皇と申し上げた。前將軍は、諸大名に命じて、上皇の御所を修理し、多くの供御の地を置いた。前將軍は、人を遣つて、豊臣秀頼に言はしめて曰ふのに「縁組をしてから、未だ面會したことが無い。世間の手前、物議を醸すはよくない。一度來て、世間の事を静めるがよい」と。秀頼は十九の若さである。心は驕り、遊惰に耽つて、世間のことは何も知らない。萬事は淀君に依つて決せられた。淀君は遣るまいと思つて居た。生母の淺野氏が、使を寄越し、前年も仰に従はず、再度背くはよくないといつて諭した。そこで遣ることにした。四月、二條城に至つた。前將軍は、馳走して、之を歸し、義直・頼宣をして、大阪へ往つて禮を言はせ、白金一萬三千兩を贈つた。そこで前將軍は駿府へ還つた。この月淺野彈正少弼が死んだ。前將軍は、少弼とは一番仲が善かつた。常陸眞壁の五萬石を以て、隱居料となした。又時々召し寄せては碁を打つた。少弼が死するに及んで、再び碁を打たなかつた。そこで、眞壁をその末子の長重に賜はつた。五月、加藤清正が死んだ。其の後繼の忠廣は、まだ幼年であつた。幕府では評議の結果、藤堂高虎を遣り、代つて國政を取り行はせた。十一月、前將軍父子が一緒に上野で狩した。これより先、京都の金持の角倉某は、上書して、便宜になることを述べ、丹波から船の便を通ずることを請うた。之を許した。尋いで甲斐・駿河の間に舟楫の便を開くやうに命じた。又、その年、鴨川の水を引いて伏見に通ずることを請うた。之をも許可した。

當是時夷蕃入貢若乞互市者二十餘國。前將軍命吏贈書於明福建守。因故事請勘合印。守疑懼不答。而其商舶來者益衆。乃以長崎爲互市地。禁他依泊。初豐臣氏

禁_ズ耶蘇教_ヲ既_{ニシテ}而_モ禁弛_ム至_レ是_ニ蠻人_ヲ耶與子_ヲ上_リ變_テ告_グ倡_{フル}蠻教_者皆_ハ覬_{スト}覲_非望_ヲ乃_チ令_{シテ}海内_ニ檢_シ蠻人_ヲ盡_ク逐_レ之_ヲ我_ガ民_ヲ奉_ズ其_ノ教_者命_{ジテ}僧_ヲ諭_シ之_ヲ不_レ聽_者處_ニ流_斬置_キ耶與子_ヲ于_江戶_東郭_厚視_レ之_ヲ又_リ有_リ告_グ有_リ馬晴信_修蠻教_者次_ニ年_ニ放_チ晴信_ヲ于_甲斐_尋賜_フ死_ヲ其_ノ子_ヲ爲_シ前_ニ將軍_義女孫_壻因_テ得_レ襲_レ封_ヲ

訓讀 是の時に當り、夷蕃の入貢、若しくは互市を乞ふ者二十餘國。前將軍、更に命じて、書を明の福建の守に贈り、故事に因つて、勘合印を請ふ。守、疑懼して答へず。而して其の商舶の來る者益々衆し。乃ち長崎を以て互市の地と爲し、他の依泊を禁ず。初め豊臣氏、耶蘇教を禁ず。既にして禁弛む。是に至つて、蠻人耶與子、變を上り、蠻教を倡ふる者は、皆非望を覬覦すと告ぐ。乃ち海内に令して蠻人を檢し、盡く之を逐ふ。我が民の其の教を奉ずる者は、僧に命じて之を諭し、聽かざる者は流斬に處す。耶與子を江戸の東郭に置き、厚く之を視る。又有馬晴信、蠻教を修むと告ぐるもの有り。次年、晴信を甲斐に放ち、尋いで死を賜ふ。其の子は前將軍の義女孫の壻たり。因つて封を襲ぐを得。

通釋 この時に當り、外國人で、入貢したり、交易を乞ふもの、二十餘國に及んだ。前將軍は、役人に命じて、書面を明の福建の太守に贈り、先例に因つて、勘合印を請ひ求めしめた。太守は疑ひ懼れて、返事をしない。加之、我が邦へ來る明國の商船は、愈々多くなつた。長崎丈けを、互市の場所となし、其の他へ寄港することを禁じた。初め豊臣氏は耶蘇教を禁じたが、次第に其の禁令が弛んで來た。そこで、外國人の耶與子といふものが、

變事を訴へ出で、耶蘇教を信奉するものは、皆國を奪ひ取らうとするものだといつた。そこで海内に令して外國人を取調べ、盡く之を追ひ拂つた。又我が人民で其の教を信仰するものは、僧に命じて諭させ、聞き入れぬものは、遠流や斬罪に處した。耶與子は江戸城の東郭に置いて、手厚い待遇を與へた。又、有馬晴信が耶蘇教を信奉するといつて告訴したものがあつた。翌年、晴信を甲斐に追放し、間もなく死を賜はつた。其の倅は、前將軍の孫娘分の婿であつた。だから封を襲ぐことが出來た。

語釋 (福建(支那)の故事(足利時代)) ○勘合印(交易を許可した印章) ○依泊(たよつて舟を泊) ○江戸東郭(八重洲(河津))

十七年正月、平岩親吉卒。無子。親吉爲義直假父。以故不敢立。後前將軍適尾張。二月歸。六月從京畿豪商于江戸。七月修春日祠。先是祠樹折。朝議以爲凶兆。來諮。前將軍對曰。是神欲以修祠耳。乃有是命。因給穀祿。準伊勢大廟。又嘗與朝臣議。制天下寺祠修造之節。而嚴禁新立焉。是時越前列宰。爭權來愬。十一月、兩公在江戸聽之。一人坐不直處。流。一人愧恥自殺。前將軍遣本多成重爲宰。與舊宰竝視國事。成重重次子。幼侍秀康者也。是歲蒲生秀行卒。子忠明以我外孫。嗣鎮會津。

訓讀 十七年正月、平岩親吉、卒す。子無し。親吉は、義直の假父たり。故を以て敢て後を立てず。前將軍、尾張に適く。二月、歸る。六月、京畿の豪商を江戸に徙す。七月、春日祠を修む。是より先、祠樹折る。朝議以

て凶兆と爲して、來り諮ふ。前將軍對へて曰く「是れ神以て祠を修めんと欲するのみ」と。乃ち是の命有り。因つて穀祿を給して、伊勢の大廟に準ず。又嘗て朝臣と議して、天下の寺祠修造の節を制し、嚴に新立を禁ず。是の時、越前の列宰、權を争うて來り懇ふ。十一月、兩公、江戸に在つて之を聽く。一人は不直に坐して流に處す。一人は愧恥して自殺す。前將軍、本多成重を遣はして宰と爲し、舊宰と並んで國事を視しむ。成重は、重次の子なり。幼にして秀康に侍せし者なり。是の歳、蒲生秀行、卒す。子忠明、我が外孫を以て、嗣いで會津を鎮す。

通釋 十七年正月、平岩親吉が死んだ。子がなかつた。しかし、親正は、尾張侯義直の假父であつた。その故に格別跡目を立てなかつた。前將軍は、尾張へ赴いた。二月に歸つた。六月、京畿の豪商を江戸に徙した。七月、春日神社を修繕した。これより先、境内の樹木が折れた。朝議は之を、不吉の兆とし、來り問はれた。前將軍が答へて曰ふには「これは神が御宮を修理したいと思はれるのである」と。そこでこの修復の命令があつたのである。因つて、穀物の祿を捧げ、伊勢の大廟に准じた。又、嘗て公卿共と相談し、天下の神社佛閣の修理建築の制度を定め、新に建てることを堅く禁じた。この時、越前の家老共が、權力争ひをして來り訴へた。十一月、兩公は、江戸に在つて、之を裁いた。すると、其の一人が、申立の正しからざるに坐して、遠流に處せられた。他の一人は愧ぢて自殺した。前將軍は、本多成重を遣つて家老とし、元の家老と一所に、國政を管理せしめた。成重は重次の倅である。幼時秀康の側に侍したものである。この年蒲生秀行が死んだ。其の子忠明は、徳川家の外孫だから、相續して會津を鎮撫した。

語釋 列宰(多くの家老・久世・岡部) ○舊宰(本多富)

十八年正月、命三十七藩修皇宮。是月池田輝政卒。池田氏實楠氏楠正行之死節遺腹子教正、育於攝津池田氏。其裔恆利始徙尾張。恆利孫爲輝政。輝政助徳川氏定禍亂。人以爲不辱其祖。長子利隆襲封播磨。二弟忠繼忠雄並立。我外孫分領備前淡路。八月淺野左京大夫卒。關原之役大夫首破岐阜。功最大。而保護豊臣氏不衰。前將軍心深疑之。遂約以其女妻義直。未成婚而卒。無子。有二弟。仲長晟稱但馬守。少在大阪。國人避嫌。請立叔長重。前將軍命立仲襲封。是歲春、大久保長安、姦利事覺。會病死。誅其七子。故石川數正子康長、連坐奪邑。以康長、邑深志、賜小笠原秀政。復其舊封。是歲冬、富田知信、高橋元種皆有罪。收封。

訓讀 十八年正月、三十七藩に命じて、皇宮を修めしむ。是の月、池田輝政、卒す。池田氏、實は楠氏なり。楠正行の節に死するや、遺腹の子教正、攝津の池田氏に育てらる。其の裔恆利、始めて尾張に徙る。恆利の孫を輝政と爲す。輝政、徳川氏を助けて禍亂を定む。人以爲へらく、其の祖を辱しめずと。長子利隆、播磨に襲封す。二弟忠繼・忠雄、並に我が外孫を以て、分れて備前・淡路を領す。八月、淺野左京大夫、卒す。關原の役に、大夫、首として岐阜を破り、功最も大なり。而して豊臣氏を保護して衰へず。前將軍、心に深く之を疑とす。遂

に其の女を以て義直に妻すを約す。未だ婚成らずして卒す。子無し。二弟有り。仲は長晟、但馬守と稱す。少くして大阪に在り。國人、嫌を避け、叔長重を立てんと請ふ。前將軍、命じて仲を立て、封を襲がしむ。是の歳春、大久保長安の姦利の事覺る。會と病みて死す。其の七子を誅す。故石川數正の子康長、連坐して邑を奪はる。康長の邑深志を以て小笠原秀政に賜ひ、其の舊封を復す。是の歳冬、富田知信・高橋元種、皆罪有り。封を收む。

通釋 十八年正月、三十七藩に命じて、皇居を修繕させた。この月、池田輝政が死んだ。池田氏は、實は楠氏である。楠正行が節に死んだ後、その忘れ形見の教正は、攝津の池田氏に育てられた。其の末孫の恒利は、はじめ、尾張に従つた。恒利の孫が輝政である。輝政は、徳川氏を助けて、禍亂を定めた。依つて人々は、先祖の楠氏を辱しめないといつた。長子利隆は、其の領地の播磨を襲いだ。二弟忠繼・忠雄は、共に徳川氏の外孫だから、備前・淡路を分つて領した。八月、淺野左京大夫が死んだ。大夫は關原の役に最先に岐阜を破つたので、其の勳功は一番大かつた。そして、豊臣氏を保護することは、少しも變らなかつた。前將軍は、甚だ之をえらいと思つて居た。其の娘を義直に妻はさうと約束したが、未だ結婚させない内に死んだ。子はなかつた。大夫には二人の弟があつて。仲の長晟は、但馬守と稱した。年の若い頃、大阪に居た。國人は、豊臣氏と關係があると云ふ嫌疑を受けることを避け、叔の長重を立てようと請うた。前將軍は、命じて、仲を立て、封を襲がせた。この年春、大久保長安が奸計を廻らして、利益を貪つたことが、露顯した。折しも、長安は病死した。そこで、七人の倅どもを誅伐した。故の石川數正の子、康長も、連坐して、領地を取り上げられた。康長の領邑深志を小笠原秀政に賜はつて、その舊封を復した。この年の冬、富田知信・高橋元種等も、皆罪があつた。これは何れも領地を召し上げられた。

題(難はよし、えらいと)

是時、大久保忠鄰・本多正信・土井利勝・安藤重信・酒井忠世、爲江戶老中、本多正純・成瀬正成・安藤直次爲駿府老中、分執天下諸政。是歲秋、前將軍適江戶。十二月、將還駿府。舍于中原。甲斐人馬場忠時上變事曰、「大久保忠鄰謀不軌。馬場嘗蒙譴放。小田原請忠鄰。不見省。怨望。先是、忠鄰喪其子忠常。乃稱疾謁歸。又與山口重政婚。吏劾其不告奪重政封。忠鄰謝罪。不報。乃杜門不出。馬場時之也。又聞正信與忠鄰有卻。遂因本多氏誣告。前將軍驚還入江戶。令忠鄰如京師。檢耶蘇教。」

訓讀 是の時、大久保忠鄰・本多正信・土井利勝・安藤重信・酒井忠世、江戶の老中と爲り、本多正純・成瀬正成・安藤直次・駿府の老中と爲り、分れて天下の諸政を執る。是の歳秋、前將軍、江戶に適く。十二月、將に駿府に還らんとす。中原に舍す。甲斐の人馬場忠時、變事を上つて曰く、「大久保忠鄰、不軌を謀る」と。馬場嘗て、譴を蒙つて、小田原に放たる。忠鄰に申雪を請ふ。省せられず。怨望す。是より先、忠鄰、其の子忠常を喪ふ。乃ち疾と稱して謁歸す。又山口重政と婚す。吏、其の告げざるを劾して、重政の封を奪ふ。忠鄰、罪を謝す。報ぜず。乃ち門を杜いで出でず。馬場、之を時とするなり。又正信、忠鄰と卻有り。聞き、遂に本多氏に因つて誣告す。前將軍驚き、還つて江戶に入り、忠鄰をして京師に如き、耶蘇教を檢せしむ。

通釋 この時、大久保忠鄰・本多正信・土井利勝・安藤重信・酒井忠世は江戸の老中となつた。本多正純・成瀬正成・安藤直次は駿府の老中となり、分れて、天下の政治を取り行つた。この年秋、前將軍は江戸に往つた。十二月、駿府へ還らうとして、中原に泊つた。すると、甲斐の人馬場忠時が、變事を上つて曰ふのに「大久保忠鄰が謀叛をしようとして居る」と。馬場は、かつて、譴責されて、小田原へ追放された。その際、忠鄰に申譯を請うたが顧みられなかつた。深く之を怨んで居た。これより先、忠鄰は其の子忠常に死なれたので病氣だといつて、届け出で歸國した。又山口重政と縁組をした。役人は、告げずに縁組したことを彈劾して、重政の領地を取り上げた。忠隣は御託をしたがそれは聞き入れなかつた。そこで門をとちて、外出しなかつた。馬場は、これを見て時分は良しと思つたのである。又正信は忠鄰と仲が悪いと聞き込み、本多氏に因つて讒言したのである。前將軍は驚いて江戸へ還り、忠隣を京都へ往かせて、耶蘇教を取り調べさせた。

語釋 中原(模相)

踰歲正信傳命京師放忠鄰于彦根毀小田原外郭逐其士臣設兵備于箱根前將軍乃歸駿府板倉勝重奉命詣忠鄰館人走報忠鄰方與客奕徐斂局而出聽命京師驚擾忠鄰乃縛鎧仗送之板倉氏終赴彦根其族皆連坐叔父忠佐卒亦除國毀城安房里見氏坐與忠鄰交通奪國忠鄰自配所上書駿府曰臣縱伏誅而明無反

心。有司不_レ敢_レ通。獨成瀬正成爲_レ通之。僧天海以_レ密教見_レ親近。亦從容申救。以_レ將軍怒不_レ釋。乃止。及井伊直孝領_レ彦根。勸_レ忠鄰再_レ訴。辭曰。是顯君過也。亦止。兩將軍思_レ大久保氏舊勳。使_レ忠常子忠季襲_レ其封二萬石。後竟復_レ其舊。

訓讀 歳を踰ゆ。正信、命を京師に傳へて、忠鄰を彦根に放つ。小田原の外郭を毀つて、其の士臣を逐ひ、兵備を箱根に設く。前將軍乃ち駿府に歸る。板倉勝重、命を奉じて忠鄰に詣る。館人走り報す。忠鄰、方に客と奕す。徐に局を斂めて出で、命を聽く。京師、驚擾す。忠鄰乃ち鎧仗を縛して、之を板倉氏に送り、終に彦根に赴く。其の族皆連坐す。叔父忠佐、卒す。亦國を除き城を毀つ。安房里見氏、忠鄰と交通するに坐し、國を奪はる。忠鄰、配所より書を駿府に上つて曰く「臣縱ひ誅に伏するも、而も反心無きを明にせん」と。有司敢て通ぜず。獨り成瀬正成、爲に之を通ず。僧天海、密教を以て親近せらる。亦從容として申救す。將軍の怒釋けざるを以て乃ち止む。井伊直孝、彦根を領するに及び、忠鄰に勸めて再訴せしむ。辭して曰く「是れ君の過を顯すなり」と。亦止む。兩將軍、大久保氏の舊勳を思ひ、忠常の子忠季をして其の封二萬石を襲がしめ、後竟に其の舊に復す。

通釋 やがて、年を越すと、正信は、内命を京都に傳へ、忠鄰を彦根に追放した。小田原城の外郭をこはし、其の家來を追ひ拂ひ、兵備を箱根に設けた。そこで、前將軍は、駿府へ歸つた。板倉勝重は、命を奉じて、忠鄰の處へ往つた。其の部下が走つて知らせた。忠鄰は、其の時客と碁を打つて居た。靜かに、碁盤を片付けて出で、

内命を承つた。京都では驚き騒いだ。そこで、忠鄰は鎧や武器を縛つて、板倉氏へ送り届け、異心の無いことを示して、彦根へ往つた。其の一族は、皆まきぞへとなつた。叔父の忠佐は死んだ。これも亦改易となり、城を毀された。安房の里見氏は忠鄰と交通したといふ罪に坐して、國を奪はれた。忠鄰は、配所から駿府へ上書して曰ふのに「たとひ誅に伏しても良いから、謀叛の心の無かつたことだけ明かにしたい」と。役人は誰も之を取次がなかつた。唯、獨り、成瀬正成が之を取次いだ。僧天海は、密教を以て信用されて居た。亦從容として申譯して助けたが、どうも將軍の怒が収まらないから、それで手を引いた。井伊直孝が彦根を領するに及んで、忠鄰に再び訴へ出るやう勧めた。忠鄰は、辭退して曰ふのに「斯くては、君の過を世に顯はすことになる」と。これ亦止めたのである。其の内に、兩將軍は、大久保氏の昔の手柄を思ひ出して、忠常の子忠季に其の領邑二萬石を繼がせ、後には以前の通りにして遣つた。

前將軍素留意學術。捷於關原之年、即取經籍未經刊行者、盡上之木、以修禮文爲志。自讓職以來、益令天下購求遺書、引廷臣諳典故者與林信勝等講究於前、日夕不倦。又招文學之士、無緇素皆禮重之。是歲親試以爲政以德頌將軍亦試草尙之風必偃賦。

訓讀 前將軍、素より意を學術に留む。關原に捷つた年、即ち經籍の未だ刊行を経ざる者を取り、盡く之を木に上せ、禮文を修むるを以て志と爲す。職を讓つてより以來、益々天下に令して、遺書を購求し、廷臣の典

故を誦んずる者を引いて、林信勝等と、前に講究して、日夕倦まず。又文學の士を招く。緇素と無く皆之を禮重す。是の歳、親ら試みるに政を爲すに徳を以てするの頌を以てす。將軍も亦、草之に風を尙ふれば必ず偃すの賦を試みる。

通釋 前將軍は、最初から、心を學術に留めた。關原で捷つた年、未だ出版せられない經書を取つて、盡く之を版にほり、護法文藝を修めようと心がけた。將軍職を讓つてからは、更に一層、天下に令し、世に出ぬ遺書を購ひ求め、公郷で故實をよく知つて居るものを召し寄せて、林信勝等と共に、御前で、講究させ、日夜倦まなかつた。又文學に達した者を招いた。此外は僧俗の別なく、皆手厚く待遇した。この年、五山の宿老を會して、親ら爲す政以德頌といふ題で作らしめた。將軍も、亦草尙之風必偃賦といふ題で、試験された。

語釋 末經刊行者(周易・貞觀政要) ○遺書(菊亭晴秀から律二卷・令九篇・藤原隆資から侍中郡要抄十卷・故實抄七卷を贈る。其の東萊集・南軒集・李白集) ○爲政以德(論語爲政) ○頌(詩の六義より出づ、多くは韻語。元來神明に告げるものであつたが) ○草尙之風必偃(論語顔淵) ○賦(これも詩の六義より出づ。韻を押すが本來の形で)

日本外史新釋 卷二十一終

日本外史新釋 卷二十二

德川氏正記

德川氏五

慶長十九年三月、大將軍陞_リ從一位遷_ル右大臣。天使就拜焉。四月、天使歸_リ自江戶、過_シ駿府、諭_シ内旨、以前將軍爲_シ太政大臣。准_シ三宮辭_シ不_レ敢當。又諭_シ納_シ孫女爲_シ中宮、奉_シ詔。

訓讀 慶長十九年三月、大將軍、從一位に陞り、右大臣に遷る。天使就いて拜す。四月、天使、江戸より歸り、駿府を過ぎて、内旨を諭し、前將軍を以て太政大臣と爲し、三宮に准ず。辭して敢て當らず。又孫女を納れて中宮と爲さんことを諭す、詔を奉ず。

通釋 慶長十九年三月、大將軍は、從一位に陞り、右大臣に遷つた。勅使が來て拜命させた。四月、勅使は、江戸からの歸り路に駿河を過ぎ、御内命を諭し、前將軍を太政大臣とし、三宮に准ずるやうにしよつとあつた。

けれども辭退して御受しなかつた。又、孫娘を差し上げて、中宮にするやうに諭されたのでこれは、詔を奉じ御受した。

語釋 天使(勅使のこと。大納言廣橋兼勝、同藤原實條) ○三宮(太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮をいふ。) ○孫女(謙は和子)

當是時、豐臣秀頼已長、其臣大野治長等陰謀、舉兵復其舊業。治長有姿容、密通淀君、所言莫不聽。與淀君季父織田長益議、遺書前田利長曰、「先君有遺命、君盍來輔嗣君。城內甲仗豐足、福島正則等所貯穀粟、積至數萬石、足以有爲矣。利長以疾辭之、以其書來獻兩府。五月、利長卒。命子利光襲封。秀頼傳片桐且元、常誠秀頼曰、「徳川太公不、失義元之誼也、而納氏眞、不遺信長之好也、而助信雄。先公知其然、故臨終託孤。君務不、失其驩心。則可以長久矣。不則禍將不測。秀頼頗悟、而群臣不悅。以且元數、使關東、意其有私、稍猜防之。」

訓讀 是の時に當り、豊臣秀頼已に長じ、其の臣大野治長等、陰に兵を擧げて其の舊業を復せんと謀る。治長、姿容有り。密に淀君と通じ、言ふ所聽かれざる莫し。淀君の季父織田長益と議し、書を前田利長に遺つて曰く、「先君、遺命有り。君盍ぞ來つて嗣君を輔けざる。城內、甲仗豊足なり。福島正則等の貯ふる所の穀粟、積んで

數萬石に至る。以て爲す有るに足る」と。利長、疾を以て之を辭し、其の書を以て來つて兩府に獻す。五月、利長、卒す。子利光に命じて封を襲がしむ。秀頼の傳片桐且元、常に秀頼を誡めて曰く、「徳川太公は、義元の誼を失はずして、氏眞を納れ、信長の好を遺れずして、信雄を助けたり。先公、其の然るを知る。故に終に臨んで孤を託す。君務めて其の驩心を失はざれ。則ち以て長久なる可し。不らざれば則ち禍將に測られざらんとす」と。秀頼頗る悟る。而して群臣悦ばず。且元、數、關東に使用するを以て、其の私有るを意ひ、稍之を猜防す。

通釋 この時に當り、豊臣秀頼は、既に成長し、その家來の大野治長等は、兵を擧げて、昔、盛んであつた太閤の業を回復しようとして謀つた。治長は、容姿が立派であつた。そして淀君と密通して居た。依つて、其の言ふところは、聽かれぬことが無かつた。淀君の叔父、織田長益と相談し、手紙を前田利家に贈つて曰ふのに「先君の御遺言が有ります。何故、貴方は來て、嗣君の秀頼を輔けぬのか。城內には鎧や兵器が十分備へてある。福島正則等の貯へた米穀は積んで數萬石に及んで居る。事ある場合の不足は無い」と。利長は、病氣だといつて之を斷り、其の手紙を駿府・江戸の兩府へ獻じた。五月、利長が死んだ。依つて其の子利光に命じて封を繼がせた。秀頼の守役、片桐且元は、平生、秀頼を誡めて曰ふには「徳川の御隠居は、義元の交誼を失はずして、氏眞を納れられた。又信長の好を忘れずして、信雄を助けられた。先君、秀吉公は、之を知つて居られました。それでこれから臨終の時には遺兒の貴方を託されたのであります。貴方は、精々其の機嫌を損ねぬやうに遊ばしませ。さうすれば末永く安泰でせう。さうでない、飛んだ禍を蒙りませう」と。餘程、秀頼も悟つて來た。然るに群臣等は何れも悦ばなかつた。度々、且元が關東へ使に往つたので、秘密な事でもありはしないかと思つて、段々、邪推し、果ては用心するやうになつて來た。

先是秀頼造方廣寺以繼先志至是畢功又鑄巨鐘乃使且元來告請慶之期以七月秀頼親往是歲高山友祥內藤如安等以奉蠻教下京師獄前將軍遣吏二名往與板倉勝重議放友祥等於海西流餘黨於是界浦有犯人二吏率卒往按之途經大阪有訛言曰且元候秀頼出導東吏取城秀頼懼不出二吏既按界浦遂之長崎訛言乃止將慶之其鐘銘觸忌諱類呪詛者上棟牌亦不如式林信勝僧天海等交言之前將軍怒乃馳使停其慶

訓讀 是より先、秀頼、方廣寺を造り、以て先志を繼ぐ。是に至つて功を畢ふ。又巨鐘を鑄る。乃ち且元をして來り告げしめて、之を慶せんことを請ふ。期するに七月、秀頼親ら往くを以てす。是の歳、高山友祥、内藤如安等、蠻教を奉ずるを以て、京師の獄に下す。前將軍、吏二名を遣はし、往いて板倉勝重と議せしめ、友祥等を海西に放ち、餘黨を流す。是に於て、界浦に犯人有り。二吏、卒を率ゐて往いて之を按ず。途に大阪を經。訛言有り。曰く「且元、秀頼の出づるを候ひ、東吏を導いて城を取らんとす」と。秀頼懼れて出でず。二吏、既に界浦を按じ、遂に長崎に之く。訛言乃ち止む。將に之を慶せんとなす。其の鐘銘、忌諱に觸れ、呪詛する者に類す。上棟牌も亦、式の如くならず。林信勝、僧天海等、交之を言ふ。前將軍怒り、乃ち使を馳せて其の慶を停む。

通釋 これより先、秀頼方廣寺を造り、父の志を繼いだ。此の時愈々落成した。又今度は大きな鐘を鑄た。

そして、且元を遣つて告げさせ、供養を營まうと請うた。期日を七月に定め、秀頼が親ら出かけることにした。この年、高山友祥・内藤如安等は、耶蘇教を信奉したので、京都の牢屋に下された。前將軍は、二名の役人を遣して、板倉勝重と相談させ、友祥等を外國に追放し、其の同類を遠流に處した。界浦に犯人が居た。二名の役人は、捕手を連れ、往つて取調べようとした。大阪を通つた、處それ間違つた風説が傳へられた。それは「且元は、秀頼の外出するを窺ひ、關東の役人を案内して、大阪城を乗取らうとして居る」と云ふのである。秀頼は恐れをなして、外出しなかつた。二吏は、界浦で取調べを終り、長崎へ往つた。風説はそこで其の儘止んで仕舞つた。聽て、鐘供養を營まうとした。鐘銘の文句が、前將軍の不興を買ひ、のろひの文句と見做された。又、棟札も式の如くなつて居らない。林信勝・僧天海等が、交々、意見を申し上げた。前將軍は、それをきいて怒り、そこで使を馳せて、其の供養を中止させた。

語釋 慶(御祝事で、鐘供養をいふ) ○蠻教(野蠻の宗教で、) ○海西(阿瑪港等の土) ○上棟牌(棟は屋背で家のむね)

八月、且元・治長等來謝。女使二人、又奉淀君命。至前將軍。召二女使。謂之曰。右府吾孫女婿。淀氏亦吾婦之姉。吾豈相負哉。吾視右府猶子。而右府視我猶仇讎。如聞大阪日招士繕甲。多峙糧餉。吾未知其何謂也。今吾在。猶如此。況後世乎。雖然。是非出於右府母子。蓋爲姦人所註誤焉。爾苟悛非輸誠。則國家無事矣。不復問銘詞。二女

大喜遂趣江戶候夫人氏

訓讀 八月、且元・治長等來り謝す。女使二人、又淀君の命を奉じて至る。前將軍、二女使を召して、之に謂つて曰く「右府は吾が孫女の婿なり。淀氏も亦吾が婦の姉なり。吾れ豈に相負かんや。吾れ右府を視ること猶子の如し。而して右府の我を視ること猶仇讎のごとし。聞くが如くば、大阪、日に士を招き甲を繕め、多く糧餉を時むと。吾れ未だ其の何の謂たるかを知らざるなり。今吾れ在るに、猶此の如し。況や後世をや。然りと雖も是れ右府母子より出するに非ず。蓋し姦人の註誤する所と爲るのみ。苟も非を倭め誠を輸さば、則ち國家無事なり。復銘詞を問はず」と。二女、大に喜び、遂に江戶に趣き、夫人氏を候ふ。

通釋 八月、且元・治長等が來て、御詫をした。二人の女の使も、淀君の命を奉じて來た。前將軍は、二女使を召し寄せ、之に謂つて曰ふには「右大臣は、吾が孫娘の婿であり。淀君は吾が嫁の姉である。何うして自分は、之に負かれよう。自分は右府を視ること、息子も同様である。それなのに右府は我を視ること、仇敵も同然である。聞く所に據れば、大阪では、日毎に、鎧を繕ひ、多くの兵糧を用意するさうだ。吾はそれが何の爲めであるかを知らない。吾が生きて居る中でさへ、此の通りである。まして、吾が亡き後は思ひ遣られる。しかし、是れは右大臣親子の心中から出たものではあるまい。大方惡者共に欺かれたのであらう。惡い量見を改め、誠を盡くしたならば、國家は無事であらう。鐘銘の文句などは、改めて問題にするには及ばない」と。二女使は大に喜び、江戶へ赴いて、奥方の御機嫌伺ひをした。

語釋 女使二人(淀君の乳母大藤と正榮尼) ○銘詞(問題と爲つた鐘の銘で、國家安康の文句をいふ) ○夫人氏(將軍の夫人) 淺井氏

九月、使本多正純・僧天海責且元、以輸誠之實。且元請其旨、不答。且元乃與二女偕辭去。行、思之、得三策。曰「納淀君爲質。曰「使秀頼居江戶。曰「避大阪徙他。因密啓曰「質母於德川氏者、先公所嘗爲也。是爲上策。或譖且元賣君。淀君大恚、與群臣決議、誅且元。擧兵。且元奔其邑茨木。遠近騷然。板倉勝重飛書來報。十月朔、報至駿府。前將軍方與諸子觀散樂。得報曰「孺子終不悟也。不得不除之。乃撤樂、使報之江戶。是春、課東諸侯、城于高田。是秋、課西諸侯、修江戶城。於是、皆罷就國、以備大阪。

訓讀 九月、本多正純・僧天海をして、且元を責むるに、誠を輸すの實を以てせしむ。且元、其の旨を請ふ。答へず。且元乃ち二女と偕に辭して去る。行く／＼之を思ひ、三策を得たり。曰く「淀君を納れて質と爲さん」曰く「秀頼をして江戶に居らしめん」曰く「大阪を避けて他に徙らん」と。因つて密に啓して曰く「母を德川氏に質とするは、先公の嘗て爲す所なり。是を上策と爲す」と。或ひと、且元は君を賣ると譖す。淀君、大に恚り、群臣と議を決して、且元を誅して兵を擧げんとす。且元、其の邑茨木に奔る。遠近、騷然たり。板倉勝重、書を飛ばして來り報ず。十月朔、報、駿府に至る。前將軍、方に諸子と散樂を觀る。報を得て曰く「孺子終に悟らず。之を除かざるを得ず」と。乃ち樂を撤し、之を江戶に報せしむ。是の春、東の諸侯に課して、高田に城き、是の秋、西の諸侯に課して、江戶城を修む。是に於て、皆罷めて國に就き、以て大阪に備ふ。

通釋 七月、本多正純・僧天海をして、且元を責めさせ「異心を抱かず、誠を盡すの實證を擧げよ」といはしめた。且元は「如何なる思召か承りたい」といつた。返答をしなかつた。そこで、且元は、二女と一所に暇乞を告げて、辭し去つた。そして、行く行く途中で、思案して、三策を考へ出した。曰く「淀君を差し出して人質とする」曰く「秀頼を江戸に居らせる」曰く「大阪を避けて他處へ徙る」と。因つて、密に申し上げて「母を徳川氏に人質とすることは、先君、秀吉公も、かつて爲された所である。是が上策である」といつた。すると、或る人が、且元は主君を賣る者であると讒言した。淀君は大に怒り、群臣と決議し、且元を誅して、兵を擧げよとした。且元は之を聞いて、其の領員茨木に出奔した。遠近は甚だしく騒がしかつた。板倉勝重は急ぎの手紙を寄越して報じて來た。十月一日、其の報知が、駿府に到着した。前將軍はその時丁度子息等と共に、能を見物して居た。其の報を聞いて曰ふのに「小僧奴、何うしても悟らない。それなら、除かねばならぬ」と。そこで能樂を中止し、江戸へ報らせて遣つた。この年の春、東國の諸侯に割りあて、高田に城を築き、又、秋には、西國の大小名に割りあて、江戸城を修理させた。そこで皆罷めさせて國へ歸し、大阪に對する備へをさせた。

語釋 或謂(二女使が讒) ○賣(君秀頼を關東に賣りつ) ○撤樂(樂を中止する。見て居た能樂を途中でもやめさせる。)

秀頼亦益、散金募兵。關原餘黨、若諸藩亡命者、四集大阪。號稱十萬人。四出抄掠、以貯軍須。東府穀五萬石、在其城下。板倉勝重使人謂大野治長曰「聞之道路。諸公將有旗鼓之事。不腆弊邑之穀、敢犒從者。治長辭不敢取。勝重乃使賈人漕送京師。不

勞一兵。伏見留守松平定勝、井伊直孝、與勝重議遣謀大阪。悉知消息。輒報之東府。置關於淀葛葉、以檢兵士往來。尼崎城主建部某、關原降將也。與池田氏有姻。前將軍命池田利隆、遣其戚屬下間重景、將兵援守。片桐且元已納降於我。將自茨木赴界浦。與大阪兵戰。尼崎下、求救於重景。重景疑其僞、不肯救。且元敗走。

訓讀 秀頼も亦、益々金を散じて兵を募る。關原の餘黨、若しくは諸藩亡命の者、大阪に四集す。號して十萬人と稱す。四出して抄掠し、以て軍須を貯ふ。東府の穀五萬石、其の城下に在り。板倉勝重、人をして大野治長に謂はしめて曰く「之を道路に聞く。諸公、將に旗鼓の事有らんとすと。不腆の弊邑の穀、敢て從者を犒はん」と。治長、辭して敢て取らず。勝重乃ち賈人をして京師に漕送せしめて、一兵を勞せず。伏見の留守松平定勝、井伊直孝・勝重と議して、謀を大阪に遣はし、悉く消息を知り、輒ち之を東府に報す。關を淀・葛葉に置き、以て兵士の往來を檢す。尼崎城主建部某は關原の降將なり。池田氏と姻有り。前將軍、池田利隆に命じ、其の戚屬下間重景を遣はし、兵を將ひて援け守らしむ。片桐且元、已に降を我に納れ、將に茨木より界浦に赴かんとす。大阪の兵と尼崎の下に戦つて、救を重景に求む。重景、其の僞ならんを疑ひ、肯て救はず。且元、敗走す。

通釋 秀頼も亦益々金を散じて、兵士を募集した。すると、關東の殘黨や、諸藩の亡命者等が、四方から大阪へ集まつた。號して十萬人と稱した。四方に出で、分捕等して、軍用品を貯へた。徳川家所領の米穀五萬石が、大阪の城下にあつた。板倉勝重は人を遣つて大野治長にいはせて曰ふには「世間の風説にかう云ふことを聞い

た。諸公は、戦争でも始められるやうな噂がある。粗末なる米穀なれど、御件になりと振舞申さう」と。治長は
 辭退して、取らうとしなかつた。そこで、勝重は商人に命じて、其の米を京都に舟で送らせ、一兵をも勞せず
 に、移して仕舞つた。伏見の留守役、松平定勝・井伊直孝は勝重と相談して、大阪へ間者を遣し、詳しく様子を
 知つて、之を江戸へ報じた。關所を淀・葛葉に置き、往來する兵士を取調べた。尼崎の城主建部某は、關原の降
 將である。池田氏とは姻戚であつた。前將軍は池田利隆に命じ、其の親族の下間重景を遣はし、兵を率ゐて、援
 け守らせた。既にして、片桐且元は、我が方に降參し、茨木から界浦へ往かうとした。すると、大阪の兵と尼崎
 の城下で戦ひ、救を重景に求めた。重景は此を偽りなるかと疑つて、救ふことを承知しなかつた。すると、且元
 は敗走した。

語釋 葛葉(河)

大阪兵始合而捷、氣倍、壯。大議守備、其城故秀吉所築、窮天下力、塹壘壯固無匹。西
 北帶水、東南多池澤。於是益設斬寨、置守兵、遂發間使招諸侯。伊達政宗遇之、小山
 縛送、江戶。島津家久卻其幣、馳告駿府、且請師期。淺野但馬守國富兵強、而與大阪
 相爲腹背。議者以爲大患。已而大阪果數遣使誘其君臣以利。但馬守答曰、「我父兄
 所以報故太閤足矣。吾於東府、恩誼非輕。今無故倍之以黨亂人、不義孰大焉。」使者

猶來、百計勸說。但馬守乃欲斬其使、懼而止。

訓讀 大阪の兵、始合にして捷ち、氣倍、壯なり。大に守備を議す。其の城は故秀吉の築く所にして、天下の
 力を窮む。塹壘の壯固なること匹無し。西北に水を帶び、東南に池澤多し。是に於て、益々斬寨を設けて、守兵
 を置き、遂に間使を發して諸侯を招く。伊達政宗は之に小山に遇ひ、縛して江戶に送る。島津家久は其の幣を卻
 け、馳せて駿府に告げ、且つ師の期を請ふ。淺野但馬守は國富み兵強し。而して大阪と腹背を相爲す。議者以て
 大患と爲す。已にして、大阪、果して數々使を遣はし、其の君臣を誘ふに利を以てす。但馬守答へて曰く、「我が父
 兄の故太閤に報ぜし所以は是に足る。吾の東府に於ける、恩誼輕きにあらす。今故無くして之に倍き、以て亂人に黨
 するは、不義孰か大ならん」と。使者猶來り、百計勸め説く。但馬守乃ち其の使を斬らんと欲す。懼れて止む。
 通釋 大阪方の兵は、初手合せの戦で捷つたから、一層、氣が強くなつた。それで大に守備を議した。其の城
 は、もと秀吉が築いて天下の力を窮めて出來たものである。其の濠も壘も、立派で、丈夫なことは比類が無い。
 西北には水を帶び、東南には池や沼が多い。そこで、益々濠や壘を設けて、守兵を置き、間者の使を發して諸侯
 を招かせた。伊達政宗は、その使者に小山で出合ひ、之を縛つて江戶へ押送した。島津家久は、其の禮物を突き
 返し、馳せて駿府に告げ、出陣の期日を尋ねた。淺野但馬守は、其の領國は富み、兵は強い。そして、位置から
 いへば、大阪に近く、裏表の關係に在る。それで敵も味方も齊しく頭痛の種であつた。案の如く大阪方は、度々使
 を遣はし、大利を以て其の君臣を誘つた。但馬守が答へて曰ふには「我が父兄が故太閤に報いた所は、既に十分
 の恩義を盡して居る。自分が江戶から受けた恩惠交誼は、決して輕いとは云はれない。今、何等の理由も無く、

之に叛いて、亂黨に味方するのは、此の上もない不義である」と。すると、使者は、其の後も来て、色々、手段を盡くして、勸説した。但馬守はそこで其の使者を斬らうとした。これに懼れて其後は来なくなつた。

語釋 淺野但馬守(名は長) ○相(爲腹背) (地は、互に近いかから、表と裏のやうな關係になる。即ち大阪と若山との土) ○我父兄(長政・幸長)

前將軍得諸報告、乃下軍令曰「伊勢・近江・美濃・尾張・越前等、兵急扼淀勢多、大和、兵自守其地、北陸諸國、兵陣大津・坂本、中國、兵陣池田、南海、西海、兵泊和泉、海濱、竝、大軍、勿輕戰。」東海・東山、將帥皆隸前將軍。關八州及陸奥・出羽、將帥皆隸將軍。而世子家光與少將忠輝及酒井重忠、其弟忠利等、居守江戶。蒲生最上氏以下隸之。賴房與其傳中山信吉、留守駿府。義直與其傳成瀨正成、賴宣與其傳安藤直次、皆從軍。義直初爲右兵衛督。賴宣爲常陸介。竝叙從四位下。後竝進從三位。任參議兼右近衛中將。賴房初爲左衛門督。後叙從四位下。任右近衛少將。於是分賜白旗於義直、賴宣。諸嘗受豐臣氏特恩者、不許從。

訓讀 前將軍、諸々の報告を得て、乃ち軍令を下して曰く「伊勢・近江・美濃・尾張・越前等の兵は、急に淀勢多を扼し、大和の兵は、自ら其の地を守り、北陸諸國の兵は、大津・坂本に陣し、中國の兵は、池田に陣し、南海・西海の兵は、和泉の海濱に泊して、竝に大軍を俟ち、輕々しく戰ふ勿れ」と。東海、東山の將帥は、皆前將軍に隸す。關八州及び陸奥・出羽の將帥は、皆將軍に隸す。而して世子家光は、少將忠輝、及び酒井重忠、其の弟忠利等と、江戶を居守す。蒲生・最上氏以下、之に隸す。賴房は其の傳中山信吉と、駿府に留守す。義直は其の傳成瀨正成と、賴宣は其の傳安藤直次と、皆軍に從ふ。義直は初め右兵衛督たり。賴宣は常陸介たり。竝に從四位下に叙す。後に竝に從三位に進み、參議に任じ、右近衛中將を兼ね、賴房は初め左衛門督たり。後に從四位下に叙し、右近衛少將に任ず。是に於て、白旗を義直・賴宣に分賜す。諸々の嘗て豐臣氏の特恩を受けし者は、從ふを許さず。

通釋 前將軍は、さまざまの報告を得た後、そこで軍令を下して曰ふには「伊勢・近江・美濃・尾張・越前等の兵は、急に淀勢多の路をくひ止め、大和の兵は自ら其の地を守り、北陸諸國の兵は大津・坂本に陣し、中國の兵は池田に陣し、南海・西海兩道の兵は和泉の海濱に船を止め、共に大軍の到るを待つて居り、輕々しく戰つてはならぬ」と。東海、東山の將帥は、皆、前將軍に付き従つた。關東八州及び陸奥・出羽の將帥は、何れも將軍の麾下に在つた。そして、世子家光は、少將忠輝及び酒井重忠、其の弟忠利等と共に江戶城に留守した。蒲生・最上以下之に付き従つた。賴房は、其の傳中山信吉と共に、駿府に留守した。義直は其の傳成瀨正成と、賴宣は其の傳安藤直次と共に、皆、從軍した。初め義直は、右近衛督であり、賴宣は常陸介であつて、竝に從四位下に叙した。後には何れも從五位に進み、參議に任じ、右近衛中將を兼ねた。賴房は、初め左兵衛督であつた。後に從四位下に叙し、右近衛少將に任じた。そこで、白旗を義直・賴宣に分ち賜つた。諸々の嘗て豐臣家から特

從ふを許さず。

別恩顧を受けたものは、從軍することを許さなかつた。

十一日、前將軍以數百騎發駿府。大阪發刺客入京師、欲狙駕且焚二條城。板倉勝重覺之、盡捕下獄。二十二日、駕至京師。傳奏司傳勅勞問。少將忠直以二萬人、前田利常以三萬人、皆會焉。居三日、召諸將、開大阪圖議戰。曰、「西南兵未至、宜以先鋒挑戰。」井伊直孝、藤堂高虎爲先鋒。松平忠明、本多忠政繼之。忠明、奧平信昌少子。以外孫故、賜氏封龜山。是歲、其兄忠正卒。代領其衆、統美濃將士。於是先鋒自南面進、以北面難濟、令伊奈忠政壅淀川于長柄、壅大和川于鳥飼、尋使毛利・福島氏助之。

訓讀 十一日、前將軍、數百騎を以て駿府を發す。大阪、刺客を發して京師に入り、駕を狙ひ、且つ二條城を焚かんと欲す。板倉勝重、之を覺り、盡く捕へて獄に下す。二十二日、駕京師に至る。傳奏司、勅を傳へて勞問す。少將忠直は二萬人を以て、前田利常は三萬人を以て、皆會す。居ること三日、諸將を召し、大阪の圖を開いて、戰を議す。曰く「西南の兵未だ至らず。宜しく先鋒を以て戰を挑むべし」と。井伊直孝、藤堂高虎・先鋒たり。松平忠明・本多忠政、之に繼ぐ。忠明は、奧平信昌の少子なり。外孫の故を以て氏を賜うて、龜山に封ず。是の歲、其の兄忠正、卒す。代つて其の衆を領し、美濃の將士を統ぶ。是に於て、先鋒は南面より進み、北

面は濟り難きを以て、伊奈忠政をして、淀川を長柄に壅ぎ、大和川を鳥飼に壅がしめ、尋いで毛利・福島氏をして之を助けしむ。

通釋 十一月、前將軍は、數百騎を從へて、駿河を出發した。すると、大阪方では刺客を遣はして京都に入り込ませ、駕を狙つて、刺し殺し、且つ二條城を焚かうとした。板倉勝重は、之を覺つて、盡く捕縛して、獄に下した。二十二日、駕は、京都に到着した。傳奏司は、勅命を傳へて慰勞に來た。少將忠直は二萬人を以て、前田利常は三萬人を以て、皆來り會した。總て、三日の後には、諸將を召し、大阪の地圖を開いて、戰略を謀議した。「西南諸國の兵は、未だ來て居ないから、先鋒を以て戰を挑むが良い」といふことになつた。井伊直孝・藤堂高虎は先鋒となり、松平忠明・本多忠政が之に繼いだ。忠明は、奧平信昌の少子である。前將軍の外孫だから、松平の氏を賜はつて、龜山に封ぜられた。この年、其の兄、忠正が死んだ。後に代つて其の部下を預り、美濃の將士を支配した。そこで、先鋒は南面から進み、北面には渡りにくい川があるので、伊奈忠政を遣つて、淀川を長柄で、大和川を鳥飼で堰止めさせ、毛利・福島島の兩氏をして、之が手傳をさせた。

十一月、高虎至大仙陵。時城將薄田兼相山口弘定掠平野。望之而走。城將大野道見焚天王寺、以撓我軍。高虎不動。終與直孝進陣住吉。城將堀氏弘掠界浦。聞之而走。過高虎軍前。前部渡部了慮其有伏、不敢擊。淺野但馬守將兵發紀伊、行擊土兵。應大阪者來與高虎議事、還陣大鳥池。田利隆與二弟忠繼、忠雄、至神崎川。城昌茂

奉命監其軍。二弟亂下流。利隆涉上流。進至長柄川。城將織田長益等以萬人守天滿中島。利隆欲濟。昌茂止之。其夜二弟復渡下流。逐守兵。以取中島。將軍以前將軍入京師之日。發江戶兼程而進。十日至伏見。其明詣二條議事。

訓讀 十一月、高虎、大仙陵に至る。時に城將薄田兼相・山口弘定、平野を掠む。之を望んで走る。城將大野道見、天王寺を焚き、以て我が軍を撓す。高虎動かす。終に直孝と進んで住吉に陣す。城將堀氏弘、界浦を掠む。之を聞いて走り、高虎の軍前を過ぐ。前部渡部了、其の伏有るを慮り、敢て撃たず。淺野但馬守、兵を將ゐて紀伊を發し、行と士兵の大阪に應ずる者を撃ち、來つて高虎と事を議し、還つて大島に陣す。池田利隆、二弟忠繼・忠雄と、神崎川に至る。城昌茂、命を奉じて其の軍を監す。二弟は下流を亂り、利隆は上流を涉り、進んで長柄川に至る。城將織田長益等、萬人を以て天滿、中島を守る。利隆、濟らんと欲す。昌茂、之を止む。其の夜、二弟復下流を渡り、守兵を逐ひ、以て中島を取る。將軍は、前將軍の京師に入るの日を以て江戶を發す。程を兼ねて進み、十日、伏見に至る。其の明二條に詣つて事を議す。

通釋 十一月、高虎は大仙陵に至つた。その時、城將薄田兼相、山口弘定が平野を掠めた。然も之を望んで逃げた。城將大野道見は、天王寺を焚き、我が軍を亂さうとした。高虎は動かかない。終に直孝と共に進んで、住吉に陣取つた。城將堀氏弘は、界浦を掠めて居た。之を聞いて逃げ出し、高虎の陣の前を通つた。前隊の渡部了は、敵の伏兵を氣遣つて、撃たうとしなかつた。淺野但馬守は、兵を率ゐて、紀伊を出發し、途すがら、大阪方に味方した士兵を討ち破り、來つて高虎と打合せを遂げ、還つて大島に陣した。池田利隆は、二弟忠繼・忠雄と共に、神崎川に至つた。城昌茂は、仰を受けて其の軍の目付をした。やがて、二弟は下流、利隆は上流を涉つて進み、長柄川へ到着した。城將織田長益は、一萬の兵を以て、天滿・中島を守つて居た。利隆は川を渡つて撃たうとした。けれども昌茂は之を止めた。其の夜、二弟は再び下流を渡つて、守兵を追ひ拂ひ、中島を占領した。將軍は、前將軍が京都に到着した日に、江戶を出發した。晝夜兼行して、十日に伏見へ到着した。翌日、二條城に至つて軍事を評議した。

語釋 大仙陵(和泉國、俗に仁徳天皇の御陵といふ) ○平野(津攝)

十七日、前將軍陣住吉、將軍陣平野、義直賴宣陣住吉、北少將忠直前田利光陣岡山、井伊直孝藤堂高虎陣天王寺、上杉佐竹相馬秋田堀尾京極諸將陣平野、西伊達金森諸將陣今宮、淺野蜂須賀鍋島諸將陣今宮、北池田加藤山内森有馬諸將陣中島、九鬼向井諸將以兵艦泊傳法口、兵總五十萬人、環城四面、不遺尺地。前將軍度城中必悔、使人議和、不肯。

訓讀 十七日、前將軍は住吉に陣し、將軍は平野に陣し、義直・賴宣は住吉の北に陣し、少將忠直・前田利光は岡山に陣し、井伊直孝・藤堂高虎は天王寺に陣し、上杉・佐竹・相馬・秋田・堀尾・京極の諸將は平野の西に

陣し、伊達、金森の諸將は今宮に陣し、淺野・蜂須賀・鍋島の諸將は今宮の北に陣し、池田・加藤・山内・森・有馬の諸將は中島に陣し、九鬼・向井の諸將は兵艦を以て傳法口に泊す。兵總べて五十萬人。城の四面を環つて、尺地を遺さず。前將軍、城中必ず悔ゆるを度り、人をして和を議せしむ。肯ぜず。

十七日、前將軍は住吉に陣し、將軍は平野に陣した。義直・頼宣は住吉の北に、少將忠直・前田利光は岡山に、井伊直孝・藤堂高虎は天王寺に、上杉・佐竹・相馬・秋田・堀尾・京極の諸將は平野の西に、伊達・金森の諸將は今宮に、淺野・蜂須賀・鍋島の諸將は今宮の北に、池田・加藤・山内・森・有馬の諸將は中島に陣を構へ、九鬼・向井の諸將は兵艦を以て傳法口に碇泊した。其の兵數は、總計五十萬人と稱せられた。城の四面を取圍んで、一尺の土地さへ殘さなかつた。前將軍は、城中では必ず後悔するだらうと思ひ、人を遣つて、和議を勧めた。が、然し承知しなかつた。

傳法口(大阪城)の西

已而住吉邏騎、夜捕一卒。曰、欲適藤堂陣、誤至此也。檢其懷、得秀頼書、書曰、二魁深入我地。子計中矣。宜速令東國歸款、諸將斷其歸路。事成則加封如約。前將軍覽書、晒曰、彼欲離間我。謀何淺也。召高虎賜書及卒。高虎訊得其實。乃斷其手足、指、黥、額。曰、秀頼縱歸之。城兵又誘池田利隆。曰、事成封以備前播磨美作。利隆縛使者獻之。

兩將軍終議進取。阿部正之・安藤直次・永井直勝・小栗忠正等數十人爲巡使。大須賀氏部下、久世廣宣・坂部廣勝、獲罪出亡。以老兵事被收錄。是役皆爲巡使傳令諸軍進退操縱、莫不如意。

已にして住吉の邏騎、夜、一卒を捕ふ。曰く「藤堂の陣に適かんと欲し、誤つて此に至るなり」と。其の懷を檢して、秀頼の書を得たり。書に曰く「二魁深く我が地に入る。子の計中れり。宜しく速に東國に款を歸る諸將をして其の歸路を斷たしむべし。事成らば則ち封を加ふること約の如くせん」と。前將軍、書を覽て、晒つて曰く、「彼れ我を離間せんと欲す。謀何ぞ淺き」と。高虎を召して、書及び卒を賜ふ。高虎、訊して其の實を得たり。乃ち其の手足の指を斷ち、額に黥して秀頼と曰ふ。縦して之を歸す。城兵又池田利隆を誘つて曰く「事成らば、封するに備前・播磨・美作を以てせん」と。利隆、使者を縛して之を獻す。兩將軍、終に進み取らんと議す。阿部正之・安藤直次・永井直勝・小栗忠正等數十人、巡使たり。大須賀氏の部下、久世廣宣・坂部廣勝、罪を獲て出亡す。兵事に老ゆるを以て收録せらる。是の役に、皆巡使と爲つて、令を諸軍に傳ふ。進退操縦、意の如くならざるは莫し。

既にして、住吉の見巡りの騎兵が、一人の足輕を捕縛した。その者が曰ふのに「藤堂の陣へ往かうとし、道を間違へて、こゝへ來た」と。其の懷を檢べると秀頼の手紙が出た。其の文面には「敵の二頭領は深く我が地に攻め込んで來た。貴公の計略は申つた。依つて、速に東國に在つて内通する諸將をして、其の歸路を絶ち

切らせるがよい。豫想通り成功すれば、約束通りに領地を加増して遣らう」とあつた。前將軍は、讀み終へて、笑ひながら曰ふのに「彼は我が味方に仲間われさせようとするのである。謀の淺墓なこと、實に見え透いて居る」と。高虎を召して手紙と足輕を引き渡した。すると高虎は、吟味して白状させた。手足の指を切り落し、額に秀頼の二文字を入墨し、縦して歸して遣つた。城兵は、又池田利隆を誘うて曰ふのに「成功すれば備前・播磨・美作の三國に封じよう」と。利隆は其の使者を捕縛して差出した。兩將軍は、終に進撃を議した。阿部正之・永井直勝・小栗忠正等の、數十人が巡使となつた。大須賀氏の部下、久世廣宣・坂部廣勝は罪を獲て出奔して居た。兵事に老練だといふので、取り立てられた。是の役には何れも巡使となり、令を諸軍に傳へた。進退駆引、思ふやうにならぬものは一つもなかつた。

話釋 二魁(前將軍及
び將軍)

蜂須賀至鎮攻取穢多崎、九鬼守隆向井忠勝、以水軍奪敵候船數十艘。上杉景勝攻鷓野、佐竹義宣攻今福、皆破其柵。城兵分道出拒船載銃手、出其中間、力戰交綏。已而城兵以柵難守、棄之而退。將軍令片桐且元代、入屯備前島、以其最近城、屬以礮手。諸將將攻博勞淵、二寨。北寨下有洲、生蘆葦、皆以銃卒守之。我軍欲先取蘆洲、洲不容多兵、兵寡者、又不可守。石川忠總、實大久保忠鄰子也。欲以功贖父、乃請以

手兵往、得舟二隻、以槍爲棹、而濟。敵守洲者、皆走上寨、發銃。忠總仰攻連晝夜。九鬼氏給舟數十、助之、拔北寨。又得蜂須賀氏援兵、遂拔南寨、進取土佐港、阿波坐港、還效首虜。前將軍曰、「不愧忠世之孫矣。」

訓讀 蜂須賀至鎮、攻めて穢多崎を取り、九鬼守隆、向井忠勝、水軍を以て、敵の候船數十艘を奪ふ。上杉景勝は鷓野を攻め、佐竹義宣は今福を攻め、皆其の柵を破る。城兵、道を分つて出で拒ぐ。船に銃手を載せて、其の中間に出で、力戦して交綏す。已にして城兵、柵の守り難きを以て、之を棄て、退く。將軍、片桐且元をして代り、入つて備前島に屯せしむ。其の最も城に近きを以て、屬するに礮手を以てす。諸將、將に博勞淵の二寨を攻めんとす。北寨の下に洲有り。蘆葦を生ず。皆銃卒を以て之を守る。我が軍先づ蘆洲を取らんと欲す。洲は多くの兵を容れず。兵寡き者は、又守る可からず。石川忠總は、實は大久保忠隣の子なり。功を以て父を贖はんと欲す。乃ち請うて手兵を以て往く。舟二隻を得たり。槍を以て棹と爲して濟る。敵の洲を守る者、皆走つて寨に上り、銃を發す。忠總、仰ぎ攻むること晝夜を連ぬ。九鬼氏、舟數十を給して之を助けて、北寨を抜く。又蜂須賀氏の援兵を得て、遂に南寨を抜き、進んで土佐港・阿波坐港を取り、還つて首虜を效す。前將軍曰く「忠世の孫たるに愧ぢず」と。

通釋 蜂須賀至鎮は、穢多崎を攻め取り、九鬼守隆・向井忠勝は、水軍を率ゐ、敵の物見の船數十艘を奪ひ取つた。上杉景勝は鷓野を攻め、佐竹義宣は今福を攻めて、皆、其の柵を破つた。そこで、城兵は道を分つて出で

拒いだ。舟に鐵砲組を載せて其の中間に出で、力戦した後、相引にした。城兵は柵を守ることが困難だと知つたので、之を棄て、退いた。將軍は、片桐且元をして、代つて備前島に屯せしめた。一番、城に近いといふので、大砲組を其の下に屬せしめた。諸將は葦島・博勢洲、二個處の寨を攻めようとした。北寨の下には洲があつた。蘆や葦が生えて居た。皆、鐵砲組を以て之を守つて居た、我が軍は、先づ蘆の生えて居る洲を取らうと思つた。洲は狭くて多くの兵を容れることが出来ない。さりとて兵士が少ければ、守ることが出来ない。石川忠總は實は久保忠隣の子である。功を立て、父の罪を贖はうと思つた。乃ち請うて、手勢を率ゐて出かけた。二艘の船を手に入れた。槍を棹に代用して渡ると、洲を守つて居た敵は、皆逃げ、寨に上つて、鐵砲を打ち出した。忠總は仰ぎ攻めて晝夜つゞけさまに打ち放つた。九鬼氏は數十艘の船を給與して之を助けたので、遂に北寨を攻め落した。又蜂須賀氏の援兵を得て、南寨をも攻め落し、進んで、土佐港・阿波坐港を占領し、還つて、首や生捕を差出した。すると、前將軍は之を見、賞めて曰ふのに「忠世の孫たるに愧ぢない、天晴れ、天晴れ」と。

於是諸將爭進。池田忠繼臨蜆川。而陣部將花房職之、望野田・福島、二寨曰「旗植而無烟。是已逃也。」使人伺之。不見一人。乃濟中島。諸將欲繼濟。城昌茂止之曰「太公命我護軍、戒其持重。公等違我言、乃違太公言也。」諸將乃止。已而中軍傳令責諸將逗留。諸將答以昌茂。前將軍召昌茂、使林信勝讀孫武傳。至將在軍君命有所不受、乃

顧昌茂曰「汝拘我命、見機不進、何也。」因逐之。令諸將進入福島。淺野氏以船兵至海口、爲其聲援。

訓讀 是に於て、諸將爭ひ進む。池田忠繼は蜆川に臨んで陣す。部將花房職之、野田・福島の二寨を望んで曰く「旗植つて烟無し。是れ已に逃ぐるなり」と。人をして之を伺はしむ。一人を見ず。乃ち濟る。中島の諸將、繼いで濟らんと欲す。城昌茂、之を止めて曰く、「太公、我に命じて軍を護り、其の持重を戒む。公等、我が言に違ふは、乃ち太公の言に違ふなり」と。諸將乃ち止む。已にして中軍、令を傳へて、諸將の逗留を責む。諸將答ふるに昌茂を以てす。前將軍、昌茂を召し、林信勝をして孫武の傳を讀ましむ。將の軍に在るや君命も受けざる所有りといふに至つて、乃ち昌茂を顧みて曰く「汝、我が命に拘り、機を見て進まざるは、何ぞや」と。因つて之を逐ひ、諸將に令し、進んで福島に入らしむ。淺野氏、船兵を以て海口に至り、其の聲援を爲す。

通釋 こと、に於て、諸將は争ひ進んだ。池田忠繼は、蜆川に臨んで陣取つた。其の部將、花房職之は、野田・福島の二寨に望み見て曰ふのに「旗は立つて居るが、煙は見えない。これは既に逃げ去つたのである」と。人を遣つて、之を伺はせた。一人も居なかつたので、川を渡つた。中島の諸將も續いで渡らうとした。城昌茂が、之を止めて曰ふには「御隠居家康公は、我に命じて軍を監督せしめ、持重して輕々しく進んではならぬと注意された。若し貴公が我が言に背くなら、取りも直さず御隠居の言葉に背くのである」と。そこで諸將は止めた。既に本陣から令を傳へて、諸將が逗留して進まぬことを責めた。すると、諸將は、昌茂が斯くくと言つた旨答へた。そこで、前將軍は昌茂を召し、林信勝をして孫武列傳を讀ませた。「將の軍に在るや、君命も受けざる」と

ころあり」といふ處へ來ると、昌茂を顧みて曰ふのに「貴様は、我が命令に拘泥し、好機を見ながら進まなかつたのは、何としたことぢや」と。因つて之を追放し、諸將をして進んで福島に入らせた。淺野氏は、軍兵を船に載せ、港口へ來て聲援したのである。

語釋 野田・福島(城の西) ○孫武傳(史記の孫武列傳をいふ。孫武は齊の人で、) ○將在軍云々(君命を帯びて大將が戰場に臨んだ以上は、君の命令でも時には従はぬこの兵法書中の言葉。孫子)

阿部正之白曰「西北諸砦相踵陥没。川場・天満、二寨、脆薄背水。必遁。其夜果焚寨而退。城將大野治房守道頓港。亦驚走入城。蜂須賀氏兵追獲其旗幕。十二月、忠總・忠繼、與淺野鍋島九鬼諸將進入川場。利隆等進入天満。東南諸將亦進逼城。伊達政宗至川場。井伊直孝・藤堂高虎至生玉。臨空壕而陣。城兵燒外城諸橋。獨存淡路・本街・高麗三橋。石川忠總與城兵戰于高麗橋。欲使敵不得燒。諸巡使請救之。前將軍叱曰「止矣。我軍欲登城。何恃橋哉。彼自斷出路耳。令忠總退舍。遂令諸將曰「設垣列牌。俟令而進。勿妄鬪以損一卒。又以天寒增糧食。」

訓讀 阿部正之、白して曰く「西北の諸砦、相踵いで陥没す。川場・天満の二寨は、脆薄にして水を背にす。

必ず遁れん」と。其の夜、果して寨を焚いて退く。城將大野治房、道頓港を守る。亦驚き走つて城に入る。蜂須賀氏の兵、日うて其の旗幕を獲たり。十二月、忠總・忠繼、淺野・鍋島・九鬼の諸將と、進んで川場に入る。利隆等進んで天満に入る。東南の諸將も亦、進んで城に逼る。伊達政宗は川場に至り、井伊直孝・藤堂高虎は生玉に至り、空壕に臨んで陣す。城兵、外城の諸橋を燒き、獨り淡路・本街・高麗の三橋を存す。石川忠總、城兵と高麗橋に戦ひ、敵をして燒くを得ざらしめんと欲す。諸巡使、之を救はんと請ふ。前將軍、叱して曰く「止めよ。我が軍の城に登らんと欲するに、何ぞ橋を恃まんや。彼れ自ら出路を斷つのみ」と。忠總をして退いて舍せしむ。遂に諸將に令して曰く「垣を設け牌を列ね、令を俟つて進み、妄に鬪ひ、以て一卒をも損する勿れ」と。又天寒きを以て糧食を増す。

通釋 阿部正之が、申し上げて曰ふのに「西北の諸砦は、相踵いで陥落しました。川場・天満の二寨は、元來要害堅固でなく、水を背にして居ます。必ず、逃げ出させよう」と。すると、其の夜、果して、寨を燒いて退いた。城將大野治房は、道頓港を守つて居た。これも亦た驚き走つて、城へ這入つた。蜂須賀氏の兵は、之を追ひかけて、其の旗や陣幕を分捕つた。十二月、忠總・忠繼は、淺野・鍋島・九鬼の諸將と共に、進んで川場に入つた。利隆等は進んで、天満に入つた。東南の諸將も、亦た進んで、城に逼つた。伊達政宗は川場に至り、井伊直孝・藤堂高虎は生玉に至り、空壕の近くに陣取つた。城兵は、外城の諸橋を燒き落し、ひとり、淡路・本街・高麗の三橋だけを殘して置いた。石川忠總は、城兵と高麗橋に戦ひ、敵をして、その橋を燒くことの出来ないやうにさせた。諸巡使は、忠總を救はうと請うた。すると、前將軍は之を叱つて曰ふのに「夫れには及ばぬ。我が軍が城に登らうとせば、何うして橋を恃みにしよう。彼等は自分の出口を絶ち切つたのである」と。忠總をして退

いて休息させた。斯くて、諸將に令して曰ふには「土塀をこしらへ、櫓をならべ、命令を待つて後に進むことにせよ。妄りに闘つて、一卒たりとも損じてはならぬ」と。又、氣候が寒いので、糧食を増して給與した。

語釋 牌(櫓のこと)

本多正純受命以金工光次爲介遺書城中使織田長益・大野治長議和將軍聞之使來請曰「圍合矣請令諸軍四面齊登以天下兵攻一城何難拔之有和議若成不可及已」前將軍曰「未也」將軍弗懼本多正信曰「太公必有神算願少俟之」

訓讀

本多正純、命を受け、金工光次を以て介と爲し、書を城中に遣り、織田長益・大野治長をして和を議せしむ。將軍、之を聞き、來り請はしめて曰く「圍合せり、請ふ、諸軍に令して、四面齊しく登らん。天下の兵を以て、城を攻むるに、何の抜き難きことか之れ有らん。和議若し成らば、及ぶ可からざるのみ」と。前將軍曰く「未だし」と。將軍懼はず。本多正信曰く「太公必ず神算有らん。願はくは少く之を俟て」と。

通釋

本多正純は、仰を受け、鑄金工の後藤光次を媒介人として、手紙を城中に送り、織田長益・大野治長をして、和議を語らせた。將軍は之を聞き、來り請はしめて曰ふには「一城を攻めるのに、何の抜き難いことがありませう。若し和議が成立しますれば、戦ひたくても追付きませぬ」と。前將軍が曰ふのに「まだ早い」と。將

軍は機嫌が悪かつた。すると、本多正信が申し上げるに「御隠居には、深い御考があるのでせう。暫くお待ちになるがよい」と。

語釋 神算(凡智の及ばぬ深)

藤堂高虎私射書城上誘南條光明使爲内應光明約期事覺被殺藤堂氏兵不知而進井伊氏兵繼之加賀越前子弟亦進逼玉造貳城故秀康庶子直政先登建櫓濠上而城將眞田幸村善拒我兵死傷頗多前將軍望烟怒曰「奴輩敢破我令」顧安藤直次往收之將軍請罰破令者前將軍曰「破令者亦不可得也」

訓讀

藤堂高虎、私に書を城上に射て、南條光明を誘うて、内應を爲さしむ。光明、期を約す。事覺れて、殺さる。藤堂氏の兵、知らずして進み、井伊氏の兵、之に繼ぎ、加賀・越前の子弟も亦進んで、玉造の貳城に逼る。故秀康の庶子直政、先登して、櫓を濠の上に建つ。而して城將眞田幸村善く拒ぎ、我が兵の死傷頗る多し。前將軍、烟を望み、怒つて曰く「奴輩、敢て我が令を破る」と。安藤直次を顧み、往いて之を收めしむ。將軍、令を破る者を罰せんと請ふ。前將軍曰く「令を破る者も、亦得べからざるなり」と。

通釋

藤堂高虎は、密かに城へ矢文を射込み、南條光明を誘うて、裏切させた。光明は、期日を約束した。其の事が露顯して、殺された。藤堂氏の兵は、之を知らずに進み、井伊氏の兵は之に繼ぎ、加賀・越前の子弟も亦

た進んで、玉造の二の丸に逼つた。そして、秀康の妾腹の子の直政が先登し、幟を濠の上に建てた。しかし、城將眞田幸村は巧に拒ぎ、味方の死傷は非常に多かつた。前將軍は烟を望んで、怒つて曰ふのに「野郎ども、我が軍令に背いて、勝手に進んだな」と。安藤直次を顧みて、早速往いて、之を引き揚げさせた。因つて、將軍は、軍令を破つたものを罰しようとして請うた。前將軍が曰ふのに「軍令を破つてまで奮進する者は、なかく得難い勇士である」と。

兩公屢、巡視諸營。前將軍未嘗衷甲。被葵號戰袍。上馬從。至生玉口。城兵望觀識之。叢銃雨注。衆爭請避之。前將軍不顧。按轡徐行。橫田尹松後至。排衆而進。曰「此公喜當矢石。矢石之來、莫甚於川場。請往焉。乃扣馬而西。使去城遠。他日將軍巡至天滿。登有馬氏堙樓。城兵狙發。大煩。從者請去。不肯。水野勝成曰「元帥巡師。與兵異。不當專視一處。乃肯去。城將後藤基次曰「兩帥皆天授。豈可微倖。扼衆勿妄發銃。」

訓讀 兩公、屢々諸營を巡視す。前將軍、未だ嘗て甲を衷せず。葵號の戰袍を被つて、馬に上り、十餘騎を從へて、生玉口に至る。城兵望み觀て之を識り、銃を叢め雨注す。衆、争つて之を避けんと請ふ。前將軍顧みず。

轡を按じて徐行す。橫田尹松後れて至り、衆を排して進んで曰く「此の公、矢石に當るを喜ぶ。矢石の來るは、川場より甚しきは莫し。請ふ、往かん」と。乃ち馬を扣へて西し、城を去ること遠からしむ。他日、將軍巡つて天滿に至り、有馬氏の堙樓に登る。城兵狙つて大煩を發す。從者去らんと請ふ。肯せず。水野勝成曰く「元帥の師を巡るは、斥兵と異なり。専ら一處を視るべからず」と。乃ち肯うて去る。城將後藤基次曰く「兩帥は皆天授、豈微倖すべけんや」と。衆を扼めて妄に銃を發する勿からしむ。

通釋 兩將軍は、度々陣營を見廻つた。前將軍は、未だ一度も鎧を着たことが無い。今回も、葵の紋の付いた陣羽織を着て、馬に乗り、十餘騎を從へて、生玉口へ往つた。城兵は望み見て、之を知り、鐵砲を雨の如く打ち出した。衆人は、之を避けるやう請うた。前將軍は顧みない。手綱を緩めて、しづくと行かれた。橫田尹松は後れて至り、衆を押して退けて進み出て曰ふのに「この御方は、矢石の來る所を御好みになる。矢や彈の激しい所は、川場が一番です。さあ參りませう」と。馬を扣へて、西に向ひ、城から遠ざかり、危険を避けさせた。他日、將軍が巡視して、天滿へ赴き、有馬氏の物見櫓に登つた。すると、城兵は狙を定め、大砲を打ち出した。從者が去らうと請うた。承知されない。すると、水野勝成が曰ふのに「元帥の軍中巡視は、斥候とは違ひます。一個所だけ視て居てはなりません」と。すると領いて去つた。城將後藤基次が曰ふには「兩公とも、皆、天授である。僥倖にも打ち止めることが出来ようぞ」と。衆を扼めて妄りに發砲しないやうにした。

語釋 堙樓(土山を築いて高くし、其の上) ○天授(天からの授り。)

六日、前將軍徙陣茶臼山。將軍徙陣岡山。築連珠砦相接。壅河之功既竣。隍水多涸。

城兵大驚。我軍以土豚填隍、列竹牌、排鐵楯、起距堙、鑿地道、而發銃鼓譟者、每夜三次、使城兵不得休止。前將軍令諸將射書曰「降者有賞」。城中人々相疑。將軍復請凌城、齊登前將軍曰「吾聞良將不戰而勝、且損兵而得城、吾無取焉。復使金工光次入城、議和。城中衆議不決。多願和者。大野治長等建議曰「德川翁旦夕人也。明歲西吉東凶、且約和以爲後圖」。乃勸秀賴請和。前將軍曰「右府誠自艾、則吾莫復介意。城內客兵皆釋、不問因約三事。曰「填周池、曰「徙大和、曰「以淀君爲質。必居一焉。數日答聽填周池、而請爲客兵加食邑。前將軍怒曰「釋之已多矣。奚勝養之乎」。議乃輟。乃命工益造攻具。

訓讀 六日、前將軍從つて茶臼山に陣す。將軍從つて岡山に陣す。連珠砦を築いて相接す。壅河の功既に峻り、隍水多く潤る。城兵、大に驚く。我が軍、土豚を以て隍を填め、竹牌を列ね、鐵楯を排べ、距堙を起し、地道を鑿つ。而して銃を發して鼓譟するもの、毎夜三次、城兵をして休止するを得ざらしむ。前將軍、諸將に令し書を射しめて曰く「降る者は賞有らん」と。城中の人々相疑ふ。將軍、復城を凌いで齊しく登らんと請ふ。前將軍曰く「吾れ聞く、良將は戰はずして勝つ。且つ兵を損して城を得るは、吾れ取る無し」と。復金工光次をして

城に入つて和を議せしむ。城中、衆議して決せず。和を願ふ者多し。大野治長等、建議して曰く「德川翁は旦夕の人なり。明歲、西は吉にして東は凶なり。且く和を約して以て後圖を爲さん」と。乃ち秀賴に勸めて和を請はしむ。前將軍曰く「右府、誠に自ら艾めば、則ち吾れ復意に介する莫し。城内の客兵は、皆釋して問はじ」と。因つて、三事を約す。曰く「周池を填めん。曰く大和に徙らん。曰く、淀君を以て質と爲さん。必ず一に居れ」と。數日にして、周池を填むるを聽かんと答ふ。而して客兵の爲に食邑を加へんと請ふ。前將軍怒つて曰く「之を釋すすら已に多し。奚んぞ之を養ふに勝へんや」と。議乃ち輟む。乃ち工に命じて益々攻具を造らしむ。

通釋 六日、前將軍は、陣を茶臼山に徙した。將軍は陣を岡山に徙した。連珠砦を築いて相接して居た。又、淀・大和、二川を堰止める工事も片付き、濠の水が潤れて來たので、城兵は大に驚いた。我が軍は土俵で濠を埋め、竹の楯を列し、鐵の楯をならべ、築山をこしらへ、地道を掘つた。そして發砲して鼓譟すること、毎夜三度づつで、城兵をして休息することの出來ぬやうにした。前將軍は諸將に令して、矢文を射こましめ「降參する者には恩賞を與へる」といつた。城中の人々はお互同志疑ひ合つた。將軍は再び城壁を凌いで、一齊に登らうと請うた。前將軍が曰ふには「良將は、戰はずして、勝つものぞ」と聞いて居る。この上、兵を損じて城を得ることには、望むところでない」と。そこで、又金工光次をして、城に入つて、和睦の相談をさせた。城中では、衆議がまとまらなかつたが、和を願ふものは多かつた。大野治長等は建議して曰ふのに「德川の老爺は、程なく死ぬ人である。明年は西方が吉で、東方が凶だとある。暫く、和を約して、後日の企をしよう」と。そこで、秀賴に勸めて、和を請はせた。前將軍が曰ふには「右大臣にして誠に自ら改心するなら、吾は決して氣にかけない。城内の客兵は、皆、其の儘にして拘はずに置かう」と。因つて、三事を約した。「第一、ぐるりの濠を埋めること。第

二、大和に國換すること。第三、淀君を人質にすること。以上に掲げた三ヶ條の中、何れか一つを擇んで行へ」といつてやつた。五六日の後、ぐるりの濠を埋める旨、回答して来た。そして、客兵を扶持する爲め、領地を増して貰ひたいと請うた。前將軍は怒つて曰ふのに「赦すことさへ過ぎて居る。どうして養つて遣ることが出来ようか」と。和議はそこで中止になつた。そこで職工に命じて、益々、攻め道具を製造させた。

語釋 竹牌(竹束の橋) ○距堙(土を高く積みあげて城壁に押し附け、登る) ○且夕人(今夕か明日の人。程なく死ぬ人。老年者にいふ) ○自艾(艾は人に同じ。を改めて新にする)

或詣井伊直孝議事。直孝方睡起。措目而出。或曰「子何懈也。」曰「我慮敵出襲。夜不交睫。唯晝間得睡耳。」城將大野治房愧。道頓港之敗。欲有報之。時阿波兵陣本街橋西。治房夜出襲之。阿波兵亂死傷頗多。人乃服直孝也。

訓讀 或ひと、井伊直孝に詣つて事を議す。直孝、方に睡り起く。目を措つて出づ。或ひと曰く「子何ぞ懈るや」と。曰く「我れ敵の出で、襲ふを慮り、夜は睫を交へず。唯晝間、睡を得るのみ」と。城將大野治房道頓港の敗を愧ぢて、之に報する有らんと欲す。時に阿波の兵、本街橋の西に陣す。治房、夜出で、之を襲ふ。阿波の兵亂れて、死傷頗る多し。人乃ち直孝に服す。

通釋 或る人が、井伊直孝の處へ往つて相談した。直孝は折しも起きて、目をこすりながら出て来た。する

と、其の人が曰ふのに「貴公は、何故、怠けて居るのか」と。直孝は「我は、敵が来て襲ふだらうと思つて心配し、夜は眠らない。唯、晝間丈眠ることが出来るのだ」といつた。驍て、城將大野治房は道頓堀の敗北を愧ぢ、一つ返報をしようとした。其の時、阿波の兵は、本街橋の西に陣取つて居た。治房は、夜、出で、之を襲うた。すると、阿波の兵は亂れて、死傷頗る多かつた。そこで、人々は直孝に心服した。

語釋 措目(目をこする。ねむりから覺め) 措(目)をこする。ねむりから覺め

先是、天皇使大納言藤原兼勝。大納言藤原實條來勞。於是復來傳詔旨曰「卿以老冒風雪于戎間。宜委事諸將。以還息於京師。即欲和議。將詔秀賴成之。前將軍稽首曰「臣少慣軍旅。且職分所存。不可獨逸。勿勞聖慮。至於和議。臣自修之。不足以辱天詔。使秀賴奉詔則可。若不奉詔。適增其罪。臣則不得不誅夷之。是以敢辭。」乃令女監阿茶如京師。迎常光氏。常光氏、京極忠高母。而淀君妹也。使之入城。勸和。經工場而往。工人千百成群。造諸攻具。飛橋轆轤皆以千數。常光入城。具說淀君。

訓讀 是より先、天皇、大納言藤原兼勝・大納言藤原實條をして、來り勞はしむ。是に於て、復來り詔旨を傳へて曰く「卿、耄老を以て、風雪を戎間に冒す。宜しく事を諸將に委ね、以て還り京師に息ふべし。即し和議を

欲せば、將に秀頼に詔して之を成さしめんとす」と。前將軍、稽首して曰く「臣、少きより軍旅に慣る且つ職分の存する所、獨り逸す可からず。聖慮を勞する勿れ。和議に至つては、臣自ら之を修めん。以て天詔を辱するに足らず。秀頼をして詔を奉ぜしむれば則ち可なり。若し詔を奉ぜずば、適に其の罪を増さん。臣則ち之を誅夷せざるを得ず。是を以て敢て辭す」と。乃ち女監阿茶をして京師に如かして、常光氏を迎ふ。常光氏は、京極忠高の母にして、淀君の妹なり。之をして城に入つて和を勧めしむ。工場を経て往く。工人千百群を成して、諸々の攻具を造る。飛橋・輜輳皆干を以て數ふ。常光、城に入り、具に淀君に説く。

通釋 これより先、天皇は、大納言藤原兼勝、大納言藤原實條を遣はし、來つて、慰勞せしめた。此の時に、再び來つて、詔を傳へて曰ふのに「御身は、高年でありながら、軍中で風雪を冒し、誠に難儀な事と思ふ。軍事は諸將に委託し、還つて京都で休息するが善い。若し又、和議を欲するならば、秀頼に詔して、之を成立させよう」と。前將軍は、頓首再拜して曰ふのに「私は若い時から、軍事に慣れて居ります。戦は、武臣の職分で、自分、獨り安逸を食ふことは出来ませぬ。何卒、御聖慮を煩はし給はぬやうに、又、和議の一件は、臣自ら整へようと存じます。詔を辱すするには及びませぬ。折角、詔を下し賜はつても、秀頼が詔を奉ずれば宜しうございませぬが、萬一、詔を奉じませぬば、却つて、違勅の罪を増すことになります。之を誅伐し平げねばなりません。それ故、御辭退申し上げます」と。そこで、中老阿茶の局を京都へ遣り、常光院を迎へさせた。常光院は京極忠高の母で、淀君の妹である。馳がて、之を城中に遣はし、和を勧めさせた。偶々、作業場を通つて往つた。千百の職人が群をなして、攻道具を作つて居た。かけ橋だの、城攻め車だの、皆干を以て數へる程であつた。常光院は城に入り、詳しく淀君に説いた。

語釋 職分所存(職として守る可きところがある武士) ○女監(女中のとりしま) ○飛橋(城壁に架け渡して城中に入る可き) ○輜輳(攻め道具の一種。かけはし) ○輜輳(攻め道具の一種で、四輪の車に六木をならべ渡し、其の上に數十の人を載せ、(生皮で之を蔽ひ、矢や石で碎かれぬやうにし、城下に至つて攻め入る道具。)

淀君初與秀頼俱巡視城内。見守兵頗壯銳也。大喜。遂上天主閣。以望東軍。則極目皆兵。旌旗際天。淀君色動。已而備前島軍發。大煩。中閣第二層。二女震死。淀君始大驚。勸秀頼成和。而會常光至。則喜懼交。集常光傳命曰。右府必欲居大阪。則於其舊封。一無所闕。特逐諸客兵。使東軍毀外城。填周池。以著和親之實。秀頼母子召諸將。議未決。本多正純使人言治長。長益曰。公上之議已成矣。子等遲疑罪將至矣。二人大懼。急因後藤光次獻質。治長欲遣其幼子。光次斥之曰。稚弱者何用。乃率其家子而還。十九日和成。約填周池。逐客兵。

訓讀 淀君、初め秀頼と俱に城内を巡視す。守兵の頗る壯銳なるを見るや、大に喜ぶ。遂に天主閣に上り、以て東軍を望めば、則ち極目皆兵にして、旌旗、天に際す。淀君、色動く。已にして備前島の軍、大煩を發して、閣の第二層に中つ。二女、震死す。淀君始めて大に驚き、秀頼に勸めて和を成さしむ。而して會々常光、至る。則ち喜懼交。常光、命を傳へて曰く「右府必ず大阪に居らんと欲せば、則ち其の舊封に於て、一も闕くる

所無からん。特り諸客兵を逐ひ、東軍をして外城を毀ち周池を填めしめ、以て和親の實を著せ」と。秀頼母子、諸將を召して議す。議未だ決せず。本多正純、人をして治長・長益に言はしめて曰く「公上の議已に成れり。子等遲疑せば、罪將に至らんとす」と。二人、大に懼れ、急に後藤光次に因つて質を獻す。治長、其の幼子を遣らんと欲す。光次、之を斥けて曰く「稚弱の者何ぞ用ひん」と。乃ち其の冢子を率ゐて還る。十九日、和成る。約して周池を填め、客兵を逐ふ。

通釋 淀君は、秀頼と共に、城内を巡視した。守兵の氣が壯で強さうなのを見て、大に喜んだ。そこで、天守閣の上つて東軍を望むと、見渡す限り皆兵士であり、旌旗は天に續いて居る。淀君は顔色を變へた。既にして、備前島の軍が、大砲を打ち放すと、天主閣の二階に中つた。そして二人の腰元が即死した。淀君はこゝに初めて大に驚いて、秀頼に勸めて和議を成立させた。折しも、常光院が来たのである。喜びと懼れが、交々集まるといふ有様であつた。常光院は、命を傳へて曰ふのに「右大臣が必ず大阪に居たいならば、其の領地は、少しも缺くところなく、すべて、元の儘である。唯、多くの客兵を逐ひ拂ひ、東軍をして、二の丸を毀ち、廻りの濠を埋めさせて、和親の實を顯はせば夫れでよい」と。秀頼母子は、諸將を召して評議した。相談は未だ纏まらなかつた。本多正純は、人を遣つて、治長・長益に謂はせて曰ふには「御上同志の相談は、既に出来て居る。若し、貴公等が、愚圖々々して遅れると、罪が及ぶであらう」と。二人は大に懼れ、急に後藤光次に依つて、人質を差し出した。治長は其の幼子を遣はさうとした。光次は之を斥けて曰ふのに「稚い者では、役に立たない」と。其の長男を引き連れて還つた。十九日には、和議が成立し、廻りの濠を埋め、客兵を追ひ拂ふことにした。

話釋 冢子(長男治)

二十日、板倉重昌入監。秀頼誓書。秀頼問曰「兩公何可呈。重昌私對曰「呈太公。持書而歸。前將軍目逆而問曰「嚮遣汝、不命其所呈。如何。重昌告狀。前將軍喜曰「非汝不能辨也。城將度我恃和而懈也。欲襲茶臼岡。山夜使人候視。見其嚴備。乃止。初西藩獨島津氏未來會。二豊・二筑將帥、受密命亦不發。於是、以兵艦三千餘艘、至兵庫。則和成已四日矣。前將軍使人勞而罷之。遂令諸軍撤圍。特留動舊七將填塹。以本多正純・安藤直次・成瀬正成掌之。諸侯爭助役。

訓讀 二十日、板倉重昌入つて秀頼の誓書を監す。秀頼問うて曰く「兩公の何れに呈す可き」と。重昌、私に對へて曰く「太公に呈せよ」と。書を持つて歸る。前將軍、目逆して問うて曰く「嚮に汝を遣はすに、其の呈する所を命ぜず。如何」と。重昌、狀を告ぐ。前將軍喜んで曰く「汝に非ざれば辨する能はざるなり」と。城將、我が和を恃んで懈るを度り、茶臼・岡山を襲はんと欲し、夜、人をして候ひ視しむ。其の嚴備なるを見て乃ち止む。初め西藩・獨り島津氏未だ來り會せず。二豊・二筑の將帥、密命を受けて、亦發せず。是に於て、兵艦三千餘艘を以て兵庫に至る。則ち和成つて已に四日なり。前將軍、人をして勞うて之を罷めしむ。遂に諸軍をして圍を撤し、特に動舊の七將を留めて塹を填めしむ。本多正純・安藤直次・成瀬正成を以て之を掌らしむ。諸侯爭うて役を助く。

通釋 二十日、板倉重昌が、入つて、秀頼の誓書を受取らうとした。秀頼が問うて曰ふには「兩公の中、どちらへ上げよう」と。重昌は、自分の意見で對へて曰ふのに「御隠居に差し上げられよ」と。其の誓書を持つて歸つて來た。前將軍は、歸るを遅しと待ち構へて問うて曰ふのに「さきに、貴様を遣すとき、差出先を言はなかつた。それは何うしたか」と。重昌は有りの儘を申し上げた。前將軍は喜んで「貴様でなければ、埒が明かない」といつた。城將は、和議の成立を待み、我が軍が怠つて居ると思ひ、茶臼・岡山の本陣を襲はうとして、夜、人に候ひ視しめたが、備の嚴重なを見て止めた。初め西國の諸大名中、島津氏だけは會しない、豊前・豊後・筑前に候ひ視しめたが、備の嚴重なを見て止めた。これも亦た出發しなかつた、そこで、兵艦三千餘艘、船艦を銜んで、兵庫へ到着した。それは和議成立の後、既に四日のことであつた。前將軍は人を遣つて、慰勞して罷め歸らせた。斯くて、諸軍に令して、圍を解かせ、特に勳功ある譜代の七將を留めて濠を埋めさせた。本多正純・安藤直次・成瀬正成をして之を掌らせた。諸大名は争つて、其の工事を手傳つた。

語釋 城將(真田幸) ○目逆(歸るを通しとして目) ○密命(島津氏の叛に備へる内々の命)

伊達政宗・藤堂高虎等請曰「秀頼聽命終不可保也。恐遺後患不若及今除之。前將軍曰「吾與豊臣氏、以義合者也。長湫捷後、聽和入京師、始助征伐、終受委託。關原之役、乘勢壓大阪、事固非難。今彼乃以怨報恩、吾苟欲除之、豈埃卿等言哉。吾特念太閤舊好、以保全之耳。彼復負我、敢行不義、則自取亡也。卿等且勿言。」大阪諸將欲要

擊前將軍。二十四日、前將軍與數十騎、夜發行營、比曉入京師。衆以爲神。

訓讀 伊達政宗・藤堂高虎等請うて曰く「秀頼、命を聽くも、終に保す可からざるなり。恐らくは後患を遺さん。今に及んで之を除くに若かず」と。前將軍曰く「吾、豊臣氏と、義を以て合ふ者なり。長湫の捷後、和を聽いて京師に入り、始めて征伐を助け、終に委託を受く。關原の役に、勢に乗じて大阪を壓するは、事固より難きにあらず。今彼れ乃ち怨を以て恩に報ゆ。吾苟も之を除かんと欲せば、豈に卿等の言を啖たんや。吾特に太閤の舊好を念ひ、以て之を保全するのみ。彼れ復我に負き、敢て不義を行はば、則ち自ら亡を取らるなり。卿等且く言ふ勿れ」と。大阪の諸將、前將軍を要撃せんと欲す。二十四日、前將軍、數十騎と、夜、行營を發し、曉くる比、京師に入る。衆以て神と爲せり。

通釋 伊達政宗・藤堂高虎等が、請うて曰ふのに「秀頼は命を聽いたが、行く末の程は覺束ない。後々の心配を残すかも知れぬ。今の内に、之を除いた方がよい」と。前將軍が曰ふのに「吾と豊臣氏とは、義を以て合つたのである。長湫の役で勝つた後、和を許し、京都に入つて、初めて、征伐を手傳ひ、其の依頼を受けた。其の後、關原の役で、勢に乗じ、大阪を壓迫することは、固より困難では無い。今、彼は怨を以て恩に報いた。自分が、誠に之を除かうと思へば、何も貴公等の言葉を待つに及ばない。吾は、特に、太閤の昔の好を思つて、其の儘に全うして置いたのである。彼、再び我に負き、敢て不義を行へば、自ら滅亡を招くものである。貴公等は暫くの間、言はないがよい」と。大阪方の諸將は、前將軍を要撃しようとした。前將軍は、二十四日の夜、數十騎と共に陣營を出發し、夜明け頃には京都へ這入られたので、皆々人間業では無いと思つた。

初前將軍之出京師命林信勝等索御府及公卿家典籍命五山徒開局校寫在大阪軍中遙督其役使者往來不絕至是畢功爲三本獻納其一置二于駿府江戶二十八日入朝上皇天皇慰勞懇至命議正朝廷爵位興諸節會

訓讀 初め前將軍の京師を出づるや、林信勝等に命じて、御府及び公卿の家の典籍を索め、五山の徒に命じて、局を開き校寫せしむ。大阪の軍中に在つて、遙に其の役を督す。使者、往來して絶えず。是に至つて功を畢へ、三本を爲る。其の一を獻納し、二を駿府・江戶に置く。二十八日、入朝す。上皇・天皇、慰勞すること懇至なり。命じ議して朝廷の爵位を正し、諸節會を興す。

通釋 初め、前將軍が京都を出發する時、林信勝等に命じて、朝廷の文庫及び公卿の家に在る記録を探し出し、五山の僧徒に命じて事務所を開いて、校合して寫し取らせた。そして、大阪の陣中に居ながら、遙に其の仕事を監督した。使者の往來は絶え間がなかつた。そこで、すつかり仕事が進み、三部宛出來上つた。一部を朝廷に獻納し、駿府・江戶の一部づ、置いた。二十八日、入朝すると、上皇・天皇の御慰勞は、殊の外、丁寧であつた。そして、命じて朝廷の爵位を正し、諸々の年中行事を興された。

語釋 御府(朝廷の) ○開局(局は役所の事務を取扱ふ部) ○校寫(校は校合で、くらべあはせる、異同を引き合せること、校合して寫しとる) ○諸節會(元日・白馬・端午・踏歌・豊明等、朝廷の年中行事をいふ)

時京師流言池田利隆懷觀望逗留中島故其尼崎戍將不救且元前將軍怒欲奪

其封以與其弟忠繼利隆之老番氏明來陳謝之不聽而入氏明牽裾號哭以死爭之。初氏明父大膳爲圍人長湫之役池田輝政見父兄歿欲戰死大膳扣馬遏之輝政怒以鐙踢其項血被面而不縱遂存其祀前將軍記之喜其世忠節也乃釋利隆次年忠繼母子皆卒命利隆攝備前國事伊達政宗長子秀宗幼質於大阪關原之役始得放遷政宗避嫌立少子忠宗爲嗣於是秀宗從軍前將軍怒之封以富田氏舊邑宇和島食十萬石筒井定次遺臣多應大阪募以故賜定次死于配所

訓讀 時に京師、流言す、池田利隆、觀望を懷き、中島に逗留す。故に其の尼崎の戍將、且元を救はずと。前將軍怒り、其の封を奪ひ以て其の弟忠繼に與へんと欲す。利隆の老番氏明來つて之を陳謝す。聽かずして入る。氏明、裾を牽いて號哭し、死を以て之を爭ふ。初め氏明の父大膳圍人たり。長湫の役に、池田輝政、父兄の歿するを見て、戰死せんと欲す。大膳、馬を扣へて之を遏む。輝政怒り、鐙を以て其の項を踢る。血、面に被れども縱たず。遂に其の祀を存す。前將軍、之を記す。其の世、忠節なるを喜び、乃ち利隆を釋す。次年、忠繼母子、皆卒す。利隆に命じて備前の國事を攝せしむ。伊達政宗の長子秀宗、幼にして大阪に質たり。關原の役に、始めて放還せらるゝを得たり。政宗、嫌を避け、少子忠宗を立て、嗣と爲す。是に於て、秀宗、軍に従ふ。前將軍、之を感み、封するに富田氏の舊邑宇和島を以てし、十萬石を食ましむ。筒井定次の遺臣、多く大阪の募に應ず。

故を以て定次に死を配所に賜ふ。

通釋 其の時、京都には、誤つた風説が傳へられた。池田利隆は、觀望の心を抱き、其の爲、中島に逗留して居た。依つて尼崎の守將は、且元を救はなかつたのだといふのである。前將軍は聞いて怒り、其の領地を取り上げて、弟の忠繼に與へようとした。利隆の家老、番氏明は、來つて、御詫をした。聞き入れないで内へ入つた。氏明は、着物の裾を押へて泣き叫び、死ぬ覺悟をして之を争つた。初め、氏明の父大膳は別當にあつたが、長湫の役で、池田輝政は父や兄が死んだのを見て、自分も討死しようとした。すると、大膳は馬を押へて之を止めた。輝政は怒つて、鏡で其の首筋を蹴つた。血が顔に流れたが、何うしても放さない。終に其の家を今日に存したのである。前將軍は、此の事を覺えて居た。代々忠節を盡すのを感じし、乃ち利隆を赦した。翌年、忠繼母子は皆死んだ。そこで、利隆に命じて備前の國政を預からせた。伊達政宗の長子秀宗は、幼少の頃、大阪に入質となつた。關原の役に及んで、初めて放還された。政宗は、嫌疑を受けることを恐れ、少子忠宗を立て、跡嗣とした。そこで、秀宗が從軍した。前將軍は之を氣の毒に思ひ、富田氏の舊邑宇和島に封じて、十萬石を領せしめた。又、筒井定次の遺臣は、多く大阪の募集に應じた。依つて、定次に死を配所に賜はり自殺させた。

語釋 觀望(形勢を見て今までの行懸りを見合せること) ○牽裾(著物の裾にとりする) ○閑人(馬を畜) ○父兄(信誼、之助)

將軍在岡山、亦論賞諸將士功。是役井伊直孝以兄直勝廢疾不勝事代攝其軍、有功。將軍遂命領其國。直孝辭曰「直勝雖羸、有先臣養士在。每有君事、臣攝焉而從可

矣。今以庶孽先嫡長、臣所不安也。」又因安藤直次力請。將軍嘉賞而不許。乃賜彥根十五萬石、別賜邑于直勝。初直孝有故育於民間。比十一歲、有強盜數十、入其家。輒拔刀斫一人。父直政密召見、以常所執軍麾授之而卒。及長、召用爲書院番頭。稍進大番頭。於是既拜命。次日入謝。徐進坐。執政本多正信之上。坐者洒然變色。既罷。謂正信曰「今日之狀類不恭也。然已承故侍從之後。不能不然。」正信曰「公唯能然。所以有是命。吾竊慶君知人也。」

訓讀 將軍、岡山に在つて、亦諸將士の功を論賞す。是の役に、井伊直孝、兄直勝の廢疾にして事に勝へざるを以て、代つて其の軍を攝し、功有り。將軍、遂に命じて其の國を領せしむ。直孝、辭して曰く「直勝羸しと雖も先臣の養士在る有り。君の事有る毎に、臣攝して從へば、可なり。今、庶孽を以て嫡長に先だつは、臣の安んぜざる所なりと。」又、安藤直次に因つて力請す。將軍、嘉賞して許さず。乃ち彥根の十五萬石を賜ひ、別に邑を直勝に賜ふ。初め直孝、故有つて民間に育はる。十一歳の比、強盜數十有つて、其の家に入る。輒ち刀を抜いて一人を斫る。父直政、密に召見して、常に執る所の軍麾を以て之に授けて、卒す。長するに及んで、召し用ひて書院番頭と爲す。稍あつて大番頭に進む。是に於て、既に命を拜す。次日、入つて謝し、徐に進んで執政本多正信の上に坐す。坐者、洒然として色を變ず。既にして罷む。正信に謂つて曰く「今日之狀、不恭に類するなり。」

然れども已に故侍従の後を承く。然らざる能はず」と。正信曰く「公唯能く然り。是の命有る所以なり。吾れ竊に郎君の人を知るを慶するなり」と。

通釋 將軍は、岡山の本陣に居り、諸將士に論功行賞した。此の役に當り、井伊直孝は、兄の直勝が體が悪く、軍役が務まらぬといふので、代つて其の事に當り、手柄があつた。そこで、將軍は、命じて、其の國を領有せしめた。直孝は辭退して曰ふのに、「兄、直勝は、體が悪ければ、亡父の養つた侍が居ますから、御上の事ある毎に、私が代理し、從軍すれば良い。妾腹の子でありながら、本妻腹の長男に先立つことは、私の心に安からぬことでありませう」と。又、安藤直次に依つて、務めて請うた。將軍は感心されつゝも許されぬ。そこで、彦根の十五萬石を賜はり、兄直勝には別に領地を賜はつた。初め、直孝は、故あつて民間に養育された。十一歳の頃、數十人の強盜が其の家に押し込んだ。直孝は直ぐに刀を抜いて、その一人を斬つた。父直政は密かに、召し見て、平生手にして居た采配を授けて死んだ。斯くて、直孝は長ずるに及んで、召し出されて書院番頭となつた。次いで、大番頭に進んだ。稍あつて、本家相續の仰を受けた。翌日、入つて御禮を述べ、徐に進んで、執政本多正信の上座に坐つた。座に居た者は、興が醒めて顔色を變へた。聽て拜調が濟んで退出すると、直孝は正信に向つて曰ふのに「今日の事は如何にも失禮のやうである。しかし、某は故侍従の跡目を相續したのである。斯くて譯には行かぬ」と。すると、正信が曰ふには「貴公なればこそ斯かることを爲される。即ち今日の任命がある所以である。郎君の拙者としては、人を知る明あるを密かに祝福するのです」と。

語釋 洒然(興が覺めておどろくさま) ○類不慕(失禮にあたる) ○故侍従(直政をいふ)

當り是時諸工卒已填外隍遂及内隍城中詰之曰初約填周池謂西南外壕也今及於此何也成瀬正成對曰謂之周者周内外也且和親已成何用隍爲今欲存内隍其意如何城中不能爭遂晨夜督役超歲而畢獨餘牙城一隍

訓讀 是の時に當り、諸工卒、已に外隍を填め、遂に内隍に及ぶ。城中、之を詰つて曰く「初め周池を填むるを約せしは、西南の外壕を謂ふなり。今此に及ぶは、何ぞや」と。成瀬正成對へて曰く「之を周と謂ふは、内外を周くするなり。且つ和親已に成る。何ぞ隍を用ふるを爲さん。今内隍を存せんと欲するは、其の意如何」と。城中爭ふ能はず。遂に晨夜、役を督し、歳を超えて畢る。獨り牙城の一隍を餘す。

通釋 この時に當つて、多くの工夫共は、既に外壕を埋め、果ては内壕にまで及んだ。すると城中では、之を詰つて曰ふには「廻りの壕を埋めるとの約束は、西南の外壕をいふのである。内壕にまで及ぼすとは、如何なる譯か」と。成瀬正成が答へて曰ふには「廻りといふは、城の内外を周るの謂である。既に和陸が出来た今日である。何の爲めに壕の必要があらう。内壕丈を残さうとは如何なる心であるか」と。城中では、争ふことも出来なかつた。斯くて、晝夜に互つて工事を、督勵し、歳を踰えて片付いた。唯、本丸の壕、一筋残した丈である。

元和元年正月三日、前將軍發京師。九日、將軍入京師、盡罷諸侯、就國、使安藤直次追及岡崎、告功竣、且告大阪有再舉之計。居五日入朝。又五日東。二月會前將軍于

中泉密議而往。十四日、前將軍歸駿府、將軍歸江戶。

訓讀 元和元年正月三日、前將軍、京師を發す。九日、將軍、京師に入り、盡く諸侯を罷めて國に就かしめ、安藤直次をして岡崎に追及して、功の峻るを告げしめ、且つ大阪に再舉の計有るを告げしむ。居ること五日にして、入朝す。又、五日にして、東す。二月、前將軍に中泉に會す。密議して往く。十四日、前將軍は駿府に歸り、將軍は江戶に歸る。

通釋 元和元年正月三日、前將軍は、京都を出發した。八日、將軍は京都に入り、盡く諸大名を解散して、歸國させ、安藤直次を遣り、前將軍に岡崎で追ひ付き、すべての事が片付いた旨を告げさせると共に、大阪では、再舉の企があることをも告げさせた。斯くて、五日の後に入朝した。又、五日たつて東に向ひ、前將軍に中泉にて會合し、密議を重ねた後に赴いた。十四日、前將軍は駿府へ歸り、將軍は江戶へ歸つた。

語釋 元和(後水尾天皇)の年號。○中泉(江邊)

江戸之士、有小幡景憲者、有罪出亡仕前田氏。玉造之戰、先衆奮闘、城將大野治房識之。及和成、潛誘以厚利。景憲伴應、夜入見治房。治房大喜、遂告再舉之計。因約期遣歸。景憲歸、因板倉勝重、松平定勝、啓之將軍。將軍與前將軍議、爲不知者、以候其動息。大坂益、召募客兵、以間使招景憲。勝重定勝謂之曰、「兩公再來、諸軍復集、不出

五十日。其間城兵或侵京師、挾至尊、以東郷、則恐費力也。汝勗沮之。景憲諾而往。城中諸將、有議出師者。治房兄弟固執不聽。信景憲之說也。或說治房曰、「景憲謀賊也。請驗問之。」治房驚發甲圍其舍。景憲笑語自如。治房召之。即從一奴入。治房曰、「人言果不可聽也。」乃置之界浦、使時來見。

訓讀 江戸の士に小幡景憲と云ふ者有り。罪有つて出亡し、前田氏に仕ふ。玉造の戰に、衆に先んじて奮闘す。城將大野治房、之を識る。和成るに及んで、潛に誘ふに厚利を以てす。景憲伴り應じ、夜に入つて治房を見らる。治房、大に喜び、遂に再舉の計を告ぐ。因つて期を約して遣歸す。景憲歸つて、板倉勝重・松平定勝に因つて、之を將軍に啓す。將軍、前將軍と議し、知らざる者の爲して、以て其の動息を候はしむ。大阪益々客兵を召募し、間使を以て景憲を招く。勝重・定勝、之に謂つて曰く、「兩公、再び來り、諸軍復集ること、五十日を出でじ。其の間、城兵或は京師を侵し、至尊を挾んで以て東に郷は、則ち恐らくは力を費さん。汝勗めて之を沮め」と。景憲、諾して往く。城中の諸將、師を出さんと議する者有り。治房兄弟、固く執つて聽かず。景憲の説を信するなり。或ひと、治房に説いて曰く、「景憲は謀賊なり。請ふ、之を驗問せよ」と。治房驚き、甲を發して其の舍を圍む。景憲、笑語自如たり。治房、之を召す。即ち一奴を從へて入る。治房曰く、「人言果して聽く可からざるなり」と。乃ち之を界浦に置き、時に來つて見えしむ。

通釋 江戸の侍に小幡景憲といふ者があつた。何かの罪を犯して、出奔し、前田家に奉公して居た。玉造の戦には衆に先んじて奮闘した。城將大野治房が、之を見知つて居た。和睦の後には、ひそかに多くの利益を以つて、之を誘つた。景憲は、伴つて承諾し、夜、城中で、治房に會つた。治房は大に喜んで、再舉の計畫を告げた。それで、その期日を約束して歸した。景憲は歸つて、板倉勝重・松平定勝に依つて、之を將軍に申し上げた。將軍は、前將軍と相談して、知らないやうな風をして、敵方の様子を伺はせた。すると、大阪方では、益々、客兵を召し集め、間者を寄越して景憲を招いた。勝重・定勝は、之に向つて曰ふのに「兩公が再び來られ、諸軍の再び集まるの五十日を出ないであらう。その間城兵は京都へ侵入し、天子を挾んで東に向ふやうなことがあると、誠に由々しい大事で、甚だ手数がかゝる。貴様は、出来る丈、之を妨げるがよい」と。景憲は、承知して出かけた。すると城中の諸將で、軍勢を繰り出すことを議するものがあつた。治房兄弟は、どうしても聞き入れなかつた。景憲の反對説を信じたからである。或る人が、治房に説いて曰ふのに「景憲は、まはし者である。どうかよく吟味なさるがよい」と。治房は驚いて、兵士を繰り出してその宿を圍んだが、景憲は笑つて話をし、平生と少しも變らなかつた。總て、治房が之を召すと、即座に一人の部下を從へて遣つて來た。治房は、うまうまと欺され、曰ふのに「人の言葉は信用出来ないものだ」と。そこで、景憲を界浦に置き、時に來つて見えさせた。

語釋 玉造之役(大阪の役で、前田と眞田とが戦つた戦争) ○諜賊(諜は敵の様子を探り、密かに味方に知らせること。まはしもの。)

兩將軍已熟知敵情、而秀頼未知之。三月、使青木一重及二女使來請曰「兵荒後、食

祿不給。請賑貸之。此時參議義直將娶故淺野左京大夫女。前將軍謂二女使曰「右兵衛督成婚在近。吾亦將往焉。東國女子不嫺禮節。女等幸往相之。婚畢則吾自適京師。以計賑給之事。乃遣之尾張。已而京師報至。曰「募兵聚大阪者十四五萬、兵勢什倍前役。前將軍笑曰「多多益、可敗。不必禁之。終下令諸侯。皆如前役。」

訓讀 兩將軍已に敵情を熟知して、秀頼未だ之を知らず。三月、青木一重、及び二女使をして來り請はしめて曰く「兵荒の後、食祿給せず。請ふ、之を賑貸せよ」と。時に參議義直、將に故淺野左京大夫の女を娶らんとす。前將軍、二女使に謂つて曰く「右兵衛督、婚を成すこと近きに在り。吾も亦將に往かん」と。東國の女子、禮節に嫺はず。女等、幸に往いて之を相けよ。婚畢らば則ち吾れ自ら京師に適き、以て賑給の事を計らん」と。乃ち之を尾張に遣る。已にして京師の報至る。曰く「募兵の大阪に聚る者十四五萬、兵勢、前役に十倍す」と。前將軍笑つて曰く「多多益、可敗。必ずしも之を禁ぜず」と。終に令を諸侯に下す。皆前役の如し。

通釋 兩將軍は、既に敵の内情を十分に知つたが、秀頼は、斯かる事とは夢にも知らない。三月、青木一重及び二女使を遣はし、來り請はせて曰ふのに「兵荒の後で、食祿が渡り切れませぬ。誠に困却して居るから、何卒、救つて貰ひたい」と。時に參議義直は、亡くなつた淺野左京大夫の娘を娶らうとして居たので、前將軍は、二女使に向つて曰ふには「右兵衛督は近々婚禮する。東國の女は、禮儀作法を知らぬから、其處許には何分往つて世話して貰ひたい。婚禮さへ濟めば、吾自ら京都へ行き、賑はしく救ふやう取計らはう」と。斯くて二女使を尾張

へ遣はした。既にして、京都からの知らせが来た。曰ふのに「募兵の大阪に集まる者は、十四五萬で、兵勢は前役に十倍して居る」と。前將軍は笑つて曰ふのに「多ければ多い程、敗るに都合が良い。必ずしも、之を禁ずるには及ばぬ」と。終に命を諸大名に下した。それは前役の通りであつた。

語釋 前役(前年冬)

先命井伊直孝・藤堂高虎率兵往護京師。京師方訛言、大阪兵來負擔四走。或入闕門及公卿宅。板倉氏僚屬請爲兵備。勝重曰「置諸乃便服巡行、不異平日。上下倚安焉。而諸將至。直孝陣東寺、高虎陣淀。去歲之役、山口重政欲以功自償。至箱根不得出。於是間行屬井伊氏。藤堂氏將渡邊了、縱敵於住吉。高虎自恐被疑、甚誚了。舊臣亦忿了新進傲人也。了請去、不許。」

訓讀 先井伊直孝・藤堂高虎に命じ、兵を率ゐて往いて京師を護らしむ。京師方に訛言あり、大阪の兵來ると。負擔して四走す。或は闕門及び公卿の宅に入る。板倉氏の僚屬、兵備を爲さんと請ふ。勝重曰く「諸を置け」と。乃ち便服して巡行すること、平日に異ならず。上下倚安す。而して諸將至る。直孝は東寺に陣し、高虎は淀に陣す。去歲の役に、山口重政、功を以て自ら償はんと欲す。箱根に至つて、出づるを得ず。是に於て、間行して井伊氏に屬す。藤堂氏の將渡邊了、敵を住吉に縱つ。高虎自ら疑はるゝを恐れ、甚だ了を誚む。舊臣も亦、了の新

に進んで人に傲るを忿る。了、去らんことを請ふ。許さず。

通釋 先づ井伊直孝・藤堂高虎に命じ、兵を率ゐて進み、京都を守護させた。折しも、京都では、大阪方の兵が攻め上ると専ら風聞した。人々は荷物を背負ひ出し、四方へ逃げ出した。或は周章て、御所の門だの、公卿の屋敷などへ這入るものさへあつた。板倉氏の下役どもは、兵備を致さうと請うた。勝重は「棄て置け」といつた。そこで平服で巡行して、平日と少しも變らなかつた。上下の者はこれに倚賴して安心した。間もなく、諸將が到着した。直孝は東寺に陣し、高虎は淀に陣取つた。去年の役に、山口重政は、功を立て、自ら償はうとした。箱根へ來ると、關所を通ることが出来なかつた。そこで、忍んでやつて來て、井伊氏に屬した。藤堂氏の部將渡邊了は、住吉で、敵兵を逃がしたので、高虎は疑はれようかと恐れ、ひどく了を誚めた。舊臣どもは、了が新に進んで、人に傲ることを不満に思つた。依つて了は、退散したいと請うたが許されなかつた。

四月九日、前將軍至尾張、召大阪使者曰「吾聞右府復募兵。兵多則食乏固其當已。吾將往驗其虛實也。因留使者不遣。遣常光氏、再諭弭兵。居三日、成義直婚。又三日、發尾張。十八日、至京師。常光氏來報秀頼不聽命。又使後藤光次往。亦不答。乃徇畿內、應大阪募者、收其妻子。降者宥之。」

訓讀 四月九日、前將軍、尾張に至り、大阪の使者を召して曰く、「吾れ聞く、『右府復兵を募る』と。兵多ければ

則ち食乏しきは、固より其の當のみ、吾れ將に往いて其の虚實を驗せんとするなり」と。因つて使者を留めて遣らず。常光氏を遣はして、再び兵を弭むるを諭す。居ること三日、義直の婚を成し、又三日にして、尾張を發す。十八日、京師に至る。常光氏來つて、秀頼の命を聽かざるを報ず。又後藤光次をして往かしむ。亦答へず。乃ち畿内の大阪の募に應ずる者を徇へて、其の妻子を收む。降る者は之を宥す。

通釋 四月九日、前將軍は尾張へ到着し、大阪方の使者を召し出して曰ふに「聞けば、右大臣は、再び兵を募るさうだ。軍兵が多ければ、食糧の缺乏は當然である。吾は往いて、其の様子を調べて遣らう」と。それで使者を留めて還さない。そして、常光院を遣つて、兵を止めるやう諭させた。逗留すること三日、義直の婚禮を済ませ、又三日たつて、尾張を出發し、十八日、京都に到着した。すると常光院は歸り來つて、秀頼が仰に従はぬことを告げた。そこで、又後藤光次を往かせたが、其の時も亦た返事をしなかつた。そこで、畿内の中で大阪の募りに應じたものを觸れ廻し、其の妻子を取り押へた。降参した者は、其の罪を赦した。

語釋 大阪使者(前の二)

將軍以前將軍至尾張之日、發江戶。少將忠輝、與黑田長政・加藤嘉明、皆自請而從。二十一日、至伏見。明日來謁二條城。前將軍欲以二十八日出師。將軍以兵未全集、請少竅之。前將軍曰「此役當決於野戰。野戰不用多。乃公以見兵先往。汝合大衆繼之。」將軍曰「兒在此使大人先世謂之何。」前將軍曰「吾老矣。不復可遭事。必先衆一樂

戰。本多正信侍側曰「臣聞軍之先後在地之遠近。太公在京。郎君在伏見。其次已定矣。太公甚無道理。前將軍乃止。召藤堂高虎諮攻城方略。高虎對曰「利於遠。不利於近。輕兵挑戰。竅其遠。出擊之。則敗衄之餘。無復守志。前將軍撫掌曰「子言如出我口也。」遂定諸軍所郷。

訓讀 將軍、前將軍の尾張に至るの日を以て、江戶を發す。少將忠輝、黑田長政、加藤嘉明と、皆自ら請うて從ふ。二十一日、伏見に至る。明日、來つて二條城に謁す。前將軍、二十八日を以て師を出さんと欲す。將軍、兵未だ全く集らざるを以て、少く之を竅たんと請ふ。前將軍曰く「此役は當に野戰に決すべし。野戰は多きを用ひず。乃公、見兵を以て先往かん。汝、大衆を合して之に繼げ」と。將軍曰く「兒此に在つて、大人をして先だたしめば、世の人、之を何とか謂はん」と。前將軍曰く「吾れ老いたり。復事に遭ふ可からず。必ず衆に先だつて一たび樂戰せん」と。本多正信、側に侍す。曰く「臣聞く、軍の先後は、地の遠近に在り」と。太公は京に在り。郎君は伏見に在り。其の次已に定れり。太公、甚だ道理無し」と。前將軍乃ち止む。藤堂高虎を召して、攻城の方略を諮ふ。高虎對へて曰く「遠きに利あつて、近きに利あらず。輕兵もて戰を挑み、其の遠く出づるを竅つて之を撃たば、則ち敗衄の餘、復守志無からん」と。前將軍、掌を撫して曰く「子が言、我が口より出づるが如きなり」と。遂に諸軍の郷ふ所を定む。

通釋 將軍は、前將軍が尾張に到着した日に、江戶を出發した。少將忠輝は、黑田長政・加藤嘉明と共に、皆

自ら請うて從軍した。二十一日、伏見に着した。翌日、往つて二條城で前將軍に拜謁した。前將軍は、二十八日に軍勢を繰り出さうとした。將軍は、未だ兵士が全く集つて居ないから、暫く待たれるやう請うた。すると、前將軍が曰ふのに「此の役は、野戦で勝負が付く。野戦は兵士が多くなくとも良い。だから乃公は現在の軍勢を率ゐて出かける。汝は大軍を合して、後から繼ぐがよい」と。將軍が曰ふには「私が此處に居て、父君を先發にする、世間の人が何と申しませう」と。すると、前將軍は「乃公は、年寄つたから、再び斯うした事に巡り遇はぬだらう。だから、衆に先つて、一度面白い戦がして見たい」といつた。本多正信は、側に侍してゐた。曰ふのに「承るところに依りますと『軍の先後は、地の遠近に由ると申します。御隠居は京都に居られます。若殿は伏見に御居でになります。其の順序は、既に定まつて居ります。御隠居の仰が御無理であります』と。そこで前將軍は止めた。藤堂高虎を召して、城を攻める手立を問うた。高虎が答へて曰ふのに「遠くから攻める方が利益で、近くでは利益がない。先づ身輕の兵で、戦を挑み、城兵の遠く出るのを待つて、之を撃てば、大負に負け、再び城を守る志さへ無くなりませう」と。前將軍は、手を拍いて曰ふのに「貴様の言葉は、さながら乃公の口から出た様である」と。遂に諸軍の向ふ所を定めた。

語釋 子言如出我口也(全く同じ考へを持つて居ることをいふ。)

石川忠總守高槻池田利隆池田忠雄守尼崎其餘山陽山陰將士自神崎進淺野蜂須賀以下南海將士自和泉進而大和伊勢美濃諸部自大和口先進少將忠輝

伊達政宗爲其帥水野勝成爲其先鋒前將軍召勝成一曰我大和口先鋒非汝母可者汝統大和將士有不用命者先斬而後聞與直孝高虎相爲策應期其全勝慎勿作一條槍故態勝成感謝而出井伊直孝藤堂高虎以近江伊勢兵爲中軍先鋒榊原康勝松平康重與小笠原仙石諏訪保科丹羽諸將繼之自河内口進

訓讀 石川忠總は高槻を守り、池田利隆、池田忠雄は尼崎を守る。其餘の山陽・山陰の將士は神崎より進み、淺野・蜂須賀以下、南海の將士は、和泉より進む。而して大和・伊勢・美濃の諸部は大和口より先づ進む。少將忠輝・伊達政宗、其の帥となり、水野勝成、其の先鋒たり。前將軍、勝成を召して曰く「我が大和口の先鋒は、汝に非ざれば可なる者なし。汝、大和の將士を統べ、命を用ひざる者有らば、先づ斬つて後に聞せよ。直孝・高虎と策應を相爲し、其の全勝を期し、慎んで一條槍の故態を作す勿れ」と。勝成、感謝して出づ。井伊直孝・藤堂高虎、近江、伊勢の兵を以て、中軍に先鋒たり。榊原康勝・松平康重・小笠原・仙石・諏訪・保科・丹羽の諸將、之に繼いで、河内口より進む。

通釋 石川忠總は高槻を守り、池田利隆・池田忠雄は尼崎を守つた。其の外、山陽・山陰の兵士は神崎より進み、淺野・蜂須賀以下、南海の將士は、和泉から進んだ。そして、大和・伊勢・美濃の諸部は大和口から、先づ進んだ。少將忠輝・伊達政宗は、其の大將となり、水野勝成は、其の先鋒となつた。前將軍は、勝成を召して曰ふのに「我が大和口の先鋒は、貴公でなければ適當なものが無い。貴公は大和の將士を統率し、若し命令を聞かないものが

あれば斬つて棄て、後で申し出るがよい。又、直孝・高虎と打ち合はせをして、其の全勝を念とし、槍一筋の小身時代の眞似をして、軽々しく振舞つてはならぬぞ」と。勝成は感謝して退出した。井伊直孝・藤堂高虎は、近江・伊勢の兵を以て中軍の先鋒となり、榊原康勝・松平康重は小笠原・仙石・諏訪・保科・丹羽の諸將と共に、之に續いて、河内口から進んだ。

【語釋】後聞後から耳に入れる。濟○一條槍故態槍一本で働いたやうな小身の時の態度をとるなどの意。大名に爲れば大名らしく、重々しく振舞へとの意。

先是、城兵侵大和。大和、法隆寺有工人中井正次。前役爲東軍造攻具。城兵怨之、圍法隆寺焚之。二十六日、大野治房亦寇郡山。守將筒井定慶棄守遁。水野勝成進至長池、聞之謂部下曰、「敵若焚南都我恥也。疾馳赴之。治房至不敢逼。遂退走。勝成追躡至法隆寺。會淺野但馬守以兵五千北赴和泉。至佐野。治房等誘紀伊土寇使起。其後而以兵二萬逆之。紀伊將龜田高綱曰、「平地之戰、寡者必敗。宜退至榎井、蔽林塞蹊而陣。」但馬守從之。

【訓讀】是より先、城兵、大和を侵す。大和の法隆寺に工人中井正次といふ有り。前役に、東軍の爲に攻具を造る。城兵、之を怨み、法隆寺を圍んで之を焚く。二十六日、大野治房も亦、郡山に寇す。守將筒井定慶、守を棄

て、遁る。水野勝成、進んで長池に至り、之を聞き部下に謂つて曰く、「敵若し南都を焚かば、我が恥なり」と。疾く馳せて之に赴く。治房至り敢て逼らず。遂に退き走る。勝成、追躡して法隆寺に至る。會し淺野但馬守、兵五千を以て、北和泉に赴いて佐野に至る。治房等、紀伊の土寇を誘うて、其の後に起らしめ、兵二萬を以て之を逆ふ。紀伊の將龜田高綱曰く「平地の戦は、寡き者必ず敗る。宜しく退いて榎井に至り、林を蔽ひ蹊を塞いで陣すべし」と。但馬守、之に従ふ。

【通釋】これより先、城兵は、大和へ侵入した。大和の法隆寺に、大工の中井正次といふものが居た。前役の時には、東軍の爲に攻道具を造つた。城兵は之を深く怨み、法隆寺を圍んで之を焚いた。二十六日、大野治房も亦郡山に寇した。守將の筒井定慶は、守を棄て、遁れた。水野勝成は進んで長池に至り、之を聞き、部下に向つて曰ふには「若し敵が奈良を焼けば、我が恥である」といつた。そこで、急いで馳せ付けて、此に赴いた。馳つて、治房も押し寄せたが、敢て逼らうとしない、遂に退き逃けた。そこで、勝成は追ひ駆けて、法隆寺に至つた。折しも、淺野但馬守は兵五千を率ゐて、北の方和泉へ赴かうとして、佐野まで来たのに出逢つた。治房等は、紀伊の土寇を誘うて其の後に起らせ、そして、二萬の兵を率ゐて淺野氏の軍を迎へた。紀伊の將龜田高綱が曰ふには「平地の戦では、少勢のものが負けるに定つて居る。退いて榎井に至り、林を蔽ひ、蹊を塞ぐの軍勢を以て陣するがよい」と。但馬守は之に従つた。

【語釋】佐野・榎井(和泉)

明日黎明、治房、先鋒塙直次・岡部則綱・谷輪重政等、爭先而進。高綱以銃手要擊、傷

則綱紀伊將上田重安與直次接槍傷而交退。多胡某射斃直次遂獲則綱重政。治房在貝塚聞敗走而紀伊土寇亦平。但馬守復進勝成分其部下爲二隊以堀直寄松倉重正爲左右隊將。重正不告而進直寄怒召居民問捷路對曰龜背嶺最捷。然昔物部守屋由此路取敗武人相傳以爲凶也。直寄曰吾既從軍凶其分也。且守屋以敗安知吾不以勝乎。遂踰嶺先重正至國分嶺已而勝成引諸軍踵至。少將忠輝猶陣南都。

訓讀 明日黎明治房の先鋒堀直次岡部則綱谷輪重政等先を争うて進む。高綱銃手を以て要撃し、則綱を傷く。紀伊の將上田重安直次と槍を接し、傷いて交々退く。多胡某射て直次を斃し、遂に則綱重政を獲たり。治房貝塚に在り、敗を聞いて走る。而して紀伊の土寇も亦平く。但馬守復進む。勝成其の部下を分つて、二隊と爲し、堀直寄松倉重正を以て、左右の隊將と爲す。重正告げずして進む。直寄怒り、居民を召して捷路を問ふ。對へて曰く「龜背嶺最も捷し。然れども昔物部守屋此の路に由つて敗を取る。武人相傳へて以て凶と爲す」と。直寄曰く「吾れ既に軍に従ふ。凶は其の分なり。且つ守屋は以て敗る。安んぞ吾は以て勝たざるを知らんや」と。遂に嶺を踰え、重正に先だつて、國分嶺に至る。已にして勝成、諸軍を引き踵いで至る。少將忠輝、猶南都に陣せり。

通釋 翌日の夜明け頃、治房の先鋒、堀直次・岡部則綱・谷輪重政等は、先を争つて進んだ。高綱は鐵砲組で要撃し、則綱を傷けた。紀伊の將、上田重安は、直次と槍を交へたが、負傷したので、雙方共退いた。多胡某は、直次を射倒し、遂に則綱・重政の二將を討ち取つた。治房が、貝塚に居たが、敗軍と聞いて、逃げ出した。そして紀伊の一揆も、亦た平定した。但馬守は、再び進んだ。勝成は、其の部下を分つて二隊となし、堀直寄・松倉重正を左右の隊長とした。堀が、重正は告げずして進んだ。直寄は怒つて、土地の人民に近路を問うた。すると對へて曰ふのに「龜背嶺が一番近いのです。併し昔物部守屋が、此の路から往つて負けました。よつて武は土寇、相傳へて此路は縁起が悪いといつて居ります」と。直寄が曰ふのに「余は、既に、軍に従つたのである。縁起の悪いは當然である。守屋は負けたにせよ、吾は勝たぬとも限らぬではないか」と。遂に嶺を踰えて、重正よりも先に、國分嶺に至つた。既にして、勝成も亦た諸軍を率ゐ、相踵いで至つた。そして、少將忠輝はまだ奈良に屯して居た。

語釋 貝塚(和) ○龜背嶺(大和和泉) ○物部守屋(欽明天皇の朝に、百濟から佛像及び經論を獻じた。蘇我馬子・飯戶皇子は深く之を尊めて殺した。○國分嶺(河内))

兩將軍以四方兵漸集遂議親出會大阪細作入京師欲焚禁內及二條板倉勝重捕下獄前將軍以故停行五月五日乃發令諸軍持三日糧食以米鹽酒醬一櫃自從駕肩輿而行將軍發伏見上杉景勝留守京師陣于男山前田利光少將忠直以下皆從即日前將軍舍星田將軍舍角南。

訓讀 兩將軍、四方の兵漸く集るを以て、遂に親出を議す。會々大阪の細作、京師に入つて、禁内、及び二條を焚かんと欲す。板倉勝重、捕へて獄に下す。前將軍、故を以て行を停む。五月五日、乃ち發す。諸軍に令して三日の糧食を持ち、米鹽酒醬一櫃を以て自ら從はしめ、肩輿に駕して行く。將軍、伏見を發す。上杉景勝、京師を留守し、男山に陣す。前田利光、少將忠直以下皆從ふ。即日、前將軍は星田に舍し、將軍は角南に舍す。

通釋 兩將軍は、四方の兵が、漸く集まつたから、自身で出陣しようとして評議した。折しも、大阪方の間者が京都へ入り込み、御所及び二條城を焚かうとした。板倉勝重は、之を捕へて獄に下した。前將軍は、其の爲に、出陣を見合せた。五月五日に漸く出發した。諸軍に命令を下して、三日間の兵糧を持ち、米・鹽・酒・醬油等を、一櫃に入れて從はせ、輜に乗つて出かけた。將軍は伏見を出發した。上杉景勝は京都に留守して男山に陣し、前田利光・少將忠直以下は、皆從軍した。出發した其の日、前將軍は星田に止宿し、將軍は角南に止宿した。

語釋 星田・角南(河)

城中聞我大軍至、乃議戰。後藤基次・薄田兼相・渡部尙、出陣平野。大野治長・真田幸村・木村重成長曾我部盛親、相繼而出。兵各萬餘人。計邀擊我前鋒。基次乘夜潛甲而南。勝成在嶺頭。謂諸將曰、「炬火北來者、至道明寺而滅。是敵欲出我、不意也。乃嚴備以竅。而馳使告之中軍。直孝・高虎亦赴中軍。取節度。前將軍曰、「事如我意。六日昧

爽、與將軍俱發、至平岡。

訓讀 城中、我が大軍の至るを聞き、乃ち戰を議す。後藤基次・薄田兼相・渡部尙、出で、平野に陣し、大野治長・真田幸村・木村重成長曾我部盛親、相繼いで出づ。兵各萬餘人。我が前鋒を邀へ撃たんと計る。基次、夜に乗じて甲を潛めて南す。勝成、嶺頭に在り。諸將に謂つて曰く、「炬火、北より來る者、道明寺に至つて滅す。是れ敵の我が不意に出でんと欲するなり」と。乃ち備を嚴にし、以て竅つ。而して使を馳せて之を中軍に告ぐ。直孝・高虎も亦、中軍に赴いて、節度を取る。前將軍曰く、「事、我が意の如し」と。六日、味爽、將軍と俱に發して、平岡に至る。

通釋 城中では、我が大軍の到着したことを聞き、戰の評定をした。後藤基次・薄田兼相・渡部尙等は、城を出で、平野に陣取り、大野治長・真田幸村・木村重成長曾我部盛親等も、相繼いで城を出た。其の兵數は、各々、一萬餘人であつて、我が先鋒を迎へ撃たうとする計略であつた。基次は夜に乘じ、兵を潛めて南下した。勝成は、國分嶺の絶頂に居たが、諸軍に曰つて言ふのに、「敵の松明が、北の方から來て、道明寺で消えた。是れは、我が不意討しようとするのである」と。そこで備を嚴重にして待つた。そして使を馳せて之を本陣へ告げた。直孝・高虎も、亦た中軍に赴いて、指圖を受けた。前將軍の曰ふには、「すべて此方の考へ通りだ」と。六日の夜明け頃、將軍と共に出發して、平岡に至つた。

語釋 嶺頭(國分嶺の上)

勝成遣直寄重正等、赴道明寺。遇基次于片山。重正不利。直寄進擊其橫。重正反之。

兼相尙、來救基次。勝成擊尙破之。本多忠政・松平忠明、與伊達氏將片倉景綱、擊基次兼相、亦破之。大野治長・真田幸村等、自道明寺、以二萬餘騎援至。景綱與幸村戰、不利。陸奥銃隊承之。幸村卻。於是勝成與諸將齊進合擊。伊達氏銃手萩又市、射基次斃之。水野氏騎士河村新八、縱兼相亦斃之。本多松平・丹羽氏、縱左右翼、大破治長。治長尙皆走。幸村退保南阜。勝成馳使促伊達政宗曰、「公自進中軍、以備幸村橫擊。則吾追其北、不使隻騎返也。」本多忠政亦促之。政宗以兵疲丸盡辭。一柳直盛在越後部下。請進援前軍。忠輝不肯。幸村與尙、遂更殿而退。

訓讀 勝成、直寄・重正等を遣はして、道明寺に赴かしむ。基次に片山に遇ふ。重正、利あらず。直寄、進んで其の横を撃つ。重正、之に反す。兼相・尙、來つて基次を救ふ。勝成、尙を撃つて之を破る。本多忠政・松平忠明、伊達氏の將片倉景綱と、基次・兼相を撃つて亦之を破る。大野治長・真田幸村等、道明寺より、二萬餘騎を以て援け至る。景綱、幸村と戰つて利あらず。陸奥の銃隊、之を承く。幸村卻く。是に於て、勝成、諸將と齊しく進んで合撃す。伊達氏の銃手萩又市、基次を射て之を斃し、水野氏の騎士河村新八、兼相を縱して亦之を斃す。本多・松平・丹羽氏、左右の翼を縱つて、大に治長を破る。治長・尙、皆走る。幸村、退いて南阜を保つ。

勝成、使を馳せて、伊達政宗を促して曰く、「公自ら中軍を進め、以て幸村の横撃に備へよ。則ち吾れ其の北ぐるを追うて、隻騎をして返さしめじ」と。本多忠政も亦、之を促す。政宗、兵疲れ丸盡くるを以て辭す。一柳直盛、越後の部下に在り。進めて前軍を援けんと請ふ。忠輝肯せず。幸村、尙と、遂に更々殿して退く。

通釋 勝成は、直寄・重正等を遣して、道明寺に赴かせた。すると、基次に片山で出遇つた。重正は負けた。直寄は進んで、其の横を撃つた。重正も盛り返した。兼相・尙は、來つて基次を救つた。勝成は、尙を撃つて之を破つた。本多忠政・松平忠明は、伊達氏の將片倉景綱と共に、基次・兼相を撃つて、亦た之を破つた。驍て、大野治長・真田幸村等は、道明寺より二萬餘騎の兵を率ゐて應援に來た。景綱は、幸村と戰つたが負けた。陸奥の伊達氏の鐵砲組が、之を引き受けた。幸村は退却した。そこで、勝成は、諸將と一齊に進んで合撃した。伊達家の鐵砲組の萩又市は、基次を射て之を斃し、水野家の騎士河村新八は、兼相を突きさして之を斃した。かくて、本多・松平・丹羽の兩氏は、左右の翼を縱つて、大に治長を破つた。治長・尙は皆逃げ出した。幸村は退いて、南の岡を保つた。勝成は使を馳せて、伊達政宗を促して曰ふには「貴公、自ら中軍を進めて幸村が横からの攻撃に備へられよ。さすれば、吾は逃ぐるを追うて、一騎をも返さないやうにする」と。本多忠政も、亦た之を催促した。政宗は兵士が疲れ、彈丸が盡きたといつて斷つた。一柳直盛は、越後の軍部下に居た。進んで前軍を援けようと請うた。が、忠輝は之を承諾しなかつた。そこで、幸村は、尙と共に代るく殿して退却した。

藤堂高虎自千塚、南赴道明寺。其二族將高刑・良勝先進。渡邊了自爲斥候。還報曰、「道明寺囂聲、漸西漸微。是敵已敗也。」乃舉鞭左指曰、「矢尾若江有敵。」高虎使人遏先

部轉旆而左了曰「茲地沮洳請由別路」乃馳傳令高刑良勝不顧而進至矢尾堤遇敵將盛親伏堤下二人死之盛親愈進了等力戰收兵據高阜馳促高虎高虎怒其不救二將不肯井伊直孝赴道明寺亦轉而左與木村重成戰于若江堤其將長坂某曰「先得堤者勝」督銃隊奪堤據之槍隊欲進老臣菴原某曰「勿亟用槍亟用槍則敵近而勢竭」衆冒進不利敵爭蹙之菴原乃磨而進山口重政與次子弘隆奮戰被創長子重信深入斬二騎進與重成鬪而死直孝麾下繼進菴原刺殪重成安藤某取其首

訓讀 藤堂高虎、千塚より南道明寺に赴く。其の二族將、高刑・良勝、先づ進む。渡邊了、自ら斥候と爲り、還り報じて曰く「道明寺の囂聲、漸く西して漸く微なり。是れ敵已に敗る、なり」と。乃ち鞭を擧げて左を指して曰く「矢尾・若江に敵有り」と。高虎、人をして先部を遏め、旆を轉じて左せしむ。了曰く「茲の地は沮洳なり。請ふ、別路由りせん」と。乃ち馳せて令を傳ふ。高刑、良勝、顧みずして進む。矢尾堤に至り、敵將盛親の堤下に伏するに遇ふ。二人、之に死す。盛親愈々進む。了等、力戦し、兵を收めて高阜に據り、馳せて高虎を促す。高虎、其の二將を救はざるを怒つて、肯せず。井伊直孝、道明寺に赴き、亦轉じて左し。木村重成と若江堤に戦ふ。其の將長坂某曰く「先に堤を得る者勝たん」と。銃隊を督し、堤を奪うて之に據る。槍隊進まんを欲す。老臣菴原

某曰く「亟に槍を用ふる勿れ。亟に槍を用ひば、則ち敵近づいて勢竭きん」と。衆、冒進して利あらず。敵争うて之に蹙る。庵原乃ち磨いて進む。山口重政、次子弘隆と、奮戦して創を被る。長子重信、深く入つて二騎を斬り、進んで重成と鬪うて死す。直孝の麾下繼いで進む。菴原、刺して重成を殪し、安藤某、其の首を取

通釋 藤堂高虎は、千塚より南して、道明寺へ赴かうとした。其の一族の大將、高刑・良勝の兩人が、先立つて進んだ。すると、渡邊了が、自ら斥候となり、還り報じて曰ふのに「道明寺の囂々しい聲は、段々西へ移つて行き、次第に微かに成つた。是れは敵が敗北したからである」と。そこで、鞭を擧げて左を指して曰ふには「矢尾・若江に敵が居るから、其方へ向へ」と。高虎は人をして、前隊を止めさせ、旆を轉じて左に向はせた。すると、了が曰ふのに「こゝは沼池だから、別の路から行かう」と。そこで、馳せて令を傳へた。高刑・良勝は、顧みずして進んだ。驕って、矢尾堤に至ると、敵の長會我部盛親が部下を率ゐ、堤の下に匿れて居るのに出遇つた。戦つて二人は討死した。盛親は愈々進んだ。斯くて了等は力戦し、兵を收めて高い丘に據り、馳せて高虎を催促した。高虎は、了が二人の部將を救はなかつたことを怒つたが、了は承知しなかつた。井伊直孝は、道明寺に赴かうとし、又轉じて左し、木村重成と若江堤で戦つた。其の將長坂某が曰ふのに「先に堤を得たものが勝つ」と。鐵砲組を指揮して、堤を奪ひ、之に據つた。槍組が進まうとした。家老の菴原某が曰ふのに「早くから槍を使つては不可い。早くから槍を使ふと、敵が近づく頃には弱つて仕舞ふから」と。多くの人は耳をも貸さず、無暗に進んで負けた。敵は争うて追ひ詰めて来た。そこで、菴原は麾下を指揮して進んだ。山口重政は、次子弘隆と奮戦して、創を被つた。長子重信は深く入つて、敵の二騎を斬つたが、重成と鬪つて遂に死んだ。直孝の麾下は、續い

て進んだ。庵原は遂に重成を突き倒し、安藤某が其の首を掻き斬つた。

語釋 千塚(内河)

敵兵皆潰。井伊氏兵、追北里餘、其游兵見盛親、幟横迫之。渡邊了亦見赤隊來也、乃奮擊走盛親、進扼平野橋、復使人促高虎、欲邀道明寺敗兵。高虎曰、斯奴不死於死處、今何噉噉乃爾。歸師勿遏、宜速收兵。會有一監使至、了迎而言曰、陪臣敢有請。盛親雖遁、幸村等將至、要擊慶之、則大阪之陷不出今夜。使之入城、則明日之戰、又將費力焉。臣策之至熟、如和泉守弗聽、何監使然之、往說高虎。高虎不答。以日已暮、益促了收兵。了遂縱火而退。後直孝赴高虎營、賀戰捷。高虎曰、我有怯夫、多喪我良。是爲憾耳。直孝曰、僕自若江赴矢尾、見貴部一將樹席幟追敵、指揮甚可觀。斯人亦死否。高虎默然。了免胄進曰、所謂席幟、即臣也。因呼其屬兵曰、掃部君有褒詞。我輩不徒勞矣。然了終以傲謾見黜。

訓讀

敵兵皆潰ゆ。井伊氏の兵、北ぐるを追ふこと里餘、其の游兵、盛親の幟を見て、横より之に迫る。渡邊

了も亦、赤隊の來るを見るや、乃ち奮擊して盛親を走らせ、進んで平野橋を扼し、復人をして高虎を促さしめ、道明寺の敗兵を邀へんと欲す。高虎曰く「斯の奴、死處に死せず、今何ぞ噉噉乃ち爾るや。歸師は遏むる勿れ。宜しく速に兵を收むべし」と。會一監使の至る有り。了迎へて言つて曰く「陪臣敢て請ふ有り。盛親遁ると雖も幸村等、將に至らんとす。要擊して之を慶にせば、則ち大阪の陷るは、今夜を出でじ。之をして城に入らしめば、則ち明日の戰、又將に力を費さんとす。臣、之を策るに、至つて熟す。和泉守聽かざるを如何せん」と。監使、之を然りとし、往いて高虎に説く。高虎答へず。日已に暮るを以て益々了を促して兵を收む。了遂に火を縱つて退く。後に直孝、高虎の營に赴いて、戰捷を賀す。高虎曰く「我に怯夫有り。多く我が良を喪ふ。是を憾と爲すのみ」と。直孝曰く「僕、若江より矢尾に赴き、貴部の一將、席幟を樹て、敵を追ふを見る。指揮甚だ觀るべし。斯の人も亦死せりや否や」と。高虎、默然たり。了、胄を免ぎ進んで曰く「謂ふ所の席幟は、即ち臣なり」と因つて其の屬兵を呼んで曰く「掃部君、褒詞有り。我が輩、徒に勞せず」と。然れども了、終に傲謾を以て黜けらる。

通釋

敵兵は皆潰えた。井伊氏の兵は、逃げて行く敵を一里餘も追つた。遊擊の敵兵は、盛親の旗を見て、横から、之に追つた。渡邊了も、井伊氏の赤隊が來たのを見て、奮擊して、盛親を走らせ、進んで、平野橋をくひ止め、人を遣つて再び高虎を催促させ、道明寺の敗兵を迎へ撃たうとした。すると、高虎が曰ふのに「斯奴は、死ぬべき處に死にもせずして、何うして口矢答數く言ふのか。歸る兵士は止めるに及ばない。早く兵を引き揚げよ」と。折しも、一人の軍目付が來たので、了は迎へて言ふには「陪臣某、無理にも御願が御座ります。盛親は逃げましたれど、幸村等は來ようとして居ります。依つて、要擊して、皆殺に致しますれば、大阪の落城は今夜

を出ませぬ。若し、幸村等を城に入らせませぬれば、明日の戦は、又、一方ならぬ手数を要します。私は十分手段を考へ計りました。主人の和泉守が承知しませぬが、如何致したもので御座りませう」と。軍目付も、尤もと思ひ、往いて高虎に説いた。高虎は返事もしない。日は既に暮れたから、益々了を促して、兵を引き揚げさせた。仕方がないから、了は火を放つて退却した。其の後、直孝は高虎の陣屋へ往つて、戦勝を賀した。すると、高虎が曰ふには「我が軍中には、臆病者が居る。其の爲め、多くの良臣を死なせた。誠に残念である」と。直孝が曰ふのに「僕が、若江より矢尾に赴く途中で、貴公の麾下の一將が、席旗を立て、敵を追ふのを見た。懸引の安排、如何にも見事であつた。其の人も亦た死にましたか」と。高虎は、黙つて居た。すると、了は胃をぬいで進んで曰ふのに「仰せの席旗は、私で御座ります」と。そして、其の部下を呼んで曰ふには「掃部殿から御譽の言葉を賜はつたから、我輩等は決して無駄骨折ではなかつた」と。しかし、了は傲慢といふ廉を以て、後には黜けられた。

語釋 赤隊(井伊の) ○歸師勿過(孫子の) ○和泉守(高) ○掃部君(直孝を指す)

是日、榊原康勝等至菅江、擊敵將木村宗明。康勝患瘍、膿流至鏡、氣不爲撓、奮戰破之。與小笠原秀政等進赴若江。監軍藤田信吉扼之而止。少將忠直與其老本多成重等陣四條、啜在井伊氏後、皆不逮事。兩將軍聞先鋒戰酣、欲以中軍繼之。而捷報累至、効首虜於馬前。日已暮。前將軍次千塚、將軍次道明寺。下令曰「詰朝攻城先鋒

戰疾。當以他軍易之。忠輝、忠直、皆以逗留失旨。本多成重以忠直命來稟曰「明日之戰、越前兵何陣。前將軍罵曰「惰夫晏起不逮事。尙何言哉。成重等惴恐還報。且曰「君努力。忠直乃徇其士曰「明日我不先登、則先死。怖死者自此去。」

訓讀 是の日、榊原康勝等、菅江に至り、敵將木村宗明を撃つ。康勝瘍を患ふ。膿流れて鏡に至るも、氣爲めに撓まず。奮戦して之を破り、小笠原秀政等と進んで若江に赴く。監軍藤田信吉、之を扼して止む。少將忠直、其の老本多成重等と四條に陣し、井伊氏の後に在つて、皆事に逮ばず。兩將軍、先鋒の戰、酣なりと聞き、中軍を以て之に繼がんと欲す。捷報、累に至る。首虜を馬前に効す。日已に暮る。前將軍は千塚に次し、將軍は道明寺に次す。令を下して曰く「詰朝、城を攻むるに、先鋒は戰に疲る。當に他軍を以て之に易ふべし」と。忠輝・忠直、皆逗留を以て旨を失ふ。本多成重、忠直の命を以て、來り稟して曰く「明日の戰、越前の兵は何くに陣せん」と。前將軍罵つて曰く「惰夫晏起、事に逮ばず。尙何を言ふか」と。成重等、惴恐して還り報す。且つ曰く「君、努力せよ」と。忠直乃ち其の士に徇へて曰く「明日、我れ先登せずば、則ち先死せん。死を怖る者、此より去れ」と。

通釋 是の日、榊原康勝等は、菅江に至つて、敵將木村宗明を撃つた。康勝は、創が腫れ出した。膿が流れて鏡にかゝる程であつたが、元氣は少しも衰へず、奮戦して敵兵を敗り、小笠原秀政等と共に進んで、若江へ往かうとした。軍目付の藤田信吉は、無理に之を引き留めた。少將忠直は、その家老の本多成重等と共に、四條に